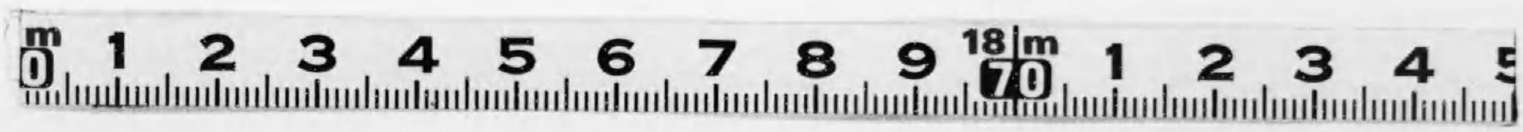
設



505-46

パウルナトルプ原著
文學士 久保正夫譯

（近世文化叢書第三編）

社會理想主義

社會教育の原理

東京 日進堂藏版

大正
11.1.17
交内

緒言

社會理想主義（Sozial-Idealismus）この言葉は、もしも理念（イデエ）と共同（ゲマインシャフト）とが人類のあひだになほ存留すべきであるならば、理念はふたたび共同へと、共同は理念へと適應しなければならない、といふことを謂はうと欲する。一の健康なる理想主義は生活にうとき「理念」の遠方へと彷徨ひ出てはならない、それは必らず生活の眞中に、格鬪せる人類の艱ましき生活のなかに宿らなければならない。もしも何ほどかの力でもそれのなかに宿つてゐるならば、理想主義は現在の人類がそのまへに佇んでゐる巨大なる課題に於いてその力を證據だてなければならない、その課題は人類にとつていままで嘗つてなきまでにこのやうに悲慘なる程度にまで缺乏せる、しかし人類にとつて空氣や營養とおなじやうに必要なるものを、共同（Gemeinschaft）を、ふたたび獲得することである。理念（イデエ）は多くの人々には何ものか世界に遠きもの、世界に關はりなきものを意味する。けれどそれは地上の生活のあらゆる暗黑のなかにも照し入る、それはいかなる人間の魂の何らかの隱れたる一隅にも眠つてゐる。理念はいまやよびさまされることを欲する、永遠に若返つた力をもつ

て、あたかもうなされたるごとく、陰慘なる、恐しさに充ちたる夢にもだえて呻吟しつつ、光と生命から遠く遠く迷ひ出てゐる一の人類のすべての惱みに對する戰ひを爲さんがために。理想主義（イデアリズムス）てふ言葉は、さまざまに誤用されたにかゝはらず、なほその好き響きを保つてゐる、それはいまなほ根本的な轉向ともつとも深き生命の源泉からの更新との大膽なる敢行を、そして――フリードリヒ・アルベルト・ランゲの忘るべからざる言葉にしたがへば――「不可能事の要求をもつて現實を根底より覆へさん」とする敢行を、意味する。しかして人にとつて社會主義てふ言葉が空虛なる慣用語にまで墮落してゐないならば、その人にとつてはこの言葉のうちに根本的更新への同じ衝動が意味せられてゐる、それはたゞ理想主義にそこから更新が必らず出發しなければならない點への、經濟、國家そして教育に於ける人類共同の建立への、より規定的な方向を與へるだけである。そのやうにして二つの言葉はたがひに倚屬しそしてたがひに說明する。理想主義は社會的に、社會主義は理想的にならねばならない。理想社會主義（Idealsozialismus）と曰つても表題は同樣に適切に聞えたであらう。しかしより內面的なものそしてより包括的なものとして理想主義を基語としそして次にはじめてそれを形容詞「社會的」によつて規定する方が正當である。社會

的生活を理念に從はしめるには、しかしながら、たゞ社會教育の一途あるのみ。それ故に社會教育はこの書のすべての研究の中心點に立つ。

そのやうにしてこの書はほぼ同時に第四版の刊行される著者の「社會的教育學」（"Sozialpädagogik." Fommanns Verlag, Stuttgart）に對して、吾々の國民の外的そして內的の全境位の深酷なる變化と西方文化一般の危機とによつて必要になつたところの補遺を與へるものである。それは民衆教育を、何らかのしかたで構成されそして擴張された方法で廣汎な民衆の群をしてより高く、もしくは最高に、教養せられたる人々の精神的財產を頒ち有せしめやうといふやうな凡庸なる意味に於いては取り扱はない、ただ人間的教養があらゆる高さと低さに於いて最後に一の不分なる全體を形つくるてふ確信にみちびかれて、それはこの人間的教養をすべての精神的なるものの統一根據に、一なる、すべてに擴充しこれを內的に合一せしむるものに、社會的教育を一つの意味ある課題とするところのものに、還元せんとする。

そこからこの書の區分せらるる七つの章の主題が生ずる。――

「すべてのものに對しての第一の豫想は「精神の自律」である。それはただに精神の完全なる獨

立のみならず、共同的生活の全體に於ける精神の支配的地位である(第一章)。すべての方面から要求せらるる社會的更新は眞劍にすべてのものの解放を、上層も下層もひとしく、すべての種類の內面的拘束からの、すべての有限的な制限に對する超限的精神的なものの無制約的優位によつての、解放を、意味しなければならない、この解放は各個人に於いて、すべての人が最後の根抵に於いてみなそれに加はる創造の原始性から、爲されなければならない(第二章)。自己の力のめさめは、靈魂の直接性と原始性の根據への還元によつて、全共同生活の一つの深き靈化(ドゥルヒゲーストゥング)にまでみちびかなければならない。この靈化こそ精神と勞働との裂かれたる婚姻をその各々に於いて新たに結ぶものである。すべての經濟的勞働を、一つの純粹に個性力の展開に奉仕する、しかして今日のごとく、むしろそれを堰きとめそして拘束するごとき諸會議支配(Rätebeherrschaft)のそれならぬ、一の新しき、純粹に精神的なる叡智政治(Ratsregierung)の輪廓のなかに嚴正に組合的に形成することは、各人をその能力の程度にしたがつて精神的自由の高みにみちびくに適した道を必らず拓くであらう。そのためには今日自からしか名つくる、しかし實はたた機械化にはかならぬ教育の正反對なる一の眞なる教育の組織を要する。ただそのやうにしてのみ今日の困難

なる危機は克服することができる。それが「救ひへの途」(第三章)である。

そのやうにして堅められた基礎のうへに次の二章に於いて社會的教育の建築はその概觀に於いて構圖される。その基礎づけはただ直接なる勞働の充實せる靈的滲透に於いてのみ存立することができる、それは家庭の典型にしたがつての自然に近き共同的生活に於いてのみ可能である、吾々はその諸制約をすべてこれのために決定的な方向にしたがつて考量する(第四章)。この基礎の上に、つぎにまつたく自由なる、組合的な共同勞働としての社會的統一的學校が建立せられやう。各人が彼の勞働とそれによつて要求された修熟を現實的に見いだし、これが彼をして彼の位置に於ける最善なるものを作業しそして創造し、自己の滿足と全體の福祉に役たつ能力あらしめること、ただそのやうにしてのみ社會的教育の意圖は充足される。これが全體の中庸なる陶冶と教育の設備の一の自由に可動的なる建築の條件である、夫は統一的學校がなほいまでも多數の人によつてしか解せらるるごとき、多かれ少かれ强制的なる教育と全たき反對を形つくる(第五章)

成熟したる年齡の豫想に於いて、「社會教育の內容」と「形式と目標」とを取り扱ふ最後の二章はそれまで展開された教育の計畫をその文化哲學的そして歷史哲學的基礎工事によつて最後の根抵

にまで深めることを努力する、それはこの書を一年まへに出た「獨逸の世界的使命」（"Deutscher Weltberuf" 2Bde. Jena. Eugen Diederich, 1918.）と密接に聯絡せしめる。簡潔なる筆觸をもつて著者はここに唯心論哲學の一つの發達の核心をなす若干の思想を展開する、最近數年の內的動搖は著者をしてそれに赴かしめた、そしてそれはまだいままで一の嚴正なる學的叙述を見いだすことができなかつたのである。この一著作は、すべての眞率に求むる人にとつての理解しやすさを危ふくしないために、この特有なるそして新しき哲學的の豫想から直ちに出發することができなかつたにせよ、しかしそれは最後にその哲學的主想に歸ることができそして歸らなければならなかつた。プラトーン以來拒むことあたはざる哲學と教育學との完全なる合一の要求はさもなくば充足されることができず、そして今日の尨大なる精神的運動が哲學に對して爲す眞劍なる要請は滿足されることができない。

翻譯者の序

パウル・ナトルプ（Paul Natorp）（一八五四年デュッセルドルフに生る）は一八八五年にマールブルヒ大學の哲學教授となつた以來ヘルマン・コーエンとともにいはゆる「マールブルヒ學派」の中心であり、ことにコーエンの歿したのちは學派の唯一の首領であつた。

彼の最初のやゝ大いなる著作 „Descartes' Erkenntnistheorie"（1882）はすでにコーエン風な批判主義の影響のもとに形づくられてゐる、そして彼はコーエンの哲學的方法を更に彼獨特のしかたで開展し、そして殆んどすべての哲學的諸分科に適用した、認識問題の歷史に關する研究や、また彼の創意的な再構成的心理學や、教育學や、精密科學の基礎に關する認識論的研究、等のいづれに於いてもナトルプは著大なる業績を殘してゐる。ことに上に擧げたうちの最後のものについては、彼の認識論的主著 „Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften"（1910）は數學及び物理學の根本概念を先驗的唯心論の豫想と一致せしめんとするものであつて、この領域に於ける今世紀の名著の一であるといふことができる。ナトルプの哲學思想全般を簡潔な要約に於い

て知るためには、彼の小著 „Philosophie, ihr Problem und ihre Probleme, eine Einführung in den kritischen Idealismus" (2 aufl. 1918.) がもつとも適當であるが、また彼の近ごろ Metakritik を附して再版された „Platons Ideenlehre" も、彼の意向に於いては、唯心論への Einführung" である、それは歴史的研究であると同時に體系的意味をもつてゐる。しかしナトルプがもつとも多量の仕事をしてゐるものは教育學の領分に於いてである、「社會的教育學の基礎づけの一節」として彼の „Religion innerhalb der Grenzen der Humanität" の書かれたのは一八九四年であるが、それ以來三十年のあひだに彼は大著 „Sozialpädagogik. 1899. (5 Aufl. 1922) のほかに各種の歴史的研究 (Gesammelten Abhandlungen zur Sozialpädagogik. I. Historisches.1907.) や大學講義用の教本や講演を出してゐる、ナトルプは更に彼が教育に於けるカントとして尊重するペスタロッチの著作の編纂刊行 (Gresslers Klassikern der Pädagogik Bd. 23—25. 1905) に盡力したほかに、ペスタロッチ研究のいくつかの周到なる著述を出してゐる——例へば „Pestalozzi. Sein Leben und seine Ideen". (3 Aufl. 1919.),Der Idealismus Pestalozzis. Eine Neuuntersuchung der philosophischen Grundlagen seiner Erziehungslehre". (1919.) このうち後者に於いてナトルプ自身の言明によれ

ば彼の多年のペスタロッチ研究はある意味での完結(Ein gewisses Abschluss) に達したのであるといふ。しかし勿論ナトルプの教育思想を知らうと欲するものは直接に彼の主著 „Sozialpädagogik" に赴かねばならない。彼の理論はこれに於いてもつともよく聯絡的に、統一的に開展されてゐる、そしてことにその第一部はこの學の重要なる認識論的基礎づけを與へる。

ここに譯された「社會理想主義、社會教育の新指針」„Sozialidealismus. Neue Richtlinien sozialer Erziehung"(1920. 2 Aufl. 1922.) は世界戰爭によつて急激なる攪亂を經驗した社會に面して一層必要になつた社會的教育の形成を說かうとする。ナトルプはこの新しい著作を、彼の舊著の提供するものをあまりに徹底的(ラディカル)としてでなく、却つてまだ充分徹底してゐないと、考へるであらう人々に推薦してゐる。しかし彼の意味する „Radikal" は何よりも哲學的基礎づけを深めることに關する。彼は、傳聞するところによれば、近ごろは彼の全哲學の、一種の「一般論理學(アルゲマイネ・ロギーク)」の、建設を事とし、それを一九二〇年の夏學期に講義したやうである、そして多分はその講義などに基づいた "System der logischen Grundfunktionen" といふ著作の出版を準備しつつあるらしい、„Sozialpädagogik" の第四版の序にもその種の著書を近く出さうとしてゐることを語つてゐる。しかし「社會

理想主義」を注意深く讀む人は、そして哲學に對する相當の理解をもつ人は、たれでも、この本のなかにそのやうな哲學體系の建設の基本計畫が、少くもその輪廓だけでも、すでにおぼろげならず光つてゐるのを見ることができやう。

人はナトルプの「社會的教育學」や「社會理想主義」を、それが教育學上の著述であるからとて、閑却してはならない。わが邦の有能なる青年のあひだには教育學に對する一つのふしぎな輕蔑がある、そしてこれが大學に於ける科目選定にもたしかに現れてゐるが、この輕蔑の偏狹を匡正されるために、同時に少くもいかなる點でこの輕蔑は意味がありそして正當であつたかを理解するためには、彼らは必らず、(もしプラトーンやペスタロッチやフイヒテのやうな古典的教育學者に赴かないとすれば)、ナトルプに赴かなければならない。ことにこれらの著述は單なる教授法や學校編制の技術等について語るものでなく、一つのひろき社會生活の認識を基礎にもち、例へばルドルフ・シュタムラーの „Wirtschaft und Recht" などとともに、マールブルヒ派の社會哲學(Sozialphilosophie)に於けるすぐれた業績を代表するものである。(つひでにいへば、シュタムラーは彼の „Wirtschaft und Recht" をナトルプに、そしてナトルプは „Sozialpädagogik" をシュタムラ

ーにdedicate してゐる。)

ナトルプには、人間的教化はただ人間的共同態に於いて可能である、といふことが前提せられる。したがつて社會的教育學は教化の社會的條件を說くと同時に社會生活の教化的條件を、共同態に向つての人間の教育をと同時に、そのなかで人間が教育せらるる共同態を說く。人間の教育を要求し能ふ社會、人間を教育し能ふ社會、しかもそのなかに生くるによつてのみ人間が彼の諸根本能力の缺陷なき、諧和的なる聯絡へと全面的に展開し能ふやうな理想的社會の眺めはそれらの理論のなかに輝いてゐる。改革者的熱情はそれらの理論のなかに流れてゐる。ナトルプは、戰爭のあひだ、交戰國の兩側に於いて戰爭の災禍をたとへ僅かなりとも能ふところに於いて防ぎそして減ずるために努力し勞働してゐた少數の實行的理想主義者のうちの一人であつたが、戰爭ののちも、彼は、彼の老齡にもかゝはらず、一層大いなる熱心をもつて人類の更生のために要求せらるる一つの生きた社會の形象を構想しそしてそれへの確かなる途を求めそして敎へつつある。それが彼のいはゆる「社會主義」の途である。ナトルプに於いて私たちは、古典的ドイツ理想主義の時代に見るやうな、もつとも明晰な思辨的能才とそして敢爲なる行的意志との結合を再び見る。私

たちは彼によつて社會主義がその今まで缺いてゐた叡智と魂を吹きこまれたのだと曰つてもいゝ。社會主義についてその概念の經濟的、政治的內容のほか知らない人々は必らずこの點を沈思するを要する。

ナトルプの理論哲學や一般心理學や實踐哲學(倫理學、社會哲學、教育學)そして宗教哲學の大要をかくことは「社會理想主義」の讀者のためには絶對に必要ではないであらう。そしてそれはことに一つの序文に許されるわづかの頁數のなかでは決してたやすいことではない。私はここにはそれを斷念する。翻譯については、教育學の專門的知識のない私は術語の使用に於いて誤謬があるであらうと思ふ、しかしもとわが邦での術語が翻譯である以上は、原術語の意味に忠實であるかぎり、多くの害はなからうと信ずる。そしてつぎに私の譯文は必らず難解といふ非難をうけるであらうと思はれるが、しかし、翻譯がいかなる難解なる原文をも必らず易解にしなければならないといふ原則はない、翻譯は註解ではない。なほその上に、讀みつつ考へそして考へつつ讀むことのできない人には何ものでも難解であらう、私は少くも考へつつ讀み讀みつつ考へることを知つてゐる人の理解を妨げるために故意に文章の意味聯絡を亂雜にするやうなことはしなかつたと斷言する。ナトルプの原文は特に考へぬ人には理解する能はざる文章である。その上にそれはドイツ語の原來豐富なる表現能力を自由に驅使してゐるのであるから、私はしなやかさのないそして表現能力に乏しい單調な日本語にそれを再現することが殆んど不可能であることを讀者に諒察されたい。

(於東京ケ谷にて、一九二二年)　　久保正夫

目次

緒言
一　精神の自律……一
二　社會的更新……三八
三　救ひへの途……八七
四　社會的教育の基礎づけ……一六〇
五　社會的統一的學校……二二四
六　社會的教育の內容……三三三
七　社會的教育の形式と目標……三八五

社會理想主義

社會教育の原理

文學士　パウル・ナトルプ著
久保正夫譯

一　精神の自律

一つのけたたましき叫びは吾々を陰慘なる、たましひを粉碎するばかりなる惡夢から苛酷なる晝の光へとよびさます。吾々が、堪へがたき緊張から放免せられて、ふたたび自己を自己のうちに捕捉しそして集注することができたとき、光と明らかさとがふたたび支配すべく思はれたとき、怪しめられたかもの救ひのごとくであつた。けれど晝が明るみへもちいだしたものは、吾々のうちなる荒んだ夢を發見したよりももつと荒んだものとして現れた。いづこにも分裂、粉碎、下にも上にも、そこに安んじて立ちうる一點だにない。何らの途はない、そしてまさしく何らの途も見えない故に、ほとんどもはや救助への何らの意志もない。

いかにしてこのやうに成り行くことができたのだらうか？　吾々の經濟や吾々の國家の建築は

堅固にそして安全に組み成されてゐたではないか？　あゝいかなる巧妙をもつて！　そしていかによき材料によつて！　充分な高さに於ける學問と技術、教育と學校は吾々の誇りであり、神精的、道徳的、藝術的能力は何處にも活動してゐた、公共の事業や法律の庇護やまた私的交通は他に比して、ことに同樣に複雜に錯綜せる事情の豫想に於いてはまだ曾つてあらざりしまで、信頼すべきものであつた、それはひとりそのやうにも平和を愛しそしていかなる勞苦と危險に自己を置くときにも問ふを要せざる勇敢をもち、勞働と秩序と教養と良俗の能力を具へ、あまりにたやすきまでに治めやすく、そしてたとへその缺陥や過誤は何であつたにせよ、しかし全體に於いて私益を圖らずしてただ普遍的福祉に奉仕せんと欲した人々によつて治められてゐた一つの民族にとつてのみ、可能なものであつた。吾々はそれによつて榮え、そして偉大にそして力つよくならなかつたか？　それほど強く、されば吾々のまはりの世界はそれをもはやより以上默視しがたいと、自己をそれに對して防衛せねばならないと信じた。吾々の緊張せる力の感情に於いて吾々は戰ひを承諾した、吾々は一つの世界に反抗した、吾々は今日なほ反抗してゐたであらう、もしも吾々が不幸にも絆されてあつた同盟の伴侶たちが脆弱になりそして吾々を彼らの失墜のなかへとともに引きずり込まなかつたならば。またさうであるとしてもすべては必らずしも失はれてあるはづ

はない、まだ吾々は若干のたしかに苛酷なる損失のあひだにも吾々の棲家を救ひさして其なかに一つのつつましやかなる、けれどより堅固なるそしてより健康なる生活を築くべく希望することができた、まさしくドイツ人の任務であり滿足であるところの生活、まへよりもより純粋に内的自由に於いて勞働と秩序と教養とにささげられたる生活を。しかしいま吾々は認識せねばならない、それさへもありえぬであらう、そのためにはただに外的條件のみならず更により以上に内的條件が缺けてゐる。吾々はみな、上下の別なく、これに對しては何らの意味に於いても武裝されてゐない、準備されてゐない。建築全體は空虛でありそして基礎がなかつた、まさしく内的支持が缺けてゐた。たとへその見かけの堅固さを克服するためには、今日もなほ、外部からの一つの非常なる力つよき打擊を要したにせよ、それは必らず倒壞せねばならなかつたのである。吾々は吾々の値した苦しみを受けてゐる、吾々は吾々の過去の全重量を荷つてゐる、しかし吾々の過去が何らかの善きものを藏してゐたとしても、そのすべては希望なき、ただ拘束の力を增大する抵抗によつて消盡され、否滅され、死滅せしめられるかのやうに見える。吾々の勞働の平和から、すべての存立せる秩序から、引きはなされて、また吾々の教養や教育組織の誤り信ぜられた健全さについて失望しつつ、それがしかしなからこれらすべてについて罪なきものではありえぬことを

思ひつつ、吾々はいまや徒らにそのすべてを再興すべく、否、よりよきもの、より確かなるものをそのかはりに建立すべく、安らかに支へ能ふ地盤を求めてゐる。故郷への愛、吾々の未來への信依、吾々の「子孫の國」さへもひろき民衆のなかに消え失せたやうに見える、かつてはそのやうに活潑であつた創造の衝動は麻痺し、すべての協同の感情の恐るべき軟化とすべての根本的なる良俗の腐敗とは人が歩むところにまた立つところにいづこにも自己を暴露する、すべての精神的そして道徳的價値に對する輕視、ほとんどすでに憎悪は、かつて吾々のあひだに於いて人が知らなかつたものであつたが、ここに現れてゐる、それらはただそのすべてが公けに拒まれてゐるといふことからのみ理解できる。そしてそのやうにして打ち見たところには破壞の憤懣と、ただけふからあすへとほとんど生活とは名づけられるに値せぬ一つの生活を延ばさうといふ荒んだ衝動とのほかに、何も殘つてゐない。束の間の安心の一呼吸や、つひに獲られたる内的解放の春めいた豫感はみじめにも幻滅に委ねられてゐる。そのやうにして人は何らの自由をも獲得しない、人は一般にそれのために求めたのか？ただあまりにあきらかに、却つてむしろ強められて、古き根本的誤謬、事物に對する全く謬つた態度が支配してゐる。おなじ愚かなる驕慢、おなじ自己の力の過大視、期待すべき抵抗の過小視、それは數學的な確かさをもつて外的慘敗を招いたものである、おなじ根本的にドイツ的な、しかしドイツ人にとつてその謂ひ現しがたく善信的な忍耐に於いてそれたけますます危險なる、挑戰的な威力と勢力の妄想は、吾々を地球上のすべての憎みと詛ひにまで貶したのであるが、今やただあまりにたしかなる效果をもつて、吾々の希望をつないだ内的勝利をも徒らにし、吾々の最善にして最後なるもの、吾々を救ひ能ふ唯一のもの、内的自由に於ける勞働と秩序と教養との意志と可能性をも根柢まで破壞し。吾々をもつとも近き道より、飢餓の苦しみや、國家破產や敵軍の侵入によつて生涯の永き隷屬にまで導かうとしてゐる。生涯にかけて？ 吾々はまだ抑も生きてゐるのか？ まことに、民族の死を一般に信じ能ふものは、今日は殆んど吾々の民族に死亡證を與へるほかはないであらう。それでは吾々は死ぬべき罪を犯したか！ たしかに罪を犯したであらう、しかし死ぬべきものではなかつた。吾々は他のものより優つてよくはなかつたとしてもまさつて惡しくはなかつた。吾々は包圍されてゐた、十年以上このかた吾々は、外國の新聞紙がしはしば叙べたとほり、四面から死の武器が吾々に向けられてゐるのを見てゐた。氣遣ひなく吾々の權利と、吾々の健やかなる力を恃みつつ、吾々は決戰へと立ち、力つよく防ぎ、殆んと勝つた、——そして決してあたかも貴き品位ある闘ひに於いて

はもつとも勇敢なるものも優れる力のまへにつひに武器を引くごとくにではなく、ただ一匹の狂犬を撲殺するがごとくに、倒れた。吾々の腕の力のみでなく、吾々のたましひに打撃は命中せねばならなかつた。それが命中したか？　殆んと吾々は自らそれを信ずるかのやうに見える。

そしてしかし、さうではない。一つの偉大な民族が死ぬことができるかといふことは、たしかに信仰の事柄である、それは經驗によつて說明せられない。生や死は證明すべき事柄ではない。自己を生きてゐると感ずるものは、生きてゐる、それのうちに生命を認めえぬものも、しかしそれ故に必らず死んでゐるとはいへない。しかるに吾々は生きてゐるのを感ずる、吾々の內的な證據だては吾々に謂ふ、吾々はなほ吾々のかつてありしものである、と。むしろ、吾々はたしかに他のものとなつた、ただより深く、より固有に、よく親しく、すでに永く吾々のうちに萠芽してゐたものがいまや吾々の力で抑へがたく生命へと迫つてくる。まさしく今、すべての僞はりの、わがものならぬ輝きが吾々から剝がれたとき、それは光明へと滲透せんことを欲しそして滲透するであらう。

吾々はまだ理念の民族である。もしドイツ人が南國人の熱辯やフランス人の大げさな身振りや、

ロシア人の爛醉せる、しかし爛醉に於いてもなほ眞率なる神的狂熱を自由に驅使しえたならば、その詩人や藝術家は今日ドイツ人を殉教者として、百千の槍のまへに美しき軀を暴露しつつ、けれどまなこを輝やかせて彼の信仰の星へと擧ぐる殉教者として、描くであらう。何故なら、星は彼にとつてはまだ消滅してゐない、それらはもつとも屈したるものにとつても、否私は敢へて謂ふ、またすべての外的秩序の粗暴なる破壞者にとつても、まだ輝いてゐる。ただ他のものと自己のまへにそれをもつて誇負することは、吾々にとつて根本的に過ぎ去つた。それは吾々がそれについて多く語るには、吾々の裡にあまりに深く生きてゐる、それは、いまもなほ、吾々の救助者であるよりは吾々の審判者である。しかしそれは吾々のうちに生きてゐる。その證據は吾々の大膽なる自己判決である。さうではないか？　一つの毒を食はせられた獸のごとくに吾々を蹂躙せんとする敵の憎みや貪慾を赦し、吾々はすべてを贈り與へる、しかし吾々みづからには何も取らない、たとへいかなる告訴が吾々に對して提起されやうとも、吾々はより苛酷なる告訴を自ら提起する、そして吾々みづからに對する激情的な憤怒に於いて、敵らのことさらに鼓舞されたる熱狂さへも敢へて宣告することを躊躇する死刑を吾々みづからに宣告する。

多くの、內心では同樣に感ずる人々はあるひは事物のそのやうに狂熱的な見かたについて頭を傾けるであらう、彼は發展の合法則性や、歷史的唯物論の大いなる假想的定理（それは原理ではない！）を固執しやうと欲するであらう。けれどいま發展（Evolution）は革命（Revolution）を引きだしたかのやうに見える。ただすでに包藏されてあつたもののみが展開することができる。「汝のあるところのものになれ」、といふことは個人に對しても、また同樣に民族や人類に對しても曰はれる。時間のなかへと自己を生みなすところのものは必らず永遠に在るものでなければならない。"人はいふ、まことに、永遠なものは物質のほかに何もない、と。もしさうならば、物質は永遠にただ――物質すなはち可能性であるであらう。ただ勢力のみが可能性を現實性にまで發展させる事ができる、それは近代科學に於いてはまつたく物質に取つて代りそして物質に對して永遠として妥當する。しかしそれとても畢竟ただ計算の因數である、それは勿論同一的として固定されねばならない、何となればたださうしてのみ一の計算は開かれるからである。「眞の最後のものはまた勢力でさへもない、夫は諸民族の思念が精神そして神と名づくるところのものである、プラトーン風にいへばそれは、創造・生產、Poiesis である、無限的なる、超限的なる根抵から有

限的なものを形成することである。かゝる無限の根抵からたしかにそれは出なければならない、さもなくば、その概念にしたがつて、それは疾くに終つてゐなければならない筈である。これこそ「理念」の意味するところのものである、そしてそのやうにして理念は一つの實在根據のうへに、すべての有限性の根據よりも深く、まさしく無限に深く、安住してゐる、ただこの根抵をもつてのみ勿論科學はその技巧の全體であるところの、計算を爲すことができる。この根抵の上に吾々の信依、理念の信依は、物質や勢力の權利を傷つけずして、立つてゐる。單なる計算者にはそれは勿論愚味であらう、彼には理念は單に妄想を意味する。しかし生きてゐるものは己のが裡にそれを知つてゐる、一の勿論捕捉する能はざる、まつたくただ內面的なる、しかしまさしくそれ故にそれに對して何らの外的な力が何らかのものを加へることのできないものを。そのやうにしてそれは吾々の裡に生きてゐる、何よりもまづ吾々の青年のうちに、ただに「敎養されたる」青年に於いてのみならず、多かれ少かれ意識的に・全體のなかに、然り、くりかへしていへば、またもつとも狂熱的なる破壞者のうちにも。彼らはたしかにただそれ故に破壞に於いてそのやうに妥協を憎み、殆んど思慮を憎むのである、何となれば彼らは彼らがただ不明瞭にではあるが聞きとる

しかし彼らの從はざる能はざる、理念の聲のほかに何ものにも聽從することができないからである、彼らみづからいかなる途によつて、いかなる目標に向つてであるかを豫感しないけれど。

しかし理念を仰き見るのみでは何も行爲されない。理念は吾々に輝やく形象に於いて、吾々の建設すべき建築を示す。吾々が乞食のごとく建てるとも、王者のごとくに建てるとも、それは堅固に存留せねばならない。しかし建て上げそのことはその上にのみ吾々が建築しあたふ地盤の支持力の、そして使用さるる材料や力の精密なる計量を要する。建て上げは思慮深き誠實さに於いてあるところのものについてと同樣に成るべきものについてのもつとも練達せる認識のうちに爲されねばならない。何よりもまづ科學と教養とは保存されねばならない。否單に保存されるのみならず、測りがたく深められ、今までよりも一層國民の生活の全體と、その過去と現在とのみならず、その未來の全體の直接な關係に置かれ、その未來は、その根本的特徴に關しては一つの開かれた書卷のごとくに國民のまへに公開されて横はらねばならない。

何となれば科學と教養は決してただ自己にのみ責任あるものではない。それらがただ一つの健康なる經濟と健康なる國家の地盤に於いて存立しうると同樣に、それらは兩者に對して本質的な

支柱を提供する職責を有する。人は科學と教養の政治化（ポリチゼールング）を要求する。しからばその政治化は、それらが單に在るがまゝのそれでなく、成るべきところの、市國（ポリス）に對する自己の義務に想ひ到ることでなければならない。人は、古き宗教が根抵に於いて動搖し、ひろき民衆の範圍にとつてはもはや存在しない故に、一つの新しき宗教を要求する。しからばその宗教は各人が自己とすべての他人相互に對する無制約的內的眞率と誠實の宗教であれ。人は、すでに說教されなければならないならば、すべての民衆にこれを說教せよ、「汝は汝を外より助くる何らかの神を待つな、ただ己のが胸のなかなる神の聲に耳傾けよ、その聲は呼ぶ、これは眞なり、これは眞ならず、これは貴くそして人間らしい、これは平凡そして人間の品位に値しない、と。ただ光と眞理が一ならしめる、非眞、曖昧はそれなしには何らの救ひなきすべての協立の可能性を破壞する。

だれかしかし導くべきか！　共通にすべてのものに必要なるそして可能なるものの透察の高みに立つものこそ。帝王が哲學者にならうと欲しなかつた以上は哲學者が帝王となることに滿足せねばならない。それでは科學と教養の先頭は？　しかし何處にそれがあるか？　大學に？　大學は眞にそのやうな高みに立つてゐるか？　たしかに研究と研究に就ての學說とに關しては。安靜

と明晰とがふたたび歸つてくるときにはじめて、人は科學の勞働が吾々に於いて戰爭のあひたにも休まなかつたことを、却つてほとんど他の數世紀のあひだにも熟したことのないとの果實を產んだことを認識するであらう。ただ一例を擧げればアインシュタインの相對性理論の偉大なる發見を人は思想の世界歷史に於いてただまつたくわづかのもののみがこれと比肩しうる一つの業績として理解するであらう、それは精密科學のあらゆる嚴正さに於いて同時に匹儔少なき哲學的深さをもつ一つの業績である、何故ならそれが與へるただに空間と時間と物質についてのみならず、法則や事實や、有限や無限についての全く新しき解答は哲學のあらゆる謎問に觸れ、そしてその背後に宗教の公けの秘密が展開する門戸にまで近く迫つてゐる。そしてしかしながらまつたく理由なしにではなく全民衆のうちに鋭くそしてつねにますます鋭どく感知されてゐるのは、科學の勞働がいままで民衆の生活からあまりに遠く離れて立つてゐたことである。諸大學がたゞその他の學問的階級と生き生きした內面的な接觸をもつてゐなかつたことのみではない。彼らの位置は民衆の精神的生活の全體に、民衆の政治的そして經濟的需要に對して、まつたく緣どほきまゝであつた。精神的指導はむしろまだアカデミツクならざる著作家の手中にあつた。しかしまたこれ

も實際はたかだか廣く散在してゐる讀者のわづかな一階級に對して指導的であつたにすぎぬ、そしてこれらの讀者らは彼らの讀んだものが生きてゐる人々の、一つの全たき青春の力をもつて生活へと迫りゆく大いなる民衆の、生命的問題に何か關係してゐるらしいといふだけしか考へないやうに見えた。それ故に一つの眞の內的統一は、すべてが何らかの合一をばあきらかに求めやうと欲しない百千の特性へと離散したために、築くべくもなかつた。かくのごとき未來は指導の位地に召されてあつたはづの諸勢力が脫退してゐたことは、夫自身個人が全體へのあらゆる顧慮をはなれて爲す競爭と敢行にもとづく社會的建築の普遍的不健康の一結果であるが、それは特に鬩ひ多く作用せずにはゐなかつた、何故ならそのやうにして救濟へと導くことのできた思想の若干が存在したとしても、國民の全體に對しては教育的にはたらきかけることができなかつたからである。またいままでも徹底した理論や、高揚せる直觀の勇氣と力とは缺けてはゐなかつた、それらはあるひはまへよりも一層强く存在してゐたかもしれない、しかし理論はただ理論のために存在するやうに見えた、直觀は直觀のために、「藝術は藝術のために。」それはいつまでも同樣な循環である、健康なる社會的生活形成がはじめて意志の決斷力を正しき透察にみちびくであらう、こ

の生活形成を、その條件が普遍的にはよく知られてゐる健康な生活形成を、生命のうちに事實に導き入れるために必要なる人間を生産するであらう。いつまでもさうであつてはならない。それがさうでなくなるには何が、何が爲され能ふか、必らず爲されねばならないか？

これはまたもはや信仰のことがらではない、必要なる人間もまた存在する、その反對なる見かけの事實にかゝはらず。重要なのは彼らが眞劍なる、その正しき處に突き込む行爲へと途を見いだしそして合同することである。ひろき、自由なる、眞理へと、民衆と人類の福祉へと向けられた教養と科學の負擔者が協同の合議に於いて國民の精神的道德的生活の一つの根本から新しき全建築の設計を、その經濟的そして政治的基礎と一致するやうに、構圖しそして彫り上げるべく、合一しなければならない。それははじめはただ少數の志あるそして能力ある男子そして婦人でもいゝ、さうすればこれらの人ははじめはまづいくらかの最高の方針について了解することができる、次にはすべてこの方針に同意しそしてそれにしたがつて全體の計畫の精密な實現に力を協せることを欲しそして協せあたふ人々を集めるために一つの呼びかけをもつて進出することができる。この計畫は一つの國民教養組織の根本法則の設定にまで重厚にならねばならない、この根本

法則はすべての諸主要部分に於ける特別な解決に照して檢討せられて、立法的委員會の精密なる建設にまで擴張せらねばならぬ。合議に參與するものは必らずこれこれでなければならない——大學其他の高等なる學校の、一般に學校の、代表者、諸種の目的と特質ある陶冶及び教育の組織、幼稚園や幼兒保育や、看護教育、そしてまた成年者の自由な教養、公民的及び技藝的そして徒弟的教育の機關の全體、大學的及び非大學的青年會のごとき青年聯合の代表者、職業聯合や一般にすべて何らかの職業への養成を目的としその練熟と教育とに與かる會合の代表者、全圖書館設備の、そして公衆衛生や性的保健や住宅及び土地改良、田園都市、地方振興、民衆藝術の保護等に向けられた努力の代表者、勿論文藝、全著作業、諸藝術、劇場、最後に宗教的秩序の代表者、を黨派的地位の差別なしに包容せねばならない。それは精神的勞働の中央委員會(Zentralrat der geistigen Arbeit)である。それはいかなる官憲的影響からも獨立に、政治的議會から獨立に、男女の差別や更に年齢の外的生活の位置のあらゆる顧慮から獨立に組織されねばならぬ。何故なら特に注意すべきはただに教へるもの、教育するもののみでなく教へや教育の客體もまた發言しうるやうにすることである。人は乳兒をさへも除いてはならない、もし彼らが感知の能力をもつてゐた

ならば、されば母達は乳兒らのために證しを立てねばならぬ、決して彼らは缺けてはならない、そして實にすべての生活の階級そして範圍から招集されねばならぬ。家庭生活と家庭教育の保健のための配慮は必らず會議の一つの重要なる點を形つくらねばならない。しかしもつとも强大なる重量は、この教養組織がそのやうにも廣汎に分枝したる各部分の嚴正なる統一に於いて眼中に置かれねばならないといふことに、かゝるべきである。それによつてこそかく考へられた合一は一つの單なる學校會議や、さきにあげたもしくはなほ言ひ洩した諸分枝の一もしくは若干を包容するにすぎぬ各種の特殊的會合と區別せられる。これらの學校會議や特殊的會合は單獨に豫じめ會議しそして確定した提案を各々その領域のために携へてくることができやう、しかしそのばあひ彼らはそれらが始めから全體に於けるそして全體のための作用について考慮されるかぎりのみ顧慮されることができやう。

すべてのことはかく考へられた委員會が充分はやく實現され、憲法制定的委員會に對して勢力を獲得し、急ぎすぎた制定を避け得るやうにし、本質的な決定を、ここに眼中に置いたごとき自已の、尨大なる課題の各方面を根本的に考量する、發言能力ある練達者の會議によつての、充分精

密なそして獨立な檢討によるまで延期することのできるやうにするために注意せねばならない。これにとつて重要なのは中央會議の構成員の若干が同時に憲法制定的委員會に屬するやうにすることである。しからば政府とは諒解ができ、政府の構成員は會議に參與することができる、しかしそれは何らか特別な地位に於いてでなく、すべて他のものと同列に、彼らの發言について、彼らが他人を自由に確信せしめることによつて自からに與へるだけの力を證據だてうる以上に何ら他の權威をもつものでない。

何故ならすべてはまさしく教育に對する精神的勢力の完全なる獨立に依るのである。それ故に一つのかやうに完全に自律的なる精神的勞働の中央委員會は一の常設的のものとならねばならない。そのやうにのみ純正なるデモクラシーは解せられねばならぬ。それは、直接なる投票によつてであれもしくは代表者によつてであれ、事物の理解なき多數が決定する事ではない、ことに代表者によつてのそれは、政黨に分割せられてただ一の新しき、つねに新しき、それ故に重大なる事態に於いてはしばしばそれだけますます理解なき官僚として作用するからである。ここではデモクラシーはもつとも嚴正なる、すべての經濟的そして政治的黨派的顧慮からまつたく獨立なる會議

にしたがつて、ただまつたく練達者によつて、そして能ふときはすべてその事柄についての最高の透察をもつものによつての法則制定の加工である、このやうな制定はつぎに明瞭な、確固たる基礎つけをもつて、最後に決定する會議體をもつて、すべての重要なる場合に於いてはしかし直接なる決定をもつて全體の發言權ある民衆のあひだに擴張せられるべきである。そのやうにして人はあるひは希望をつなぐことができやう、先に見いだされ、明晰に言明されそして動機づけられた眞の練達者の決定に對して各々の理解なき干渉は沈默するか少くも侵入しえぬであらうと。そのやうにして各々の精通者の代表會議はまた經濟的そして政治的問題（管理、司法その他すべてこれらに屬するもの）についても考へられる。政黨の支配とそして支配爭鬪との弊害はそのやうにして、そして余が認識しあたふかぎりでは、ただそのやうにしてのみ、除き去ることができる。勿論黨派の別は殘留しやう、しかしそれらはそのときにはそれら自ら、より根本的な練達をもつて仕事すべく餘儀なくされ、いままでのごとく標語や暗示や各種の作爲をもつて、粗暴なる暴力の使用をもつてまで仕事することはできない。それが何故また經濟的そして政治的事物についても不可能であるといふのかは理解することができない。これについても實際的練達がありまた

科學がある。しかしいづれにしても教養の問題に於いてはそれは必らず可能である。たしかにドイツの民族のなかには――たしかにまた他の民族のなかにも、しかし私は今それを問はない――精神的自由への一つの強い衝動が生きてゐる。それはただその內的自由をそのあひだに保ち能ふと信ずるかぎりはあまりに安んじて外的隸屬にも自己を適應せしめる。されば精神とすべての精神的財產の營みとの完全なる解放と自由維持のための常備的代表會議は全民族に於いて、もしその代表會議が自ら餘すところなく自由の精神によつて充實されてゐるならば、たしかに民族の一般的信任を獲得しそして他の外部的經濟的もしくは政治的勢力によつて狹隘にされることを氣遣ふ必要がないであらう。

社會的教育の視點のもとに於ける國民的生活の全建築がいまやいかに形成せられねばならないかは、この先きの考察の對象を形つくるであらう。ここにはただ若干の指針（ヒントリニュン）を揭げやう、それらの指針は全體の建築のために、したがつて教養的組織の全體の共同的課題のために、今日のみならず、恒久に、決定的であるものでなければならない。

第一に要求すべきは、中央委員會の現在の仕事のために先に要求したところのものである、そ

れはまた一般に教養的及び教育的組織の全體の指導と恒常なる改善のために標準を與ふるものとして存留せねばならない、それはすなはち教育組織の、すべての外的なる經濟的なもしくは政治的勞力からの完全なる獨立、現在および永遠に對して、教養組織の無制約的、自律である。

たしかに經濟や國家は教養組織の秩序づけにあたつて又ともに發言すべきものをもつてゐる、それらは教育に對して提出する一定の要求をもつてゐる、それはそれらが存立しそして教育に對してそれを缺いては存立することのできぬ支持を提供することができるために必要である。たしかにこれら社會體制の三つの根本機能、經濟、政治的形成、社會教育、はそのすべてに於いてそして各々に於いて完全にそして精密なる考量に於いて相互に滲透せねばならない。けれども何らかの狹小なるもしくはより廣き特權づけられた階級のためにでなく、全民衆の最微の一員のためにまでの、人間の品位にふさはしき內面的生活形成の要求は、無制約的に最上位に立たねばならず、そして經濟的そして政治的秩序の形成そのもののためにも、それらの各々の固有の制約の充分なる尊重のもとに、つねに基礎となりそして最後に決定的でなければならない。何故なら人間はただに經濟しそして政治的に會議しそして行爲するために生きるのではない、却つて經濟や政

治は畢竟使役せらるる器官として人間に、すなはち內面的生活形成に、隷從しなければならない。それらが精神にではなく、精神がそれらに命令しなければならない、しかし精神自らは、精神自ら以外に何ら他の最後の調整者に屬してはならない、それは自己をただ自己に對して、創造的守靈（シェニウス）に對して、科學と科學批判の方法にしたがつて、意志の立法と更にその哲學的批判にしたがつて自由なる創造の立法にしたがつて、義しとし能ひそして義しとすることが許される、そしてこの自由なる創造さへも、つねにそのやうに自由の上に置かれてはゐるものの、法則と批判から決して乖離することができぬ、そしてその批判はしかしながら、認識や意志の批判と同樣に、ただ自己批判であることができ、自己批判たるほかは許されない。ただ一の純粹なる自律的教養體制の組織に於いてのみ、何らかの外的規約によつてでなく、ただ事柄の論理的强制によつて、根據づけられた眞理の重みによつて、精神的行爲の唯一拘束的證明によつて、精神自身にそれにのみ歸すべき指導力が實際手中に入るであらう。吾々の民族はしかし精神を敬ひそして愛する、それは精神を、己れが自ら意識してゐる以上に、自己のうちに荷つてゐる、それは精神を認識し悅んでそれに聽從するであらう、精神がそれのまへに何らかの階級や族閥の特權の從はれる要求やまたは

經濟的そして政治的黨派やまたは官僚的庇護の僞はれる要求によつて變形せられずして現はるるときには。

經濟や國家秩序の側からの要求がこのやうな教育的組織の自律に於いて損害をうけるかもしれないといふすべての憂慮は根據のない事である。むしろさうしてこそ兩者は自己をそのうへに於いてのみ堅固にそして安全に安んずることのできる基礎のうへに築きあげることができやう。社會的經濟、社會的國家はまだまつたく存在しない、それらが人間を創造することはできぬ、人間こそそれらを創造することができる。人間は、しかし、すなはち教育である。社會的教育とはこれを謂ふものである、それはすでにできてゐる社會（ソチエテート）が教育をでなく、教育が永久に完成せざる、永久にただ成りゆく社會（ソチエテート）を構成し、それを教育がまつたく固有の地盤のうへに自己を築くことによつて爲すことである。吾々はそこからただ徹底した歸結を引き出すのみである。

そこから經濟の方面へは第一に次のことが生ずる、社會の精神的構成へと向けられた全體の企圖とその遂行に對しては、何らかの一時もしくは恒久に存立すると稱する經濟的必然性への固定的拘束によつて、何らの制限も設けられてはならない。卒直にいへば、國民の教養の問題に關す

るところでは、貨幣は何らの役目をももつてはならぬ、何故なら一般に「人間であること」の必要以上に何らより急迫せる必要はないはづであるからである。何故なら、生きることが必然的ではない、さうならばなぜ生命はそのやうに粗暴に濫費されるのか？　人間的に生きることこそ必要なのである。吾々の民族がなほ數十年、恐らくは數世紀のあひだ、苛酷なる窮乏と格闘せねばならないであらう事を看取しないほど、盲目なものがあらうか？　民族にとつてそれは溢るるやうな過剰の時期の後では一層困難に感ぜられやう。しかしまさしく非常に多くの、誤つた習慣によつて假想的に不可缺になつた外的裝飾や生活の享樂の斷念は民族にとつてただそれがその生活を內部から精神的自由とそして充實せる純粹なる靈魂の愉悅を基礎として新たに、そして比類なくより豐富に、築きあぐることによつてのみ堪へらるるものとなり、一般に內的に可能になるであらう。幸ひにも精神の財產は經濟的にはもつともたやすく獲得さるるものである、それらはつねに獲得される、人はただ意欲すれば足りる。それらはなければならぬ、ただに吾々が經濟的にそして政治的に失つたものに對する報償を——報償以上を——造るためにのみならず、ただ測りがたく高められた精神的道德的そして藝術的文化のみが吾々に殘されたものをもつて吾々の外的經濟的政

治的生活を一つの堪へやすき狀態にふたたびもたらすことを可能にするからである。精神は創造である、創造することに慣れて、それはまた自己の住む家をもしつらふことを知つてゐやう。外的豐富のなかに游ぐものは精神を事缺くことができやう、外的財產について貧しきものは精神を貪らねばならない、彼は精神的充足てふ奢侈を自己に許すことがでなきい。それ故にもつとも困難多き外的條件のもとに於いても必らず經濟の施設は根本的なる、單に一の偏惠に浴する上層のみに限られざる民衆の最微の一員にまで及ぼさるる、精神的、道德的、藝術的そして宗教的教育に必要なる手段を吝まず提供することができるやうに、そのやうに形つくられねばならない。それは決して人の考へるほどには經費を要するものではない。精通者の計算によればたとへ國民的教養組織の完全なる形成のための高遠なる計畫がいかに多くの費用を要求しやうとも、またたとへすべて他のものが變せられずに殘されたとしても、單に無用であるのみならずそれ以上に有害であるもののための、殊にいままでの樣式に於ける軍備のための、在來の經費ほどには嵩まないであらう。そのほかになほ吾々は酒類、煙草、活動寫眞、寄席藝當その他百千の、ただに生活を高めずそして裝飾せざるのみならず、甚しく傷つけそして醜惡ならしむる事物に對して、利得を目

蒐くる資本が、あだかも生活を根柢まで荒廢させ、困難にし・醜くくする以外に何らの文化課題がないかのごとく、自己を投じつつあることを擧げねばならない、それはすべてただ利得のためである、しかも實はその利得を何人も、利得者自身さへ、享受はしない、何故なら彼はそれには時間をも精神をももつてゐない、彼はただ利得せねばならずそして利得は精神を空費するからである。一たい經濟の初等の九九のうちにこれを疾うに數へて置かなければならなかつたのである、それは實際たゑず曰はれはしたがしかしかつて行はれたことのないのであるが、すなはち、國民の內面的教養の高上のための出資はもつとも利潤多きものである、それは自動的にすべての國民的勞働の收獲を高め、そして福利多き循環に於いてただますます新しき源泉を開き、そこからそれは自己とそしてすべての經濟的勞働とを償ふのである。

精神の富がすべて奇異にもそして悲しきことにも多く富といふ言葉に於いて意味せられてゐたものを、すなはち利用せられざる、單に背負ひ運ばれたる、結局重荷として壓迫する物件的所有を悅びをもつて斷念する、といふことをいふのに多くの言葉を要するだらうか？　一人の學者や藝術家や發明家や企業家は、彼の業績のみによつては、外的財に關してはすでにいままでしばしば

一人の熟練なる職工もしくは會計士より以上を、もしくはたゞわづか多くしかもうけはしなかつた、しかしたれがこれらの人々が純粋なる、內面的なる滿足について、まさしく生活について、限りなく豐かなる生活を生きてゐるといふことを疑ふものがあらう、それにくらべれば他のもの、その所有によつて所有されてゐるものは、本來は殆んど生きてゐるものといふことはできぬ。それはただ機械の一片、もしくは計算の一桁のごときものにすきぬ。かう曰つてゐるときにも、多くの人々が決して無意味なる享樂の欲望からでなく、純粋により大いなる能作の能力をめがけて、更にひろく擴張する創造をめがけて、貨幣と權力を欲求しつつあることを看過しまたは忘れたわけではなく、いはばこのことはまさしく豫想されてゐる。かゝる努力はその充分な權利をもちそしてそれを保つことができる。しかしそのときには目的は最後には彼のではなく、全體そのものの目的である。全體は能力あるものが自己にその能力によつて指定されたる自由なそしてひろきはたらきを可能にするやうな位置に達することを配慮する。もし彼が眞率にそれを努力するならば彼はそれに於て彼の業績に對して願望されたる報酬を見いだすであらう。吾々はまさしく吾々のもつとも勤勉なる工業指導者、大商人、大地主または學者、藝術家、裁判官、醫師、官吏、政

治家等について、彼らがこのやうな心術に於いてすでにいままでも、勞働したであらうと、そしてもし彼らが測られぬほどの私得について斷念しなければならないときにも何らか彼らの勞働を等閑にするごときことはないであらうといふ充分な信頼をもたねばならない。もしそれがなかつたなら、もしくは充分な程度に行はれてゐなかつたのであるなら、それだけますます社會生活のそして第一に社會的教育の新らしき形成はまさにこの純粋なる心術をすべての裡に植ゑつけそしてつねに覺醒せしめておくことに向けられねばならない。少くもすでにいま普遍的に感知せられるべきことは、財產あるものにとつては國民的教育組織の自發的促進のためにする以上に彼らの所有をより高貴に使用する方法がないことである。

つぎに教養的體制の政治的秩序即ち國家、組合(ゲマインデ)及び教會に對する關係が原理的な考察を要する。すでにいままでに曰つたことによつて謂はれたことであるが教育的組織は中央集權的に秩序づけられてはならない。中心的指導は普遍的要求以上のものを提供してはならない。全體の、まさに根本的要求にしたがつて全く自由な自己規定にもとづくべき實行はできるかぎり廣汎に散布せられ(ディフェントラリジーレン)ねばならない。また政治的もしくは教會的組合も(ことにその官僚的代表によつて)最後の決定を

與ふる裁決(インスタンツ)であつてはならない、學校に關しては、デルプフェルトの意味に於ける固有の「學校組合」がそれでなければならない、しかし彼がこの概念に與へてゐる偏狹に宗教的な意味は除かれねばならぬ、すなはち、學校とそしてこの概念に對當するしかたですべての教育的體制は、例外なく、直接なる實行の全體に關するかぎり、直接に關與する人々自らによつて、すなはち組合的（Genossenschaftlich）に、政治的にでなく、秩序づけられねばならぬ。すべてに於いて原理的に第一には直接に協同して勞働してゐる人々自らが、第二次にそれらの人々の上に位するより包括的な、しかし同樣に政治的組織から獨立な教育的體制が、まづ町村の、次に地方的の聯合に、つひに全國家的なるしかしそれ自身國家的でなくただ自發的な教育委員會にいたるまでが、そしてこれらの次にはじめてすべての公民的なそして教會的秩序が、本質的にはただそれらが提出する特殊の要求に關して發言するやうにされねばならない。そのやうにして殆んどすべてが自己配慮と自己活動の上に、ほとんどまつたく外的な指導と規制に俟つことなく定立せられるであらう。それに於いては、かくのごとく勞働が爲されそして普遍的に全體のために必要なるものが創造せらるることを自己に確信すること以上に加ふべきことはない、この豫想なしにはしかし教育的組

織は全體からの保護と保障とを享受することができないであらう。一般に一つの監督は、ことに始めに於いては、新しき秩序が確實なる運轉をなすまでは、非常に强き程度に於いてまで必要であらう、しかし監督(ヴ)は原理的には何らかの外部に立つてゐる官僚的役員によつてでなく、ただ教育的組織そのもののより高級なる階段からの、すなはち最後は自律的教育的委員會の指命によつて爲されねばならぬ。此體制樣式の意義、豫想そして更にその結果は、いはゆる標準的教養をもつと稱する上層と、そしてそこからこの教養を受けとるところの下層とのあひだのあらゆる間隙が除かるることである、更にすべての教養的及び教育的勞働がもつとも單純なるものからもつとも高きものにいたるまで自由なる組合的な協同作業となることである。それが社會的(レ)教育である、それは自動的に、いはば各人が能動的にそして受動的にそれに加つてゐるのであるから、社會的志操へと教育し、そのやうにして自己のうちから、すべての强制なしに全教育事業の社會的形式をただますます堅固にそして深く基礎づけるであらう。教養はただ自由の空氣のなかに榮へることができる、自由はただそのやうにして、自由は何よりもまづ教養の自由であるから、そしてそこからまた己が營養を吸收するために、共同を建てる。このことは特殊の事柄に於いて一が整序し、

一が整序に服從することを排斥しない。何人も登山に於いては悅んで經驗ある案內者に信賴する、もし彼が前進に於いて先導の正しさを自ら經驗するならば。ただそのやうにしてのみ精神的なことがらに於いて指導といふものはあることができそしてなければならない。けれども畢竟すべては精神的である。ただ非精神的なるが故に一般にあるべからざるものを除いては。

非社會主義者によつて、しかしまた不幸にも非常に多くの自ら社會主義者と思ふ人々そして他人によつてしか思はれることを欲する人々によつて、いままで解せられた意味での社會主義の重大なる誤謬は、人が誤つてそれを中央集權主義（ツェントラリスムス）として解したことである、人々がそれをいままでに例論何たびか謂はれたすべてのことにかゝはらず。つねに非社會的そして反社會的經濟と政策の舊套手段をもつて外的强制の力の主要手段をもつて、はたらくものとして考へることである。同樣に人はまた社會的敎育を誤つてすでに完成して成り立つてゐる一つの共同（ゲマインシャフト）から出る敎育として解する。しかしかゝる共同は存在してゐない。單にまだ存在しないといふのか？　否、精密にいへばそれは決していつまでも存在しないものである。それは永遠の課題である、それを吾々はつねに新たにそして新たに創造しなければならないのである。假りにそれが一つの理想的瞬間

に於いて完成せられたりとせよ、さうすればしかし人が何によつてそれを確實に認識するであらうかは始んど謂ふを要しない、しかし一度假りにそれが在るとすれば、しかしそれはただまさしく理想的瞬間に於いてのみ存在するであらう、そしてこの理想的瞬間はそれ故にとてやはりつねに新しく再び導びき入れられねばならないであらう。何故ならここでは生が問題である、しかるに生は決して存在するものでない、それはただ成るものである。すべてのものの敎養、敎育に對して一つの命令權をもつ中央の場所から配慮しやうと欲するなどは、勞働者の幸福のために企業家をして配慮せしめることと同樣に、誤つてゐる。命令的な中心的裁決者は共同そのものに於いてそしてその委任に於いて誇りやかにその命令を分配するとしても畢竟いはば企業者である。中心から圓周を規定しやうと欲することはそれ自體にはたしかに意味をもつ。しかしだれがそれではまことに事柄の中心に立つてゐるのか？　偶然に（そしてかゝる場合には偶然はいかやうにも行はれる）操縱者の位置にゐるものは、素朴に彼の立つてゐる點をそのまゝに中心點と考へる（何故なら彼はその點がいかにともに運動のなかに捲きこまれてゐるかを意識しないから）、あだかも素朴な感覺的人間が自己を宇宙の中心と考へるのと同樣に、彼はその宇宙が彼のまはりに回轉し

てゐるのをあきらかに見る故に。彼は大膽にも自己のうちに總體(アルハイト)を具體化してゐるのを見る。あだかもヘーゲルがナポレオンに於いて馬上の世界精神を見たごとくに。二三年のうちにはこの世界精神は屈服した。

しかし社會的志操(ゾツチアーレゲシンヌング)は必らずしもすべての人々に於いて生動してゐない、それ故に社會化(ゾツチアリシールング)は始めの、そのなかにこの志操が生動してゐる人々から出てすべてのうへに擴がらなければならない。——それがまさしく舊制度の精神である、各々の階級支配、各々の明言せる寡頭政治や專制政治はこれをもつて自己を自己のまへに辯護しやうと試みる、否、社會的精神は自己をただ總體(アルハイト)のひろき地盤からのみ築きあげることができる、あたかも世界法則が一の中央太陽に定着せずして各々の星に、各々の微塵のうちにはたらくがごとくに。しかしそれをただ紙上の計算が畢竟ただ概觀の統一の便宜のために、一つの方式(フオルメル)に入れるのである。そのやうにしてのみ社會主義は、いままでそれがつねに逆立ちしやうと試みてゐたことのかはりに、確かな足のうへに立つことができる。逆立ちはあるひはたかだか一秒間は成功しやう。そのやうに一つの强制的社會化は一つの熱狂の瞬間に於いて見かけは成功しやう、しかしそれは持續しない。人は憂ひる、社會化は自發的(フライヰルリヅ)

意志(ヰイト)といふ點で蹉跌するであらうと、人は意欲しないであらうと。人はそれでは唯一持續的に可能なる生活建設を意欲しないだらうか!? それが可能でありいかにして可能であるかを示せ、先だつて行つて見せよ、唯一の說得的な證據すなはち實行の證據によつて證明せよ、しからばかゝる範例はおのづから人々を招きつつ更にひろく作用するであらう。パンのための急迫的に必要なる地方移住、同樣に急迫的に必要なる、各々のその能力ある工業の都會と地方の限界を越えての擴張は、それは同時に劣らず否もつとも急迫せる各種の學校と教育機關の擴張のための自然的基礎であるが、それは明瞭なる途を示してゐる。そのすべては全たく一つの同一の基礎のうへに、「組合」の基礎のうへに築くことができる、それは第一には使用の、すなはち生活の、そして教育組合の意味に於いてであり、それは次第にまた財生產を手中に收めねばならぬであらう。それへの意志は民衆の最良の部分のうちに、何よりもその青年のうちにすでに存在する、それはあらゆるしかたに於いて鼓舞されそして促進せしめられねばならない。それは何らの强制なしにしかし非常に有効なるしかたに於いて行はれることができる、それは第一に課稅に於いて、勿論それが私得のためにでなくただつねに共同そのもののより包括的なる構成と內的上向のために確實なる

普遍的規準にしたがつて勞働することを豫想として、すべての共同的財産を免租することによつてできる。すべての仕方に於いて、この內的向上が社會的教育と生活形成を增進しそして始めから合企圖的にそれへと向けられるやうに確實に保障されねばならない。まさしくそれへと吾々の勞働の意志ある青年の衝動は向つてゐる。「ペスタロッチの覆すべからざる根本的確信によれば社會的教育の全體の建築の基礎でなければならないところの一の健康なる家庭生活の無制約的に必要なる再建はこの方途以外のものによつては全く不可能である」。現在そのやうに普ねく要求せられる、各種の生活增進的な才能を、それによつて才能が自己の滿足と全體の福祉のためにその最善のものを爲しうるやうな位置を見いだすやうに、充分に陶冶すること、そのうへに各々の知的、道德的、藝術的、宗教的方向に於いてその到達し能ふ高みにまでの成年者の眞に徹底的に普遍的な教養完成、これらすべてはただこの基礎のうへに於いてのみ確實に達成せられるであらう。この基礎なしにはそれらの何ものとても眞に有効には達成されないであらう、しかしその何ものとても、もし經濟と國家の社會的建築が眞實にまで成らねばならないならば、缺如してはならない。

ただそのやうにしてのみ一の統一的に整序せられたる、健康なる循環に於いて自己を維持しそ

して自己から內面的に生長する社會的生命はもつとも狹小なる範圍から不斷の擴張に於いて次第に全體を包括するであらう、しかしもし建築が全體から出發しなければならないといふならばその全體はしかしまづただ理念に於いて――そしてそれはここには不幸にも意味する、想像に於いて――存在する故に、それは直接なる、具體的生命を如實に包括せず、ただ切線的に達せられるのみである。しかし純正なる「理念」の作用はただ具體的なる、人間から人間へと直接に生動的なる、能產的に經過するものとしてのみ理解される。何らかの政策的なしかたでそれを呼び出すとか、もしくは何らかの天下り的に操縱された經濟的機械組織によつてそれを存在に浮き出させることができやうといふのは望みなきユトピアである。これに反して一つの精神的道德的藝術的に方向づけられ指導されたる、まさしくそれをもつて全くおのづからまた萠芽的に政治的な前型に於いて形成されたる、そして同樣におのづからまた經濟的に健康なる共同的な勞働生活の直接なる此處そして今から、同中心的な擴張に於いて次第に社會的秩序の全體を自由と共同との一の精神をもつて滲透しそしてその要求にしたがつて形成するといふことは何らユトピアではなくて、すべての精神的なものを支配する連續の法則の明晰なる歸結である。

限界としてはしかしながら――それが吾々の原理的要請の最後のものである――これを眼中に置くべきである、純正なる意味に於ける國民、ドイツの社會的統一國家を。何故なら吾々のドイツの民族には、その現在の恐ろしき失墜によつて、その將來の位置の全體のまだまつたく正しく通觀せられざる困窮によつて、實に意欲せずそして求めずして、まことに何らかの誤れる意味に於いて「國民的」なる自負からでなく、敢へていはば、受けるだけの功と値なくして、社會的國家をはじめて眞實とすることの、それをユトピアから科學をとほしていままた生のなかへと導びき入れることの重大なる課題が負はされた。民族はそれに對して感謝せねばならない、何故ならそれは一の民族に對して、まづ第一にはそれの救濟のために、しかしそれを通して全人類の福祉のために、置かれたる最高の課題であるからである。何人も吾々から吾々のなくてならぬものを盜み取らうと欲しないごとく、また吾々もこの課題から解放されることができず、解放されない、それは吾々のなくてはならぬものである。吾々は自己の決して枯渇すべからざる力によつて吾々自らを起しそして決して涸れざる吾々の精神的生命の內的な源泉から吾々自らを強くしてそれを荷ふほかに、吾々はみづから吾々に負はされた重荷を振り落すことはできない、そのやうにまたま

さしくこの重荷とともに吾々に與へられたる社會主義への高貴なる使命を、吾々は決意してそれを自らに取りそして眞率と歡喜とをもつてそれを充足するべく努力する以外には、果すことができない。それが吾々の解放であるであらう、そしてそれはただに吾々のみのそれではない。現在ではみじめにも今日なほ優力なる西ヨーロッパ・アメリカ的な資本主義の抵抗によつて蹉跌したインターナショナリスムの思想はまさしくここから勝利へと、吾々打ち克たれたるものに由つて行進するであらう。吾々のドイツの社會國家は世界的社會主義に對して範例を提供し、それはあらゆる强制なしに、連續性(ステーチヒカイト)の法則にしたがつて、ますますひろき範圍を捕捉し、そしてつひに全體を包容するであらう。發展(エントヴィックルング)は、その概念上、いづこに於いてもただ此處(ヒーア)そして今(イエツト)から、狹小なる範圍から出發して、そこから同中心的に全體の周延に擴がることができる。また諸民族の世界的聯盟も一の理念である、それは、抽象的普遍態として考へれば諒解的平和主義の空虛なる妄想となる、しかし具體的直接性に於いてはたらきつつ生と行爲になることができる。しかしドイツ人に於いてはそれは吾々の誇りとする信仰であり、理念は具體的に生動してゐる、それ故にドイツの社會的國家てふ細胞實質から地球上の社會國家が自己を組成するであらう。

二　社會的更新

「社會的教育」、それは社會的なる生活秩序が、少くも根本的輪廓に於いて、存在し、そしてそれが新たに生長しきたる族（ジエネレーション）を包括し、自己を後者のなかへと形成しそしてそのやうにして自己を繼續的に生產しつつ未來にまで增植してゆく、といふことを意味することはできない。社會的生活秩序は存在しない、しかしてまさしくそれ故にそれが成起することが必要である。それはただ成起しつつある族（ジエネレーション）によつてのみ成起することができる。時がこれから產まむとするもつとも若きものさへもそれを自己のために、年少者全體のために、要求する、それを規定するためではなく、それに由つてはじめて成起するために。何故ならそれはいままでたゞ理念として、すなはち永遠の課題としてのみ、存在する。それは一般にほかのしかたでは存在することができない、それは時代精神のなかに存在するものとしても存在しない、たゞそれに向つての一つの成起過程があるのみである。さればそれはただに現在に對してのみならず永劫に、成りゆくものの、すなはち年少者の、すなはち教育の關することがらである、ここに教育といふのは各個人の自發

的な向上的教養を單に包含するのみならずむしろ第一に意味する包括的な意味に於いてである。

一つのそのやうに根本的なものとして意味された社會的教育の可能性は勿論眞直ぐな迷はされぬ理念の信依を豫想する。しかるにこれはまたただ若き、在るがままのものの認識をもつて多く毀傷せられざる族（ジエネレーション）についてのみ望みをかけそして要求することのできるものである。何故なら今日の人類にはまさしくこれ、理念の信依ほど遠くはなれてゐるやうに見えるものはない。あるものは意識的に、合計畫的にこれに反して勞働する、他のあるものはただにこれのためにあまりにも少き力しか出さないのみならず、その爲すすべてのことをもつて、豫感も意志もなしに、社會的更新を妨ぐるごときものを促進する。もつとも盲目的に熱狂的なるものは彼らのうちに襲ひ入つた破壞的兇暴をもつて彼らがただ暗黑なる後退への道を築きつつあることをまつたく氣づかないかのまつたくラディカルな人々である。「かつてベスタロッチがその熱誠なるたましひをもつて味方した一七八九年の革命について爲したやうに、何人か現在の革命について悅んで證しを立てるものが起たなければならない」彼は革命が伴ひきたる無政府狀態が決して革命の罪でない、ただ無政府狀態こそつねにすでに存在したものであり、それは民衆がそこから脫却することを欲

する狀態の歸結であつて決して民衆が歩み入らうと欲するものそれではないことを、(何故なら少數者の無政府狀態(アナルキー)はつねにただ多數者のアナルキーに於いてその限界を見いだすからである、)またそれ故にこのアナルキーは革命の高貴なるそして純粋なる目標について何人をも惑はしめてはならないことを、語らねばならない、彼はそれをもつてまたこの同じ革命そのものの良心に向つて語り、そしてそれに向つて眞劍なる疑問を向ける權利を獲得するであらう、「その專制的なる宮廷の混亂がそれでも背後に於いて本來共和國の根本主義」ではないか？　民衆はいまやその舊來の牢獄番に對する單なる獨癲(ラウネ)が自己を自由にするといふ悲慘な妄想に陷つてはゐないか？　もしくは眞に現在のアナルキーは、それ自體にはすべての官僚的錯誤がその愚昧を民衆にまで擴布することによつて千倍にも增大されたものであり、單に善良なる自然が專制主義によつてその高貴なる部分までも侵されたる諸國家を癒さうと試みる熱病であるのか？　今日では生き生きと目のまへに横はる事實の効果强き言語をもつて、ロシア革命の悲慘なる貸借(ビラン)決算(シヤク)表が吾々にむかつて更に急迫的に語る。(一)何となれば病的現象はあきらかに吾々に於いても質的には彼處に於けるとまつたく同じであり、ただ量的にはいままでそれは同じ高さに達してゐないだけである。しかしした

(一)

れがそれがやがてそこまで達しないと保障しやうぞ？

(一)ペスタロッチの心情のこもつた論文 "Ja oder Nein" 1793 を讀まれよ、(Pestalozzis Werke herag. v. Seyffarth, Bd, 8. なほ著者のペスタロッチ傳記 (Langensalza, Gressler) 2. A. I. S. 200 ff. 參照

(二) D. Gawronsky. Die Bilanz des Bolschewismus (Berlin, Paul Cassirer) 1919.

21 どうしてそれはここまで失墜することができたのか？　社會の構造はまことにあれほど堅固に見えた、それは多くの烈しい暴風に抵抗した、ただ今までも外部からのもつとも恐しい攻擊に對して何ものも動搖させることができないほどに見えた確かさを證明した。建築の基礎構造、多くの角柱、全體の柱や穹窿はまた存立してゐる。しかし全體としてそれは倒れた。いかなる可能なる政府もそれを廢墟のなかから、そのあつたごとくに、再び建てることはできない、ただ一の全たき新築のみが考へられる、そしてただそれが類似したる、もしくはあるまつたく反對なる構成原理にしたがつて爲されるかのみが問題である。むしろ一つの建築との比論全體が誤解を生じやすい。社會的秩序は機械的構成の關することではない、それは生きた生長の關することである、それ故

にこの秩序を一定の計算し能ふ因子の總和から構成しやうと欲する何らかの建築形式の提案はすでに企圖自身に於いて誤つてゐる。人はもはや人間の共同生活を計算の例題とし、例へば可能なる國家形式を一人か、少數かもしくは多數かもしくは全體が支配するかによつて分類するプラトン的アリストテレス的國家理論の燒き直しの範疇によつて仕事してはならない。しかしまた人がこの分量的區別を質的な區別によつて置き換へ、そして一人もしくは多數もしくはすべてが支配するのでなく、ただ正義が主人であることを要求するとしても、これによつてあまりに直線的に、そしていはばユークリッド的に構成された合理主義の根本的誤謬を改めるものではない。生きた自然のなかに幾何學者のいふ直線がないと同じく、共同生活のなかには法の頑固な直線は存在しない。人は多分すでに一度は一人の偉大な人が曰つた意味深い言葉を反省したであらう、神は善きものと惡しきものとのうへにその太陽を照さしめ、義しきものと義しからざるものとに雨を降らす。だれがそれを曰つたにせよそれは眞理である、すべてが罪人であり、そして何人も罪人ではない。過去が吾々に嗣がしめた罪の大いなる重荷を吾々はみな背負はねばならぬ、背負ひぬかねばならぬ、つぶやかず、忍耐つよき誠實なる協立に於いて、さなくば吾々はそれを荷ひ立つこ

とはできない。

それ故に今日は何らの黨派(パルタイ)も妥當してはならない、黨派は部分的共同である、しかるに分割はそれのみが社會(Societas)を構成する統一的秩序を止揚する。すべての黨派の共通の根本的誤謬は——黨派そのことである。それが行はれてゐるあひだは、救ひはない、そのあひだはただアナルキーがあるであらう。もしくはそれを Pantarchie (全體政治) と名づけたところで、それはやはり社會的秩序の反對である、また「デモクラシー」といふ概念も社會的結合の本質をなすものを的確に言ひ表はさない、それはその反對概念たるアリストクラシーと同樣である。もし「民衆(デモス)」がつねに總體(ファイト)を意味するのであつたら！　しかしいはゆるデモクラシーはこの、さなくとも曖昧なる、總體を權力行使的なるものとして考へる——それならば誰に對して？　それ自身總體を形つくる個人に對してか？　それならば最良者の、すなはち社會的にもつとも適合せるものが劣つて適合せるものに對してもつ權力は少くも一つの支持しうる概念を與へる。しかしそれはまたただ一の蜃氣樓(ファタモルガナ)である。未だかつていかなる一人者(ヘラクライトスのいはゆる「最適者(オネイストス)」)、もしくはある少數者も、その社會的美德が追隨のみに限られたる他人の受働性によつてのほか、もしくは

最良のばあひには、理由ある信頼によつてのほかに、權力を行使した事がない。しかしそれは眞に社會の概念と合一する、もしくは永續的に支持しあたふ共同的生活の狀態ではない。共同的生活に於いては何らの單なる惰性力が存在してはならない、ただ一の能動的な力を例外なく各構成員が表はさねばならない、各員はただに一般に共同的生活に適能するのみならずその位置に於いて社會的に最適能者でなければならない、すなはちまさしく全體の繁榮のために丁度その位置に於いて必然的なるものでなければならない。しかるときは何らの民衆代表者の存在することを要しない、何故ならそこには民衆がある故に、そして何らの民衆支配を要しない、何故なら支配される必要あるものがない故に、何となれば各人は自己に對して、すなはち彼に於いて社會的に適能するものに對して、また不適者に對して主人であるであらうから、しかしてこの不適者をも各人はそれを他人のうちに求めるには及ばない、何故なら各人はそれをより近く自己に於いて見いだすからである。

23 これはユトーピアのもつともはなはだしきものごとく解せられる。しかし何人も社會的教育がただこれのみのほか、そして決して他のことを意味しえぬことを承認するであらう――「總體」

の意味に於けるすべてのものの教育、しかしてそれはまさしくさきに謂つたこと以外のものを結果にもつことはできない。

人は頭を振りそして問ふ、汝は眞面目にすべてについて語るのか？　汝はすべてといふなかに何人を數へるのか？　乳兒をも？　狂者をも？　犯罪者をも？　私はあるひは答へを與へる勇氣をもたなかつたかもしれない、もしすでに一人の偉大なる人が答へを疾うに與へたのでなかつたならば。それは人が人類の第一の教育者たちの一人として、そして社會的情操をもつ人として認むるところのベスタロッチその人である。彼は躊躇なく答へる、然り、また乳兒をも、狂者をも犯罪者をも、すべてを私は「人類」の概念のなかに包容する、あだかも「正義」の最大の批判者がこれらのいかなる一人をも神の太陽と神の雨のもとから除外しやうと欲しなかつたやうに。乳兒の社會的適能はそれが自己を母の乳房に於いて人類へと生ひたつべく受乳することである、身體または精神に於いて病めるもののそれは癒えることである、彼ができるかぎり多くふたたび共同態の能働的な一員となるべく健やかになることである、犯罪者のそれは彼が社會能力をふたたび恢復することである。科學に問へ、乳兒や狂者や犯罪者の護養のために眞摯に勞働してゐる人

々の實際的經驗に問へ、諸君は何らの他の答へを賜かないであらう。それに於いて人は吾々のいふ社會的教育の概念を吟味せよ、私は思ふ、それは吟味に堪へる。しかし私は更に言ふ、理念の太陽のまへには、共同的教育の惠みふかき雨のまへには、吾々はみないままで微弱なる乳兒、あはれな狂者そして過てる者より優れるものではない。そしてすべての微弱と迷亂と過誤とに於いても吾々がまさしく適能するところのものに對してみな適能的であるならば、吾々は吾々自らをただ正しき位置に、すなはち吾々の適能するところに、置くことができるであらう。

各人が必らず「彼のこと」を營まねばならぬ、それが正義である、それが社會的秩序である、とプラトーンは教へる。いま曰つた意味でこそそれは正當であり、しかもプラトーンの墮したごとき「優者支配」の幻像にも　しかしまた「民衆支配」にも導かない。却つてそれは一人者の、もしくは少數者の、もしくは多數者の、もしくはすべてのもののあらゆる勢力または支配を止揚し、そしてまさにそのやうにして純正なる市國を、「平等者」の國家を築くであらう、何故ならすべてのものは理念の永遠なる、無限なる要求に對して平等であるからである。しかし吾々はこのまつたく單純なるもの、「彼のこと」の行爲に留まらう、さうすればかう曰ふべきである、絶對的には

何らの練達も不練達もない、ただ自己の事の理解と非理解とがあるのみである。この單純なる差別はすべての傳承的な政治的範疇を轉覆し、そして可能なる誤謬的秩序の無限の多數のかはりにその概念上本質的にただ一なる社會的秩序を置くものである、しかしこの唯一的社會秩序はそれをもつて人がいままで考へたごとき硬直なるユークリッド・デカルト的直線の體系から脱して無限に自由に可動的なる、まさしくそれをもつて社會的體制の充實せる生命に適應する能力ある、いはゞガウスの座標系のごときものになるのである。

これのみが殆んどすべてのものによつて誤解され、無理解的に駁論されたる・しかし革命によつては殆んどつねに本能的に正當に捕捉されたる「自由」と「平等」との一致の明晰なる意義である。人は思つた、二つの概念は相互に抗拒する、そしてそれが根據とするところの人間的共存の「自然」に對してまつたく抗爭するものであると、何故なら自然によつては人間は人間社會に於いて自由でもなくまた平等でもなく、また人間はそれになることができないからである。勿論社會を外面からそして實際可算定的の意味に於いて合理的に（私はユークリド的にと曰ひたい）構成しやうと欲し、それを翻つて內面から成長するものとして考へぬ人はこのやうな歸結に必ら

ず到着しなければならない。それではかゝる人は非合理者（イルラチオナール）無理數）以上に合理的なものはないといふことを數學と哲學的批判の純正なる合理性から學ぶがいゝ、そしてすべての直線的構成はたゞ有限性の脚上に跛行する悟性に對しての折線であることを學べ、悟性は更に自己を必要なしにこの有限性のなかへと制限したのであるが、そこからはしかし非合理者のより深き、それ自身解放されたる合理性のみが悟性を解放するであらう。理論的理性が完全なる精確をもつて疾うに爲し遂げたる非合理者の論理への歩みを、いま實踐理性ははじめて爲さねばならぬやうに見える、しかしそれはその歩みを、それがそれについて自己に明晰になるや否や、直ちに前者とおなじやうに確實に爲すことができやう。それは完全に論理的に强制するところの、カント的に謂へば「概念」から「理念」への、すなはち有限的理性（ラチオ）からより深き無限の理性への歩みである。

それが「ユトピアから科學」への社會主義の純正なる歩みであらう、何故なら直線的構成は社會主義をユトピアに墮せしめる、自由なる構成がそれを科學へと解放するのである。

これは勿論在來勢力のあつた社會主義の概念に對しては正反對である、すなはちいはゆる物質的すなはち經濟的基礎建築とそして精神的すなはち法律的政治的及び社會的教育的上層建築を說

くものに對しては。しかしそのやうな概念は實際に於いてもはや支持できない、それとは根本的に絶縁せねばならない。實際その誤謬は人が多くはそこに求めたところ、すなはちそれが社會生活の物質的經濟的基礎を重視したといふことには存しない、これはむしろそのもつともすぐれた長所である。誤謬は人が社會生活を有限的因子から構成しやうとしたことである。その免れがたき歸結は重苦しき非自由である、それはたゞ發展の終りに於いて（しかし實はそのやうなものはないのであるが）、いかなる基督教その他の教理學に於けるにも劣らず安然として行はるゝ一つの致命的飛躍によつて不可想的なる自由に變化するのだといふ。それは可算定的因數の誤れる合理主義の傳承である、それが「社會問題」をまつたく解決しがたきものにした、何故なら有限的因子は、有限的地盤の上にまた常に置かれては、相互に抗拒する以外のことはできず、そしてこれはつぎに一つの永久に動搖的な均衡以外のものを結果にもつことができないからである、たゞ觀念的な極限的なばあひに於いては安靜に——死の永久なる安靜に——達しうるであらうけれど。そのやうにして社會的生のかはりに社會的死を最後の決算として立するものは機械化の原罪（ウルベフカトゥム）にほかならぬ。社會問題を經濟に結合することは最上位に於いて唯一的に規定的なものと考へられ

たのであるが、それは邪路に導いた、しかし視線を法律的政治的秩序に向けなほすことのみではそこから解放することができなかつた、それは法と政策とはつねに「既成的」なものとして存留せねばならないやうに見えたからである、たゞ人間への、すなはち教育への支配的な顧慮のみが根本的に誤謬を匡正することがきる。それは安靜なる確かさをもつて觀察をあらゆる單に有限的なる立場以上に高める、何故ならそれは無限的なものが有限的なものに命令するのであつて、そして有限的なものが無限的なものに命令するのでないことを敎へ悟らしめるからである。

たしかに有限的なものから、最も手近かに現在的なものから、然り體驗の一定點から、すべては出發する。またもつとも自由なる思想さへも知覺に於けるそして言語に於ける感覺的な點を缺如することはできない。しかしそれらは必らずしも全たく契機に固著するものではない、そしてそれらに於いて思想は自由へと自己を高めて努力するのである。それ故に人間的行爲のもつとも確實なる第一の出發點は、生きるための、瞬間に於いてそして瞬間から瞬間へと生きるための衝動と欲求である。しかしすでに衝動としてそれは決して瞬間に固著はしない、そして瞬間から向上的努力的な能動性、意志は自己を解放する、瞬間に於いてそれは自己を自由なる展望へと無限にま

で擧げるべく勞働する。人は實はあきらかに死滅に墮したる刹那のためには生きぬ、何故なら人は死のためには生きないからである。生は實在たらうと欲する、非實在たらうと欲せぬ。刹那の實在は零點以上のものではない、勿論そこからすべての算定は出發しなければならずそこに立場を取らねばならぬ。それはすべての問ひの豫想である、しかしまさしくそれ故に問ひが本來求めるところのものではない。それはたゞ「假定」である、第一には理論的認識、「經驗」の、第二には行爲の、假定である。たゞ算定し能ふために、兩者は固定せる——假定的に固定せる——數量を要する。社會的生活に於ける「經濟」も同樣である。それもまた計算にほかならぬ、吾々は吾々の使用しあたふ（存在するそして見渡しあたふ）手段や力をもつて、たゞに通常の物的、物體的、の意味に於ける物質的なもののみならず、同樣に精神的そして道德的なる、しかしそのかぎりつねに有限的に評價されたる諸力をもつて算定する、すなはち經濟し家政する、それらの力は第一には生の目的への、見渡し能ふ、算定可能なる、そのかぎり「物的」なる生命（その標識は有限的に限定されたる單なる可能性である）の目的に對する適能性に關して評價せられる。有限的な見かたはこゝでは自明のことである、何故なら經濟はまさにたゞ算定でありそして算定たる

かぎりたゞ有限的標識をもつてのみ算定せらるゝからである。しかし算定の可能性、したがつてまた、經濟の全算定が目的とする「生」はそれによつて決してそれ自らのうちに限定はされない。却つてこの限定は――それと精密なる方法的對當に立つ生物學的考察に於ける限定とおなじく――その根據をたゞ「理論」の本質に於いてもつ、理論には假定的てふ性格は滅盡しがたく固着するからである。何故なら理論（ティオリア）（觀照）はその意味上、その全たき可能性上、靜止的である、それはその對象が觀照に對して靜止するやうに自己の對象を靜止的に立せねばならない、しかし對象はそれ故にとて自ら靜止はしない。對象は、このばあひには、生（普遍的にいへば、成起）である、生と成起は決して靜止しない、觀察のみがそれを認識するためにそれを自己に對して靜止的に定置しなければならない。それは、解剖學者のするやうに、生をその屍體に於いて研竅する。また第二のものも同樣である。行爲（プラクシス）、意志の「行爲」（ヘンドルング）は、實際に、目的設定として、目蒐けることゝして、つねに固定的（フェストシュテレント）である。しかしまさしく固定するものとして、それ自ら、この同じ動作（トウシ）、固定することに於いて自由運動的でありそしてつねにさうであることの意識をもつてする。それが行爲の區別的標識である。社會的生活に於いてはこの標識は法的政治的考量に於いて表はされる。

これは「積極的」に整序する形式としてつねに有限的範域すなはち經濟へと、質料上制限される、しかしたゞ形式として、秩序の形式としては、それは規定的に與へられた質料に制限せられてのみあることを欲せずして、たゞ一の質料一般へと、單に存在的な「可能性」としての質料へでなく、自己に於いて潜勢的に無限なる可能性を展開する意味に於いて、關係することを欲する。それ故に法的政治的考量は經濟のこどく靜立的でなく、動的（ダイナミッシュ）である、それは假定のなかに殘留することなく、假定を歸結（Akoluthie）へと展開する。それはその坐處を全くたゞ實踐的意味に於ける原因と結果の關係に於いて占めてゐる。人はたがひに「行爲する」、つねに相互的にそれは行爲（ヘンドルング）の概念のうちに含まれてゐる、（單なる動作は一方的でありうる）、こゝでは特に展開のために、相互的關係（われ與ふ、されば汝與ふ、われ爲す、されば汝爲す）が、展開の自由が、すなはち一者の自由（すなはち自己展開的なる行爲の自由）が他人のそれとゝもに存立することが、重大である。

28 しかしまさしくこゝにまた更に切迫せる動因（モーチフ）が横はる。それではすべてはたゞ前進そしてつねにたゞ前進のためにあるのか？　疑ひなくそれは「生」の概念に屬するが、しかし前進は生の全

體であるのか？「個體」は、充實せる體驗は自己を全たくそして決定的にそれに與へ去ることが、できるか？　それは自己を、自己の現在を――現在はそのときにはたゞ永久に流動的な過去の終點にすぎぬ――それが恐らくは決して到達せざる、そしてその可到達性をそれが明言的に斷念せねばならぬところの、一つの未來のために犧牲にしうるか？　空虛なる、永久に浮動せるそしてそのやうにして眞に無本質的なる「今」の一點に於いてたゞ相互に境するごとく見ゆる無（ユヒトノーブ）と「まだ在らず（ノホニヒト）」とのあひだに横へられる永久の前進を上位に置くことは、それはしかし最後のことであるはづはない、それはまだたゞ死であつて、生ではない、それは單に幸福をのみならず、所有（ハーベン）のすべての安靜を、實在を、生そのものを剝奪することである。行爲の永遠の現在はしかしまさしくそれを克服すべく努力する、しかしそれが努力する、といふことは、それがまだもたずそして達してゐない、といふことを含んでゐる。純正なる自己（ゼルブスト）はそれに於いてたゞ自己を意識する、しかしそれは單に自己の存在へとのみ努力することに自己を拋棄しはしない。ことにそれが、かゝる努力がつねに矛盾の抗爭のなかに留まりそしてそれ故に吾々を有限性のうちへと、したがつて終末へと、死へと捲きこむものであることを理解したのちは、過ぎ去れるものゝ過去へと、終るべ

く來るものゝ終末へと、いはゞその誕生に於いて死滅しゆく「今」の空虛なる零點へと、自己を賣渡し、そしてすべてのかゝる空しきものゝために共同的しかしそれ以上に相反的なる行爲の永遠の掠奪と死のなかに編みこめられやうと欲することは、純正なる自己の爲しえぬことである、それはその自己性（ゼルブストハイト）に矛盾するであらう。それは自己のために單純なる「存在」への自己の權利を、現在に於いて死滅する過去の恩惠からでなく、またそれが自ら殺さんとする一の未來の恩惠からでなく、たゞ一の永遠の現在に於いて、過去と未來とが吾々に對してその恩惠によつてこそ生きそして在るところの永遠の現在に於いて、要求する。それはもはやに靜止的に觀察せられたる存在ではない、また動的に意味せられたる成起、行爲（アクチオン）ではない、たゞ創造（シヤフフエン）である、「自己」創造（ゼルブストシヤフフエン）である。

第一のものもまた一の直接性を意味するやうに見える、しかしそれはたゞ現在的なる現在のそれである。制限せられた狹小に於いて、中心的出發點への固著に於いてそれは力つよく、單純に無邪氣である、しかしあたかも樂園の安靜に於けるがごとくに、怠惰でありそして殆んど無意識的に生きてゐるのみである。そこから行爲の「べし」が、焰の劍をもつたケルビムが、それによ

つて罪を荷つたものを驅りたて、荒野へと、永遠に安靜なる中心點のすべての平和から離された
る無限の周延へと追ひだす。自己のなかに無限なる力素（ポテンツ）の發展によつてそれは總ての力を尨大な
るものにまで高める――しかし實はそれはそれらの力をつねに荒れ狂ふ戰ひのうちに消盡する、
何故なら發展は必然的に對立をとほして行はれ、そして對立はつねに互ひに破壞するまで軋轢し
そしてしかしたゞつねに新しき對立を、新しき、ますます荒々しき軋轢のために、生み出すから
である、破壞に由つての、單に破壞のための成起、死に由つての、單に死のための、生、それが
終極は何處へみちびくのか？　その解決は單なる回歸には見いだされることができない、あたか
もその全過程が休止することができたかのやうに、本來は休止すべきであつたかのやうに（最惡
觀は、そしてまた一の自己を自ら誤解してゐる救濟の教へは、さう考へる）、否たゞ生動せる相互（エクゼル）
的關係（バッシング）に於いて、それに由つて中心的と周延的（靜止的と動的、保守的と前進的）傾向がたがひに
單に均衡を保つ、すなはち外延的に正數と負數のごとく自己を止揚（アウフヘーベン）するのでなく、たがひに全く
滲透しそして內包的に一となることに於いて、その解決は見いさだれる。しかしそれは自己性の
最深の核心として、兩者より上位にある、第三のものを要求する。私はそれを「個性（インディヴィドゥアリテート）」と名づ

ける、それは絕對的、始源的、つねに上位に存留する不分性として、內面的無限性を意味する、
それは第三の段階に於ける無限性である、それは第一の、すなはち空虛なる力素の無限性に對しま
たつねに力素から作用への途に於いて決して靜止せざる進行にのみ留まる第二のものに對する、
それはカントの（本來は革命の理念から汲まれたる）自由の超限性である、それは法的秩序のた
めには平等性の高き要求を與へ、しかして經濟の原點への回歸に於いてはそれ自身を同胞結合、
（共同の勞働と生活の）にまで完成するものである。

29 人間的自己生活及び共同生活のこれら三つの基本要素の內面的關係からまた社會的進化の合法
則性が理解せられる、そこから、いまはすでに透見せらるゝごとく、社會政策や社會經濟の視點
に對する社會教育の視點の無制約的上位は明晰なる理論的歸結として合理的に自己を演繹し、同
時に歷史的に說得的に自己を確實なる豫料の正當さにまで概念化しそして現實的に自己を存在に
定立する。そのためにこの多くの人には恐らく幾分か形面的上學考慮を要求する考察は止むをえ
なかつたのである。

人類の歷史は生活形成の、人間的共同生活のと同樣に個體生活の形成の、三つの基本的形態を

明らかに示してゐる。それは終極に於いては一である、何故ならたゞ人間的個體の人間的共同生活があり、人間的個體は人間的共同に於いてのみあるからである。個體に於いて共同態は生長する、それはしかし個體らに本源的に根ざしそれらから自然的に生長する。それは根柢に於いて同語反復である、何故なら「自然(ナトゥル)」とは自己からの生長、類(グノス)からの自己生産を、個體のうちに於いて生産的に自己を維持する生産的普遍からの自己生産を謂ふからである。

30 第一の形態(フォーメ)に於いては個體らの共同生活は生産的地盤に密接に留まりそして全生活はまだ直接性とその地盤に固定したる靜止の支配的性格を保つてゐる。そのやうにして共同とそれに於いて個體らは自己を固くそして狹く、力つよく、虚僞なき單純さに於いて基礎づける、しかし一方にそれは全くもしくは殆んど著しくは進歩せず、しばしば數千年のあひだ自己に類似してゐる。それは人類の兒童期である。

兒童期はやがて、個體に見らるゝ成熟期(ノベルテート)に於けるごとく、そこに於いてにはかにすべてが廣がりを求めて切迫し始める點が達せられるまで、繼續する。それとゝもに、はじめは徐々に、やがて急速に、最後に激越なる顚覆に於いて、地盤への依屬性と地盤固守的な共同體との紐帶は弛緩

する。それはいはゞつねにますます強く漲りきたる流れを辛うじて岸に拘束する河床であつて、次第に流れとともに廣がり、しかしやがてもはや堪へられずして、溢るゝ水のためにはじめは徐々に、殆んど氣づかずに、やがて次第に力づよく、最後に破壞的な兇暴をもつて浸される。やがて人は堤防を築造しやうと試みる、自然が爲しえなかつたものは、人爲をもつて代りに爲されねばならない。しかしそれは永く効果はない、堤防は裂ける、そしてまたもつとも熟練なる堤防築造師もそれを支へうるやうに塡補することはできない。そしてもしはじめに於いて高山から落ちきたる若い河の歡呼する急流が原始的な力と美しさとの魅するごとき形象を人類歷史の遍歷者の目のまへに生ぜしめるとも、やがて次第にその光景は、それが一たい何處へ往くのかと彼を氣遣はしくせずにはゐない。溢るゝ力は、それがすべての岸を破り、すべての堤を押し流したのちに、自己を荒廢せる平坦のなかに消盡するやうに見える、殆んどすべての、人間的、經濟的そして國家的また精神的發展の週期的發展に於いて歷史の指示するところのものはそのやうに自己を表示する。はじめそれは勇敢にそして誇りやかに前進する、測りがたき富、勞働と享受の富、法律的政治的形成の富、非常に分岐したる、特質的な教養と習俗や藝術的創造やまた宗教的生活の富が蓄

積せらるゝやうに見える、英雄的な姿をもつ人々や諸民族、眩暈するごとき高さに於ける思想や認識、優秀なる威力をもつ意志勢力ことに政治的意志勢力、めざましき純粋さと稀れなる個性をもつ藝術形成、深刻なる深さと内面性をもつ宗教的體驗、一言にいへば代から代への永き速續をとほして充溢する生産力の發芽と生長がある。何らの浪費何らの過剰もない、粗放にまで濫生する衝動力さへも創造的にはたらかぬはなく、つねにますます誇りやかなる人類に寶のうへに寶を贈り、忙はしく攪拌せらるゝ混瓶のなかに、ニーチェのヘラクライトス的譬喩を借りていへば、同時に苦くそして甘き蜜水を醸す、何故なら勿論それはつねに戰ひである、抗爭に於けるまことの狂喜である、戰ひはすべてに於いて、勝利と死に於いて、同時に永しへの死滅なる生に於いて、つねにまた甦生たる死に於いて、やすまず自己を「父」として、すなはち生産的なものとして證據だてるものである、それは「ともに觀る神」にとつては莊嚴なる演戯であり、そしてすべての表面的なる調和を止揚する抗爭は吾らには隱されたる一層深き調和に於いて融和する、それはあたかも藝術家や幼兒の遊戯のごとくに「何らの道德的打算なしに、永しへに同じき無邪氣さに於ける」成起と消滅、建設と破壞である、「あたかも人間は何らの目的でなく、たゞ一つの途であり、一つの

中間的なもの、一つの橋梁、一つの大いなる約束であるかのごとく。」たれがそれをニーチェの言葉に於けるより以上に善く謂ふことができやう、夫らは數千萬年の怠惰なる歩みのなかから眩ゆき光明に浮び出て、自己を唯一的に「歴史」として物語る若干千年の尨大なる歴史の總括を簡潔に語るものである。これが、それがかやうに見えた人には、永遠の眞理のごとく見えたことはふしぎではない。「世界は永久に眞理を要する、それ故に世界は永久にヘラクライトスを要する」、とニーチェは思つた、ヘラクライトスの觀そして謂つたこと、それは「最後の人類にとつても充分である。」

吾々は今日もなほそれをそのやうに見るか？　それは吾々に今日もなほ人類發展の總メ高として見られるか——更にいへば、いますべての目のまへに横はるこの高く讃美された發展の悲慘なる貸借決算表は吾々に一つの他の見かたを敎へたか？　すべての莊嚴なる力が救ひがたくそれに等しき對抗的な力に坐礁し、最後に、すべての岸と堤防を破る河流の力のやうにみづから平坦になりつゝ歎かはしき無力のうちに自己を失つた、といふことが自己を證明しなかつたか？　それは自己々日ごとに支へがたく新たにそして嚴肅に證明しつゝあるのではないか？

譬喩なしにいへば、破壞するもの、たゞ破壞するために建設するものが純正なる力か？　たゞ

間か　瞬間へと建築と倒壊のあひだに動揺する平均に於いて暫時は見かけは支持するところの
しかし實際はたゞつねにますます弛緩しそしてつひに必らず崩潰するものが、それが純正なる永
遠か？

しかしこゝには單なる思辨は役にたゝない。ここで問題になるのは、限りなき分岐に於いて內
的自己破壞へと衝動するさまざまの力が人類の再築の可能性を示してゐるか否か、である。それ
こそニーチエのみならず、すべて「發展」の壯大さに陶醉し、つねにすでに嚇かしつゝある恐ろ
しき倒壞を豫感もせずもしくはこの倒壞に於いてさへ一つのそれだけますます壯大なる高揚を見
やうと欲した人々が、これらの人々が問ふことを忘れたところのことである。しかしいま崩潰は
重大になった。それともに問題は置かれた、そしてもはやそれを放逐することはできない。その
問ひを否定するならば、さうすればそれは自殺に、恐怖をもつての終結に——もしくはより惡し
きもの、終結なき恐怖に於いて行き詰る。これに反してこの問ひを肯定することができるか、そ
れではまだ救ひがあるか、さうすればだれがそれを唯一のなほ可能なるものとして歡びをもつて

捉へずにゐやう？

社會主義はそれを肯定する。一七八九年の革命は社會主義を夢みた、革命はその最初の萌芽に
於いて、ルソーの根本觀念に於いて、社會的に方向づけられそしてその個々の經過に於いて、社
會的教育的方面に於いて、例へばコンドルセーに於いてこの方向をまた實際に辿らうと欲した。
しかしそれは全體としてはこの進路をたゞに終りまで窮めなかつたのみならず、まつたく踏み誤
り、そしてまもなくその反對に墮してしまつた。たゞに「自由（フライヘイト）、平等（グライヒヘイト）、同胞（ブリユーデルリヒカイト）」が一つのた
とへ廣汎ではあるが、中層に制限されたのみならず（それは一つの單に數量的な剩餘であるやう
に見えた）、自由はやがて經濟的掠奪の、すなはち事實的に他人の自由を奪取することの自由に墮
落し、平等は畢竟不平等化へのすべての人の平等の權利に墮落した、それをもつて全たく同胞結
合は——普遍的乖離のための聯合になつた。そのやうにしてまた更に、否はじめて、使役者（クネヒテ）と被
使役者（グクネヒテ）とが、一つの新しき奴隷制度が、一つの新しき、たゞ多頭的なることに於いて舊きものと
異る、專制のなかで生じた。經濟的掠取に、政治的壓制に、精神的道德的墮落に、勿論長大なる
階程に於いて、すべてのものが、能動的そして受働的に、參加してゐるといふことは考へられる、
そして實際そこに及んでゐる。しかしまさしくそこから必然的に、すでにそのときも夢想された

「永久平和」のかはりに、たゞに國民が國民に對し、階級が階級に對してのみならず、各人が各人に對しての、永久の戰ひが生ずる、それは單に憎惡と虚僞の殘酷さに於いて、すべての道德的秩序の轉覆に於いて、人間力と人間事業の荒廢に於いて、地上のあらゆる財の掠奪に於いて、すべての曾つて有りしものをはるかに凌駕するところの、外的民族戰爭に於いてのみならず、今はまた一つのそれに對應しそして必然的にそれから生ずる內的龜裂と分解とに於いていま明らかにせられてゐる、それに對照すればすべての既往の革命はたゞ無害な、いたづらであつたにすぎない。その理由は簡單である。此度のごとく例外なしにすべての人が外的及び內的戰爭の原因に與かつてゐたことは曾つてないことである、何故ならすべての人はすでに見かけの平和に於いて、外面は法律的なる形式のもとにたゞ辛うじて隱蔽されたる掠奪的經濟に、奴隷政治に、そして兩者を目的としたる、人間を人間からそして自己から乖離する思想と意志の頽廢に參與してゐたからである。すでに永いあひだ朽ちてゐた外被は破れ落ちた、そして今やそれはすべての目のまへに大ぴらに橫はつてゐる、にはかにすべては拒み、すべては缺乏する、勞働の制約と可能性が、規整的な勞働支配の作用が、何よりも內面的そして獨自的なる道德的すなはち共同的に基礎づけられ

たる勞働意志が、上にも、下にも、缺けてゐる。ふしぎではない、殆んど各人がその己のが意志によつてゞなく、社會的「秩序」の偶然が彼をそこに置いた己れの位置から拋げ出されてゐる。しかしこれが第一と第二の社會形態の鋭敏なる差別である——前者に於いては各人はおのづから自己の場所に立ち、自己を固くそこに根さすことができる、後者に於いては彼はそこに置かれる、外部から、殆んど自己の意志なしに、幾樣にも自己の衝動に反して。彼は外的な利益が招くかぎりはそこに留る、けれどそこに固く根ざしはしない、原理的には根ささない、何故ならば外的利益はあるひは明日はまた他の仕方で招くかもしれないからである。そのやうにしてしかしながら勞働はもはや彼のものではない、何ものも彼を內面的に勞働に、もしくは勞働を彼れに結びつけるものはない。それ故に全體の立場の秩序が動搖に陷るや否や彼もまたまつたく根柢を失ふ、それは今日多かれ少かれ各人に妥當することである。そのやうに外的に根柢を失つた人々はいまはじめて正しく認識する、いかにすでに求いあひだ意志や良習(ビラテ)や鄕土心(イマートシン)や家庭的精神等のあらゆる內面的支柱が彼らに缺如してゐたかを。そしてすべての、人はまさしくあらゆる內面的制約の弛緩のために、本來はなほそのやうにも深く根柢ある「自然的」道德的秩序に全く何らの權

利をも認容せざる苛酷なる現實主義に疾うから馴れてゐる、社會の全體の事實的構造や、もつとも明白なるその日その日の經驗が彼らにあきらかに反對に經過するに拘らず。道德的諸秩序は、人がいま日々に經驗しあたふとほり、單に止揚されたものと考へられてゐる、何となればその全く外面化されたる目的、すなはち技巧的に共同體化されたる、しかし事實に於いてはまつたく非共同的なる勞働の機械的裝置機械全體の故障に由つて、全體の技巧的に作られた共同性の分裂に由つて、動搖したからである。ロシアとドイツの今日の狀態はたゞそのやうにのみ理解される、彼らは戰敗國として崩壞によつて最初に襲はれた、しかし同樣なる原因が同樣なる結果を何處に於いても、たゞに今日嚮導的なる諸國民に於いてのみならず、すべてに於いて、伴ひきたるであらうことは疑ひもない。何故ならすべてのものをかの「進化」の殘酷なる强制は自己の支配內に押し込め、すべてをその自然的地盤から離し裂き、內面的に根柢を失はしめたからである。それはすでに疾うに內面的に準備されゐた、戰爭はたゞそれを完結しそして完結に由つてすべての人々の目のまへに曝露し、もつとも暗黑なる片隅にまでもそれについて一つの光明を點じたのである、いままでいかなる光もそのやうに眩ゆく憐れむべき地を照し、そして地の子らのみじめさを暴露

したことはなかつた。驚くべきことはむしろ崩壞が疾うに起つてゐなかつたことである。けれど第二の形態はつねになほ第一のものが殘したところのものに於いて契合を見いだした、それは數十年來蓄積せられ、はじめはたゞ徐々に、最後にはじめて、それが終りに近けば近づくだけ輕忽なる浪費に於いてあたかも手を翻へすやうに消費せらるゝ認識や正しき意志く勞働と秩序の愛と地盤固き良習の資をなほ永いあひだ受用することができたのである。

しかし一度にすべてが喪失せられるはづはない。强大なる諸勢力がいまもなほ波だつ能働性に立つてゐた、破壞に於いてさへなほ創造しつゝ、尨大なるものを成し遂げた。また尋常なる人さへもそこでは一つの恐らくは未だ嘗つてそのやうに普ねくは存在しなかつたほどの作業の精力を、何ものとの比較をも辭せざる自己發意の無制約性に於いて、證據だてた、彼はそれを今もなほあらゆる分裂と破壞のたゞなかに於いて證據だてゝゐる。そのやうな諸力が新しき建築のために集注され得ぬといふことがあらうか？　それが信仰のことがらであるならば、吾々はそのやうな信仰の充分な理由をもつてはゐないか、ラヂカリズムの絕對性さへも、あるひはそれは今はたゞ破壞に於いてはたらいてゐるにせよ、しかしながら此度の革命の神聖なる眞摯を證據だてる、それ

はたゞ吾々が現在立つてゐる點へと導く怖るべき混亂への後退の防止を求めてゐる、たとへそれは手段に關しては重大なる過誤を爲し、そして盲目なる片附けの仕事のあひだに可能なる再建の健全なる萠芽をあまりに全く破壞してはゐるけれど。それは暴力に對して暴力の手段をもつて勞働する。それがふしぎであらうか？　人はそれに一つの他の方法を敎へたらうか？　それは暴力を勿論あだかも幼兒のごとく、狂者のごとく、犯罪者のごとくに使用してゐる——そして吾々は？　吾々はあたかも幼兒を「おまへ行儀のわるい！」と曰つて叱る母のごとくにそれに對する。そしてその母親は彼女がそれをもつてたゞ自己を叱つてゐることを氣づかない、何故ならだれがその子を躾けるべきであつたか、そしてそれをしなかつたか？　吾々はたゞ吾々の播いたものを刈つたのである。否、もつと惡い、吾々は風を播いて暴風を收穫した。けれどそれはいはゞ一つの新しい經驗ではないか？　そのなかには原始的ドイツ的無制約性の幾分がある。それはすでに幾分かは拳の權利（ファウストレヒト）の時代に於いても、そしてまた三十年戰爭に於いても同樣であつた。吾々の民族はすでに幾多の打擊ののちに生きながらへた、それはまたこのもつとも重大なるものにも堪へるであらう。吾々は饑ゑやう、恐らくは數百万人となるまで餓死もしやう、しかし生きながらへ

るものは必要の呼び聲につひには傾聽するであらう、彼らは勞働するであらう、そして代々のうちに一つの生活可能なる生命を再び築くであらう。他のものは、吾々の征服者は、それを妨たげるであらう。——恐らくは彼らはそれを欲するであらう。けれど彼らみづからも彼らがいま登つた頂からたゞそれだけ悲慘なる失墜を爲すであらう。あるひはしかしながら、彼らは吾々の運命によつて警告されてなほ時機を失ふことなく熟慮しそして苦がき必要が吾々にすでに今日敎へなければならなかつた途を、自由なる意欲より——そのときはしかしながら必らず吾々とともに——踐むであらう。いかなる途？　第三の途、それは社會主義の途である。それはしかしながら敎育の社會主義のそれに外ならぬ。今日なほ人間こそ重要であつて決して法規（マツスレーゲルン）ではないといふことを理解しないものがあるか？　法規はまづ人間が存在するならばたゞちに來るであらう、人間なしには法規は役にたゝない。

それ故吾々は、吾々が「社會主義」について語るとき、決して今日なほ多くの人々の思想のなかに出現する强制的社會化（ツワングスソツチアリジーレンング）の亡靈を意味することはできない。それはただ墮落せる社會的秩序の祖先傳來的遺嗣である。これは恣まに人間の力を機械の部分のごとくに、作業の機械的組織が

それを要求するがまゝに、前後の顧慮なしに、裝置した。それは見かけは強制なしに、全たく法の形式に於いて、相互の自由の形式に於いて、「需要と供給」に由つて、賃銀の刺戟、一定の測定されたる勞働の量によつて買ひ取ることのできる大都市や工業都市の快樂の恥辱的報酬の刺戟によつて行はれ、更に選擧、言論、集會、罷業の權利等の、人が彼のいはゆる「自由」をもつて爲すすべてのことに對しての廣汎なる無責任性の權利の、見かけの自由によつて一層誘惑的に裝飾されてゐた。しかしながら、否、まさしくそれ故に、それはもつとも恐るべき強制、人間の凌辱であつた、人間はそのやうにして畢竟手段として營業の計算のために裝置され、そしてそれは法の形式を、ただ強制を隱蔽しそしてそれに由つて強制を完全にするために、濫用した。それはすでに永いあひだそしてまつたく全體の名に於いて行はれた、そしてそれは實際ますますすべてのものに對しての法則となつた。すべての人が上も下も、やがてはこのことのほかに何も他のことを知らなくなつた、すなはち、人は彼の靈魂を事務に、職業に、賣却せねばならない。そしてそれを人は「社會化」に於いて意味した、すなはち一部分に對してでなく全體に對してそれが必らず行はれねばならず、職業の兵卒であれ上官であれ（この明晰な軍隊的概念はすでに疾うから

通用してゐる）、すべての人が強制せられて一つの彼らによつて、內面的には何ら意欲せられざる、自由に選擇されたのでない、自己の本質から生じたものとして愛せられるのではない、ただもつとも外面的な意味で義務づけられた勞働を買取の價値として、一つのまつたくたゞ消極的な「自由」すなはちまさしくこの義務勞働からの自由、一般にあらゆる、そのやうにして買ひ取られたる自由をもつて爲すところのことに對する生存の殘部に對する積極的責務からの自由のために支拂はねばならないといふことである。

どうして人がこのやうなものに於いて社「會主義」の影をでも見ることができると誤思したかは殆んど不可解である。それに於いては殆んど何ものも共同ではない——勞働は共同でない、それは却つて極端にまですべての人々のあひだに分裂されそして分割されてゐる、何人もすこしも他人の勞働に頒けまへをもたない、何人も他人の責任をともに負はない、何人もまたゝだ自らも他人との協同作業に對して責任を負はない。たゞ共同なのはたゞ一つ裝置されてあること、すべてを一樣にする勞働强制の專制の下にの屈從である、すべてはただこの一事のほかは完全に分離されてゐる。實際永いあひだこの勞働强制の普遍性は普遍的に感ぜられてゐなかつた、しかしそれ

にかゝはらずそれは疾うから普遍的に存在してゐた。少くも原理上には。すなはち元來の意圖にしたがつてあるものはわづかの、他のものは多くの勞働を作業しなければならず、少數のものは、多くの、多數のものはわづかの享樂のために作業してゐたあひだは、それは感ぜられなかつた、それは永續的にはそのやうには進行することができなかつた、そこである程度の平等化のための戰ひとなつた、それがまさしく誤想されたる「社會主義」の意味に於いてであつた、それはたゞあだかもすべてを同樣の勞働强制に從屬せしめやうと欲する。この戰ひの共通性はたしかに一方には勞働者の一つの見かけの共同（すなはち多くは粗野なるそして煩劇なる勞働の比較的多大なる分量を比較的僅少なる、そしてそれにしたがつて低級なる享樂のために支拂はねばならなかつたところのもの）を、他方には勞働授與者（それに對しては反對の關係が妥當した）のそれを造りだした。けれどこの「共同」は明瞭に双方に於いてまさしく――陣地の共同以上のものではなかつた、それは純粹に目的のためのものでありそしてそれ故に享樂の最大量に對する勞働の最少量のための戰ひの期間に限られてゐる。それは戰ひが熄むや、否や破綻に陷る、それはまさしく理想的なばあひに於いて、目的が達ぜられたるとき、全く止揚せられるであらう。社會のか

ゝる觀念的なる絶對的氷點に共同體は今日、多分はまだ事實的には達してゐないが、けれどたしかに原理上到着してゐる。こゝではしかし原理がすべてである、とにかく吾々にとつては問題は原理である、何故なら吾々は人間を問題にしてゐる、物はたゞ人間のために問題にされる。

それは强制的社會化すなはち勞働者と勞働授與者の勞働責務と享樂權利に對する頒けまへを勞働組織の社會的强制秩序によつて平均することが、社會的目的に對してはたゞ不正當なる非社會的そして反社會的手段（すなはちたゞより普遍的にされたる勞働强制の）を使用しやうと欲しそしてそれに由つて、彼らの意圖に反して、いはばおのづから、それ故にまたただ相對的に、反動的になる、といふのではない、否その爲すこと全體が絶對的に非社會的そして反社會的である、それはまだ社會發展の第二次の形態の組織に首つ丈陷つてゐる、それはたゞその强制原理からまたその最後のまた殘留せる相對性を剝奪し、それを一つの峻嚴なる徹底さをもつて――その徹底性はその高度なる論理的そして倫理的、また美的そして宗教的効績さへももつことができそして疑ひなくその指導者らに於いてはもつてゐる――絶對的なものとし、そしてともにしかしながら背理にまで導く。そのやうにしてそれは――望むらくは――自己の終結を意味するであらう。たゞこ

の終結には悲しいかなもつともよきもの、それによつてのみ「すべてが善く」経過するであらうところのものが缺けてゐる、それは新しき始まりである、それこそはじめて、眞の社會主義であるであらう。多分、否たしかに、人は社會主義を夢に於いて眼中に置いてゐる、けれど人はそれをたしかに認識することができなかつたのである、さなくば人はそれについて、すべて吾々がその終結をもたらすために爲したそして今もなほ爲すところのことが、たゞにこの新しき始めからのみならず、ただそれがますます近くその考へられた終結に近づくだけ、それだけますますそれから遠く離れ去り、理想的なばあひに於いて、眞の社會主義を全くそして永久に不可能にするであらうといふことについて、一瞬間も不明瞭であつたはづはない。人はそれを見る、しかしたゞ蜃氣樓として、それに向つて走る、そしてそれをもつてはじめてまことに迷路へと走るのである。ただに吾々は職業を破滅する（それはたゞ副的な結果である）故にのみならず、吾々は人間を、職業を新たに、もしくはよりよく、その代りに、建立するであらうところの人間を破滅する故にである。享樂の自由に對する勞働强制、强制されたる勞働に對する享樂の自由てふ標語は、まさにその無制約的普遍化に於いて、人間の、そして純正なる勞働の、また純正なる享樂の、しかも普

ねく、すべての人にとつての、破壞以外のものを成立させることはできない。そしてこの公式はそれとともに危險なる長所をもつてゐる。それはもつとも凡愚なる知力、もつとも低劣なる衝動意志に合致することである。それだけますますたしかにそれはその惡しき目標をまた普遍的に達成するであらう。

吾々の最後の、そして唯一の、希望はこれである、すなはち、しかしながらなほこの全たく粗惡なる、それが何處へ必ず導くかが火を睹るやうに明白な豫量を直ちに中斷してそしてたゞちに新しき豫量を立てる能力ありそして意志ある人々が結局は存在することである。それは何をもつて、いかなる結果を目當てにして豫量することができるか、許されるか、豫量すべきか？　それはたゞ今日それのみ確かなること、すなはち一般的そして極端なる窮厄、そして窮厄から必然的に——窮厄の唯一の轉回として——生育する自救の意志をもつて唯一つ殘された社會的教育の途へと豫量することができそしてしたがつて必らずせざるを得ない、この社會的教育からのみ新しき社會的建築、眞の勞働と經濟の共同態の建築が生育することができそしてたしかに生育するであらう。——そして何がその目標であるか？　まさにそれ以外にはない、何故ならそれ以外には何

ものも社會的生活、それへ向つて教育し、建設しそして勞働すべき社會的生活ではないからである。それへ向つて勞働され、建築され、教育されるために、社會的生活は基礎づけられてゐる。

途と目標とは、いかにして？　と何處へ？　とは、こゝに合致してゐる。「社會的」、それは何かの豫立されたる（たとへ共同的にもせよ）目的のために隨意的に位置を取るのではなく、ただ新たに生育する共同性の意志から自由に、一つもしくは若干のでなく、ただ目的そのものゝためにむしろその事實上唯一なる共同體の、そしてそれのうへに築かるべき人間的生活の、目的そのものゝために、自己を定めることである。すべての强制的位置づけは逆行である。社會化を自由に意欲されたものとして思惟せざるものは一般にそれを思惟せざるものである、それはただ眞實に於いてはまつたく反對なる何ものかをしか名づくるものである。

それでは何らの國家的・何らの法的・何らの教育的强制がないのか？——實際無い、もし强制が自己意志の排斥を意味するならば。私は自己に對して强制を行ふことができる、私は事柄の命ずることを、事柄のためにまた他人の命令を、私に對して規準的なものとして承認することができる、私は例へば登山に於いて私のからだを縛らせそして拘束されて指導されるやうにさへする

ことができる。このやうな意味で社會的國家のなかにも「强制」はあることができる。未熟練者を暴力なしに安全に、その助けなしには彼らが墜落するのであらうところの懸崖を渡つて通過するのを助けるに手段は充分に存在する。教育（エルツィーウング）に關して曰ふならば、私は一つのそのやうな牽引（ツィーエン）、それが包含する意志に對する制約的强制を否認はしない。しかし教育といふことには、すべての外部からの牽引がただ自己（ゼルブストツフト）目的をもつての手段でなければならないといふことを含む。私はさきに、また乳兒や狂者や犯罪者も、もしも彼が助力のもとに、また鋭利に干渉する他人の助力のもとに自己の諸能力を向上的にもしくは改善的に形成するときには、一の社會的機能を充足するのであると曰つた。すべて教育の與へる助力は、たゞ人が自己を教育することを悟ることに向つてのみ、働かねばならない、さなくばそれは誤つてゐる。それが未成年者について妥當するならば、それはすべての人に對して妥當する、何故なら吾々はみな充實せるそして純粹なる人間的共同の要求に對しては未成年者そして惑へるものであるからである。すべての非共同的意欲は未成年態である、何故ならそれはまさにまだ獲得されざる、もしくは、普遍的にかあるひは何らかの部分に於いて、弱められたる共同的志操であり、したがつて社會的教育の缺乏であるからであ

る。

しかし正當として認識されたものがいまやまた實行せられるといふことについて人はいかなる希望を抱くことが許されるか？——私はしばしば曰つた、困厄は吾々にとつて教育者となるであらう、と。しかし吾々は告白しなければならない、それのみでは絶對的保障を提供しない。それは最後のなほ存留せる力を呼び起す、しかしそれは弱きものには最後の打撃を與へる。それではそれは何らの抵抗する力をもたないものをどん底まで衝き落すかもしれない。立ち能はざるものは沈落するかもしれない、しかしそれだけますます明晰に、何處に純正なる力が存するかは、顯はされるであらう。吾々の失脚の一つの主因はとにかく除かれた、それは利得（エルエルベン）のあまりにはなはだしき容易さとそしてそれによつて養成された安易なる享樂の淺薄さである。何故なら吾々はほとんど生活することができないであらう、そして今吾々の勝利者が吾々のうへに懸けてゐる奴隷狀態から吾々自らをただ徐々にでも買ひ放すためには血の汗を流さねばならないであらう。それを吾々は吾々の過去が吾々に相續せしめた重荷として吾々の背に負はなければならない、それは吾々の頽廢の原因に對して吾々の眼を鋭敏にし、そして吾々を後戻りせぬやうに戒めるであらう。

吾々は歡ひをもつて享樂を斷念することを悟るであらう、吾々はまさにそれらを斷念せざるを得なかつたのちに、吾々がそれらの享樂に於いて何ものをも失はず、むしろただ吾々を沈下せしめた一つの重荷から解放されたのであることを明晰に認識するであらう。ただ生活に必要なるものと生活を催進するもののためのみの共同的なる、必然的に共同的なる勞働、そのなかに存する、あらゆる劫掠やあらゆる個人的そして共同的掠奪や外面にそして內面に於けるあらゆる少數者支配そして多數者支配の奴隷狀態に對する防護、この普遍的そして共同的なる重荷の振り落しは吾々のうちに一つの自由の高感を解放するであらう、そしてこの感情こそ吾々にまた吾々が强ひらるゝもつとも恐るべき努力をも堪へ忍ばしめ、吾々の單純なる、決して勞苦なきにあらざる、しかし主として精神的なる歡喜を一層高き聖さをもつて滲透し、そしてそのやうにして吾々の生活にわづかなる幸福の感情の過剩を與へるであらう、この過剩なしには生活は人間にとつては負ひがたきものである。

ただ、人は問ふ、いかにしてそしてそれはただ快癒の始まりに達することができるか？　と。今やすべての人が病む根本的禍惡はそれをすでにこの始まりへと達せしめないであらう、その禍惡

はすなはちかの、共同體の根抵から分離したる生活全體によつて呼び起されたそして氣味わるく大きく育てられた貪欲である、それは力の使用の最少量と粗野なるそして行爲なき享樂の最多量といふ周知の二つの標準のほか何ら幸福の、そして行爲への責務の、標準を妥當せしめないではないか？　いかにしてそれが克服せられるか！　困窮——國家破產、饑餓、敵國の威嚇と暴行——は靜かなる建設には全く來らしめない、それはただ一つの普遍的無政府狀態を伴ひきたり、それに於いては各人はただいかに彼が刹那に於いて彼の生活を延ばしそしてそのかぎり刹那を享樂するかをのみ求めるであらう。このやうな考へに對してはただ一つの答へがある、すなはち、倒れんとするものは倒れよ、さうすればまさにそれによつて地盤は新しき建設のために廣くなるであらう。そのうへ吾々はベスタロッチの動かすべからざる信念を固守する、事態が人間を造る、といふことは眞である、しかし人間がまた事態を造る、といふことも同樣に眞である。事態が人間を惡しく形づくつたのであるならば、また事態を、それが人間を再び正しく形づくるやうに形成することがまた可能であるであらう。

すべての人が罪があり、そして何人も罪がない、しかしまた、何人もしかしてすべてが正しく

くそして善ではない。神の太陽はなほつねに惡しきものと善きものにひとしく照し、そして神のふらす雨は義しからざるものにも義しきものにも賞り多かるやうに過ぎてゆく。健康なる萠芽の力はなほ存してゐる、重要なのはそれが芽生えすることのできるやうな地盤を再び見いだすことである。少數の、その心のうちに今日すでに——もしくはまだ——共同の精神が生きてゐる人々があるならば、私はこれらの少數者のために暴れ狂ふ世界の大洋のなかの一つの小さき島を、乾いた沙漠のなかの一つのわづかな綠地を要求する、それはこの深く病弊せる人類の可能なる快癒の實證のためである。人は珍奇なる植物や動物のために保護園(シュツツパルク)を設ける、私は、人間的に生きた人間のために、それはたゞ實驗のためにであつても、保護園を要求する。あたかもペスタロッチが彼の實驗的學校(エクスペリメンタルシュール)を要求しそして遂ひにそれを達成し、それとともにしかしながら全地上を征服すべく使命をもつてゐたそしてなほもつてゐる一つの民衆教育の體系の基礎を置いたごとくに、そのやうに私は健康なる生活建設の實驗學校(エクスペリメンチールシュール)を要求する。それが世界大洋のなかの一の島であれ、沙漠のなかの一つの綠地であれ、それは要望されたる業績的證明を確實に與へるであらう、そして次第に島や綠地の多數そしてより大いなるものができ、そして人間の住む地表全

體の大いなる島が、この今はそのなかで人間が迷ひそして渇いてゐる、熱暑に焦げてゐる沙漠が、緑なしそして花さく、いまこそはじめて人間的なる生活の一つの唯一の場所となるであらう。

吾々の希望はあらゆる暴風に抵抗しなければならぬそしてまたつねに抵抗した三つの基柱によつて支へられてゐる、第一に、一たび認識された事柄の眞理は必らず遂に貫徹ぜずにはゐない、世界歴史は、眞理の萠芽が不滅であることを、證明する、眞理の豫言者らはつねに、必らず來らなければならなかつた新しいきものの、多くは無意識なる、創造者となつた。光は照らさずにゐることはできない、そしてつひにまたもつとも暗黑なる隅にも透らずにはゐない。認識はしかしながらいまいづこにもめさめてゐる、それは、今日なほしか見えるより以上に急速に、また群集のなかへと透入するであらう。それは經濟の基礎からの共同體の再建の明白なる目標を指す、それはまた目標に向つて道をも指し示すことができる事であらう。第二に、このやうな認識によつて一ただ呼び起されそして解放された人格の意志は指されたる途をまた進むであらう、むしろ艱難なる先驅者の勞働をもつて自らまづ途を拓き、そして次第にすべてをその途のうへに、純正なる國家の設立に由つて、導くことを了解するであらう、純正なる國家はかつて在りしそして今日

難破したるものとは完全に反對に、全くそしてただすべてに於いて自己行爲のうへに、そして自己行爲の共同のうへに、外部的なる强制のうへにでなく置かれる一つの國家である。第三に、創造の原始性と直接性、その對極（グーグンホール）たる普遍精神、諸民族が昔からそれに神的者（ダスゲツトリツヘ）てふ名を與へた普遍精神に深く根抵をもつ人間精神の個性の無盡の源泉から自由に創造する創造、それは自己のうちにすべてに適應しそしてすべてに優越せる無制的性の高翔的なる、法悅的なる威力を藏する。その裡にこそ教育の決定的な力が存する、認識や意志もまたそれに命令することはできずしでただ聽從せねばならない、何故ならそれらはそれをもつて創造的な精神がそのもつとも貴き被造物のなかへと、人間形成の生きた藝術品のなかへとはたらきかける兩腕にほかならぬからである。まさしくドイツ人に於いてこの無制的性の精神の幾分はつねに生動してゐた、それは吾々の偉人たちのだれにも缺けてゐなかつた、しかしまた全たく單純なる人々もその幾分を、今日もなほ、自己のうちに荷つてゐる。眼の窓をとほして彼らの深奥の心情のなかをうかがふに慣れた人々はそこにしばしば深き驚異をもつてそれを見いだす。

されば吾々の要求するものは何も不可能なこと、何も人間以上のことではない。吾々は、人間

が實に彼にとつて最も確かな、最も手近かなもの、彼自らを、見いだし、自己を決して再び何らか外部から彼に命令せんとする法則に、悟性のそれもしくは意志の、もしくはいかなる威力のそれであれ、委ねざらむがために、この己のが自己に於いてみづから堅く基礎を築くこと、のほかには何も要求しない。また人は吾々にかう答へてはならない、今日はもつと切迫せることを爲さねばならぬ、それは、(人はいふ)、ぜひとも爲されねばならぬことである、もし吾々が滅びてはならないならば、と。吾々の答へはただこれである、「然り、吾々は滅びる、それ以上に、吾々はもし吾々が自ら意欲することを、吾々自らを自ら意欲することを悟らぬならば、滅びるに値するものである。唯一にこの意欲こそ今日重大なるものである、即ち、もしこの意欲がいま存在せぬならば、意欲せしめること、すなはち教育こそ大事である。そしてだれが教育するものとなるか？　精神的なる人々こそ。ただ人は精神的といふことを一面的に知力の高さによつて測るな、ただ同様に意志の純眞と決斷性とによつて、形成の創造者的威力と宗教的熱情の深さによつて、測れ。けれど今日の精神的なものは？　それが吾々の正しき教育者か？　それについてはなほ一語を言はねばならない、この場所では一つのことで充分である、この精神性が今日、今日の日が命

ずる教育の課題へと勇氣を起さねばならば、それがいままで悲しいかな拒んだごとくに、いま拒むならば、しかるときはそれはみづからそれの墓穴を掘るのである。けれど呼ぶ聲はあまりに高く響く、それは聞かずにはゐられない。自己を教育されることを欲するものが乏しいであらうなどといふことは憂ひるに及ばない。たしかに、もしもこの教育になほ精神的隷屬化の微少なる暗影でもかゝつてゐたならば、それは憂慮すべきであらう。しかしそれは反對に解放を意味する。無數のものがそれを待つ。彼らは歡喜をもつて鎖を放たれそしてやがてもはや解放者を要せず、救ひを救ひ主その人にもたらすであらう、救ひ主はまことに他人の解放に於いて自己の自由を求むるからである、何となれば自由がまた自己の外にも何らの非自由を忍びえぬ、といふことのみが純正なる自由の確かな標徴である。

この自由のために戰はねばならぬ、すべてのいままでのものよりも高貴なる戰ひを、それについてこそ眞にニーチエが深き理解をもつて偉大なるヘラクライトスの名を與へた箴言が妥當する一つの戰ひを、戰はねばならない。

戰ひこそ、わが友らよ、
地上のすべての幸福を與ふるなれ！
然り、友とならむがためには
火藥の煙を要す！
友はこの三つを一つに合す、
困苦に對しては兄弟たり、
敵に對しては平等者たり、
死に對しては自由者なり。

死――敵――困苦――友情への、共同へのこの三つのもつとも强力なる敎育者は今日吾々には缺けてゐない。それ故に吾々は希望をかけることができる、吾々がみなこれらによつて自由へと平等へと、同胞性へと――すなはち共同へと、敎育せらるゝであらうことを。

三　救ひへの途

一

吾々の深い根抵から破綻した國家狀態と國民狀態の救助のために能く行はれうることそして必らず行はれねばならないことについて明晰を求めるあらゆる勤苦に對して、人がそのうへに基礎を据ゑなければならない諸ろの豫件が刻々に動搖してくるといふことには一つの殊に勇氣を沮喪せしめる困難が存する。物價騰貴は無政府狀態を生む、無政府狀態は物價騰貴を高める。外的壓迫は內部の弛緩を促し、そして後者は更に外部からの壓迫を增加する。途方にくれてゐることはヒステリーを產みだす、ヒステリーはただ新しき途方にくれた狀態を生む。兩者は暴行へと驅る、暴力は對抗する暴力をよびおこす、そして兩者は、つねに互ひに刺戟しつつ、あらゆる安靜なる思慮を全く徒勞に歸せしめる。すべてをもつてまた他の諸國民の尊敬と同情のわづかの殘りさへ消失する。そして吾々の完全なる孤立は內的復興をただそれだけますます困難にする。しかしまた苦がき慰め、ドイツが滅びなければならないとても、他の世界はその一點に於いてほつと呼吸

をつきそして人類の福祉のためにふたたび勞働するであらう、といふ苦がき慰めさへも次第に消えてゆく。何故なら禍ひは抑へがたく進んで喰ひ入つてゆくからである。同樣なる原因はいづこに於いても同樣なる結果を從へてくる。世界諸國民の暴力的勝利はまたおなじく吾々のむかしの見かけの勝利とおなじく破綻の萠芽を自己のうちに含んでゐる。危險は一般的である。危險は全地球のために、人類のために存してゐる。

第一に必要なことは人が危險をその大きさ全體に於いて凝視することである。腐敗はそこにある、それは氣味わるき內面的論理をもつてますますひろく成長する。それはすでに疾うにかつて革命などを思はなかつた周圍をも捉へた。嘗つてはあのやうに强く證據たてられた勞働と秩序のドイツ的精神は民衆のあらゆる層に於いて、上も下も同樣に、はなはだしく動搖させられてゐる。全體が危險に瀕してゐることが顯著であればあるだけ、それだけますます個人はいかにして彼が彼のものを安全にもたらしそして一般的崩壞のなかから、少くもけふから明日へと彼の生命をつなぐだけのものを取り留めやうか、といふことのほか一般に何も他のことを考へない。このやうな時機に於いて共同の幸福を指し敎へるものは聾に向つて說敎するものである。吾々はもつとも

よく勞働と秩序とを愛するものであつたことく、またもつとも平和を愛するものであつた。吾々は今日もはやそれでない。個體の放恣なる暴力意志は嘗つてあらざりしほどはなはたしく、すべて現實に成起するところのことを決定する。これに對して防ぐものは眞實に於いては積極的な能動的な共同意志ではない、それはただ新しきものに對する單なる惰性の抵抗である、それは內部からもしくは外部からの力强き打擊に對しては永くは堪へることはできない。戰爭は暴力（人が自らそれを使用し得る位置にあるときには）の、そして怯懦なる逃避（他人が暴力を用うるときには）のたゞあまりに成功せる敎師であつた。多數に對する信賴は殆んど公けなる卑怯にまで達した社會的劣弱の徵候である。人は多數の背後に隱れる。自己の行爲義務と社會的責任を無名の全體に委讓することは個々の人に自己を決定的にある立場に置かねばならないことの勞苦を節約する。それが共同精神と呼ばれる。自由と呼ばれる！　たしかに、今まで人がそれに對して奴隷的に屈從した諸ろの威力は倒れた。けれど吾々はそれをもつて自由になつたらうか？　純正なる自由は、一つの少數者の一方的な命令威力の代りに一つの明晰なる、精神的一致によつて强力なる總てのものの自己意志が成立する、といふことを意味せねばならぬ。けれど今共同精神として現

れてゐるものは、實は、ただ總和されたる無力に過ぎぬのではないか、單に外的に一つの點に集合されたる多數者の無意志ではないか、自體にすでに强力ならざる、その內的矛盾によつてそれ以上にすべてをたがひに弱めつつある個別的意志の相互的制限から衰れむべき最後の結果として殘留したものにすぎないではないか？　隱れたるところに於いてなほつねに努力されつつあるその倒壞せる暴力の再建がまつたく考量の外に置かれるにしても（何故ならまたそれにも堅固なる內的核心が、確實なる歸結とともに、缺けてゐる、）それでもしかしながら多數としての多數に於いて一つの積極的な、創造的な共同の力が存する、と信ずるのは一つの危險なる誤想である。この力はたしかに諸黨派の機械的均衡には存しない、それはまたいづれの個々の黨派にも存しない、何故ならそれの各々はまたただ無規定的に多數なる、それらが同じことを意欲する故にでなく、ただそれらが同じことを意欲せざるが故に共立する、それ自體には虛弱なる個別の意志の機械的平均によつて存立してゐるからである。一つの强き、內容に滿ちた、生產の力ある理念はいづこにも自己を語らない。そしてそれ故に、もしも純正なる自由の戰ひのめざましき靈感に、したがつてまた現在の革命に對しての眞劍なる尊敬に、外面にも內面にも、悲しむべきほど缺乏してゐ

るとしても、ふしぎではない。

何處からこのやうな社會意志の挫折がきたか？　たとへ外的無政府にはまだ到らないとしてもこの事實的な內的無政府狀態は何處からきたか？　それは今日もしくは昨日から出たことではない。疾うから勞働者は內面的に彼の仕事から離れてゐた。ただに損害がただもつとも明白にすでに今現れてゐる賃銀勞働者のみならず、幾分かそれよりも隱蔽された仕方で、同じことはさまざまの程度の差別に於いて、すべての勞働について妥當する。「職」（ベルーフ）は疾うから大多數の人に單に事務、生計となつた、ただきはめてわづかのものはその爲すところのことへと內面的に「職に召され」（ベルーフエレ）てゐる、そしてそのことを知つてゐる、しかし大多數には彼らの勞働は彼らにその本質の核心から生じたものでなくただ彼らに外部から賦課される。それ故に彼らにとつてはより安易なる生計の仕方が誘ふときには彼らの爲すことを拋棄することは何でもない、ただ勞苦なき利得のための一般的競爭に於いてのそのことはますます困難になつたにすぎない。そのやうにして人は「彼の」、すなはち一たび負はされた、さうたやすくは振り落されぬ勞働に繫がれて、勞働しつづける、あるひは怠惰に於いて、あるひは絕望的な忙急に於いて、さうして眞の勞働のよろこばしさな

しに、それ故に達成の内面的報酬なしに。しかしながらそのやうにして勞働者の共同體的生活はただますます進行する分解へと落ちる。すべて人間をその故郷へと結びつける紐帶を斷つ一つの生活に於いて、どうして純正なる郷家感情（ヘイムゲフユール）が現はれることができやう？　家族や氏族の結合　父祖の尊敬と、夫婦の貞操、生ひたち來る若き代のための樂しき豫考と豫慮、教育されそして教育すること、狹き周延内に於ける廉耻ある道德的安立、すべてそこからのみ一つのよりひろくはたらき能ふ共同感情・國家そして祖國の念が生ひたちあたふすべての健康なる根抵・どうしてそれはすべてがそれを挫くべくはたらくところに於いて自己を保つことができやう？　一つの過饒なる結社や集合の組織はあるひは活潑なる社會的生活の觀を呈するかもしれない。けれど人がよりよく見るならば、人はまさにそこに消えてゆくただわづかの純正なる共同の念を見出すのみである。それは殆んどつねにただ攻擊もしくは防禦の戰ひへの協力的行進にすぎず、個々の人の刹那の利益のためのもの、そしてただそのために暫時的に結合したものにすぎぬ。決してそこからは純正なる共同化（フェルゲマインドウング）は生じない、却つてすべての戰ひからと同樣に、ただつねにあらゆる結帶のますますはなはだしき分解が生ずるのみ。吾々の生活は職責なく、家なく、誠實なく、良習なく、

歡びと平和なきものとなつた、そしてそのやうにしてまた祖國なく、國家なきもの、無政府的になつた。そしてすべてから離脫するところのものは何者か？　それは自己か？　けれどそれではだれがなほ眞に自己をもつてゐるか？　だれがなほまだ一人の獨立なるものであるか？　あらゆるも怠せる自己飽滿と自己燻蒸とに於いて、却つて純正なる自己性と眞の個性の痛切なる缺乏があるのではないか？　共同からの分離は一の自己を築くものではない。個體と共同態とは、それらは對ではない、却つて各々の一つは他の根であり同時に果實である。根が腐つてゐればまた果實惨憺變敗する・これが腐つてゐれば、これはもはや新しい根を生ずることはできない。そのやうな共同の平板化に於いてまた個性も平板化せられる、またその逆も同樣である。吾々は魂なくなつた、そして同樣に共同をもたなくなつた、そして兩者とともに——神なきものとなつた、何故に反魂の深底とそして內面的共同の體驗以外に於いて人間は神を生きないからである。そのやうにして吾々はすべてを離れ、失つた。けれど離れてあることは自由であることではない。自由は意欲に關する、しかるに意欲は緊持である。

いかにしてこれらすべてのことは來つたのか？　ただわづか以前まですべてはめざましき向上

に於いてあつたではないか？　そのときすべては見かけは大きさと廣さへ赴いた、いかなる高みも昇られざろはなく、いかなる柵も倒されぬはなかつた。そして向上が犠牲を要求したとしてもそれは犠牲をささげるに値するものではなかつたか？　人間は神の模範に從つてはならなかつたのだらうか、「自由のうつくしき現象を破壞せざらむがために、惡の凄じき群を己のが宇宙のなかにむしろ暴れ狂はしめ」、永遠の法則のなかに包む神に？　けれどそのやうな尺度は神々には妥當しても人間には妥當しない。半神らは吾々に新しき人類を築かうと欲した。彼らは魂の深處の永いあひだ蓄へられたる力から汲み出し、自己を生活のひろき潜底のうへに高く擧げた。巨人らは山のうへに山を積みあげた、そして古い神々をその座から倒さうとした。けれどつひに地盤の支持力が、不自然なる建築にもはや充分でなくなり、遠心力が超過するに到る點が必らず達せられずにはゐなかつた。倒壞はついで來らねばならなかつた。倒壞は巨人らをその廢墟のなかに埋めた。一つのより弱き族が生じた。永いあひだ輕蔑された、低く抑へられてゐた群衆の共同力はつひに起つことができるやうに見えた。けれど強者の力が破綻したのち、力は弱きものにその固有の、內面の核から芽ささうとしなかつた。たとへ一つの見かけは豐富なる、しかし矮少なる雜

草が地盤を蔽ひ、もはや天空に聳ゆる木がそれを地から除かうとしなかつたけれど。たしかに人々は民衆を「教養」すべく骨折をした。けれど教養は民衆にただ外的に附着したのみであつて、それは外緣に達したが、しかし皮のしたにまでは徹しなかつた。勞働に馴れた民衆は一つの純正なる、勞働そのものを豐かにする精神の營養を僅かしか吸收しない。けれど民衆は本能的に、與ふるもの自らが純正なる教養の根抵から、まさしく勞働の根抵から離れ、したがつて自己の自由なる生長一般に次第に遠ざかつて、もはや深奥の核心から生產するのでなく、ただ傳承されたるものを更に傳承することができるのみであることを、感知する。そのやうにしてまた魂の純なる飢渴は滿されずに殘つてゐる。それは、ペスタロッチの犀利に適切なる言葉にしたがへば、あたかも人間がその共に人間なるものによつて世話されることが、ある能はざることであるかのやうである、自然全體と歷史全體とは人類に呼びかける、各人は自らを世話せよ、人間は何人をも世話してはならない、そして人が人間に對して爲しうる最良のことは、人が彼にそれを自ら爲すやうに教へることである。この言葉は吾々に判決を下すものである。それこそ吾々につねにすでに缺けてゐたことそしていま吾々がもつとも必要として要するときにもつとも痛切に缺けてゐるこ

とである。それがないあひだは、すべて他のことは徒勞である。何ものよりも、共同は外部から生み出されることはできない、それはただ內面から生ひ出でねばならぬ。各人はただ彼が自らを內面的に築造するとき、また自己のうちに他のものとの共同を再び築き、そしてただ共同に於いて、共同とともに自己を築くことができる。共同意志に由つて自己意志、自己意志に由つての、共同の各構成員に於ける自己力の覺醒、支持、增盛に由つての共同意志、それが解答でなければならない。社會生活と社會的教育、兩者はただ相互的に、一は他によつて、生育しそして存立することができる。

二

これをもつて何が必要であるかは言はれた。けれどいかにしてそれが、吾々に顯れたごとき一つの境位から出發して、達成せられるべきか？

今日の顚覆のもつとも痛切なる缺陷は一つの大いなる、深刻なる、創造的なる理念の缺乏である。それでは「理念」(Idea)とは何か？　單にいかにあり能ふかそして必らずあるかの觀念ではなく、勇敢に未來へ徹入する計畫、思念に於ける目標の豫量である。また單に目標への努力ではなく、最大可能なる効果のために使用されうる力を仕掛けることである。兩者はたゞ遂行的なる行

爲の因子である――前者は靜體的、後者は動力的因子である。一は、現存のもの、用うべき手段や材料をもつて算定しつつ、經濟(ヰルトシヤフテンド)しつつ、社會的形態に於いては、經濟的である。他の一は、つねに前方へ邁進しつつ、算定可能なる手近のものを超えて、ますます遠大に、支配と統整とに向けられてゐる、それは社會的形態に於いては、政治(ポリチッシュ)的である。發展、保障、威力と作業能力の增加、あらゆる抵抗の克服、戰ひそして勝利、「國(ライヒ)」と命令力の支持・それらすべてはこの範域に屬する。それがたしかにまた共同の、そして共同性によつて高められたる權力使用のための意志の協同作業と結合を基礎づける。しかしもしそれがより深き根據から、すなはちまさしく理念の根據から、來らざるならば、それは結局はそれが爲すべきであらうことの反對を結果する。一もまた他もそれ自身から規定するものではない、それはただそれが他のものによつて規定されるときに自己を規定する。それは眞に支配的ではない、それはそれが自ら支配されるときに支配するこれら二つの、それ自體にはただ實行的なる善良の「何處へ」と「何の爲めに」とを本來規定する最後の、最深の力、それこそ吾々が理念と名づくるところのものである。

そしてここにいまやすべての內面的腐敗の最深の根據があきらかに示される、その意味全體よ

りみてただ被使役的なる透察と意志の、すなはち經濟と政治の諸勢力はその主人を求めてゐる、それらを自己の用途に正しく定置する主人を、そしてそれを見いださない。何故なら主人たらねばならぬもの、すなはち人間は、今や彼の所有の被使役的諸勢力の下に奴隷となつてゐる。それに由つて彼の裡には直接なる自己力は弱められ、殆んど消滅してゐる、原始的創造的なる、自己から規定し方向つけ、單に外部から外部へ方向づけられたのでない、そして方向づけられつつ翻つて間接に方向づける行爲の精力は吾々自らのうちに麻痺しそして、もしそれが死滅されるものならば、死滅してゐる。幸ひなことにはそれは不滅である。けれどそれが自己を自ら見いださぬかぎり、自己を自己のうちに捕捉しそして解放しないかぎり、それは自己のうちに收縮し、外部に對して作用なく、假睡、假死の狀態に殘留する。この自己力のめざめ、それこそ理念の充實した照明である。その標識は、直接性、內的無限性、超限性である。それによつてのみ人はまことに一つの自己をもつ、むしろ一つの自己である、それによつて人間は自己のうちに中心點を見いだし、はじめてそこから、あだかも感覺的そして運動的神經中樞からするごとくに、透察と意志の力を外部へと、周延に向つて、發揮する。透察と意志のすべての一面的な、見かけだけ自律的に

外部へと努力する發展はただ人間そのものを外面化するやうな、彼をその根抵から分離するやうな結果を生ずる。有限的な業績に自らを委ねて、そのとき彼は業績が最高ではなく、人間こそ最高であることを忘れる。知力の人や意志の人は、彼らは尨大なるものを業績に於いては成就するかもしれないが、しかしただ斷片的人間である。機能の分配は最大可能なる作業の條件である、しかし最大可能なる作業は決して絕對的目標であつてはならない。勞働は分割されることができる、しかし勞働者は斷片化されるべきではない。そのとき彼は自己を喪失する、そして最後には勞働に對して——勞働する人間が缺けることとなる。勞働する人間は實にその勞働よりも以上のものである。人間であること、それが重要である、けれど人が單に一つの勞働の器具であるならば人間は存在しない。そして、外部へ向けられた勞働の單なる共同性でなく、自己の核心を形つくるところのものは、それはまた唯一に眞實なる、內面的に基礎づけられた結合、自己と自己との結合を創造する。それが眞の共同體である。それははるかに汝と我とのかなたに、外的事業に於ける單なる協同作業によつての外的結合のあらゆる偶然的境界を越えて、また民族と時代のあらゆる柵を越えてかなたに、達する、それのみが、人類を基礎づける、歷史を基礎づける。しかしそ

れが一たびめさめそして自己のうちに解放されるならば、それはまた創造的にはたらかずにはゐられない、いまやはじめて知力と意志の魂の入つた勞働に於いて、社會的には魂の入つた經濟と魂の入つた國家に於いて。けれど經濟は、國家はそれを自己のなかから產みだすことはできない。それについてはこれが妥當する、それは外にあらず――それは汝の裡にある、汝はそれを永しへに生む。汝、それはすなはち、彼の勞働の有限的制限のなかに、知力と意志とに、拘束されたるにあらぬ、內的に自由なる、無限へと、超限的なものへと向へる人間精神である。

これにしたがつて今や社會的生活の三つの根本機能、社會的經濟、社會的政治、社會的教育、の規準的關係が規定する。社會的經濟の目標は協同作業の熟慮された技術に由つて、その使用し能ふ諸勢力を合目的に統整し、それによつてそれらの諸勢力が最小の消費をもつて最大の可能なる業績を擧げうるやうにすることである。社會的政治は勞働意志の適當なる體制化に由つて、勞働が爲されそしてその支配する諸勞働能力を整序して勞働意志がつねに維持されそして不斷に增大する課題とともに同時に增大するやうにそれを保障することである。けれど兩者はただ兩者自らが規定されるときに規定することができる。兩者を規定すべく職責あるものはただ第三のもの、

社會的敎育である。それは兩者を、勢力と意志とを、魂の內的創造的源泉からの協同作業へと、それらが自己の衝動から自己を正しく位置取るやうに、展開することを努力しなければならない。單にそれら自身が健全なる循環に於いて自己をたえず再生しなければならないのみならず、何よりもそこから意志と能力とが流れいづべき魂の根源力が傷つけられずに保たれそして自由なる流出のために解放されなければならない。それが、勞働の必然的分割が勞働する人間の內面的內裂を生じてはならない、といふ要求の充分な意味である。それはただ、しかしまたただ、各々の力と各々の勞働意志がまさしくそこに、各人が全人間として、心をもつて、自己の勞働に從事することのできるところそして仕方に於いて。はたらくことができるときにのみ、あることができる。ただそのやうにしてのみ各人は勞働を正しき意味に於いて彼のものとして、外部から彼に强制されたものとしてではなく、感知するであらう。それとともにしかしながらそのときは社會的に必然的な勞働はまた確實にされ、そして個人に對してとともに全體に對してその收益は保障せられる。何故ならただに各人は頭腦と心情と手とが忠實に協力して參與するところに於いてのみその最善のことを爲すのみでなく、しからざるばあひには、勞働するものは自己の勞働から內面的に

分離されてゐる、そしてそのときには彼はまた外的に勞働から離脱することを努めるであらう、彼は、もしそれが成功しないときには、自己を彼の勞働の奴隷として感じそしてただ勞働の最小量をもつて怠惰なる快樂の最大量を買ふことをのみめがけるであらう。勞働に對するそのやうな態度が一般的になるならば、それは免れがたく現在眼前にあるごときあらゆる害惡、國內的またやがて外的戰爭に、完全なる破滅に導くであらう。

そのやうにして、社會的教育の包括的、普遍的組織に由つて、各人が彼の勞働を全く彼のものとして感覺しそして單に頭と手とをもつてのみならずまた心情をもつてそれに從事するやうに、配慮するといふことは社會的經濟と社會的政治の最高の固有の關心事のうちに存する。この要求に適はざるすべての勞働秩序は「掠奪」である、人間をもはや彼のものにあらざる、他のものによつて、より有利なる外的位置に由つて權力をもつものによつて彼に强制されたる、勞働のもとに奴隷化することである。しかしすべてこのやうな掠奪は、それが個人によつての個人のそれであれ、階級によつての全階級のそれであれ、もしくはすべてによつてのすべてのそれであれ、他のものによつての全民族の、全世界部分の——ヨーロッパ諸民族とその植民者によつての他の大陸

の掠奪、もしくは更にまたふたたびすべてによつてのすべての——掠奪であれ、それは避けがたくただ一部分ののみならずすべての破壞にみちびく。暴力はそれを使用するものをそれに虐げらるるものとひとしく狹め、縮め、矮小ならしめる、それは後者よりも前者に更に甚しい。何故なら壓迫に對して內面的自由から反抗するところのものは、少くもその意志に於いて、彼を壓抑する强制から自由である、これに反して他方は、ただ自己をその位置に支持するためのみに、つねに下に向つて壓迫しなければならない。この强制の使用への內面的强制は必然的に彼自身を壓し下げる、しかるに上へ向つての反壓はつねに解放を己れのまへに見そしてそのための格鬪に於いて彼の力を生き生きと保つ。勿論それが達せられぬあひだは、兩者はたがひに銷磨して全體の損失となる。しかし自由はただ社會的經濟と政治を、一つの深く徹入する、すべてを魂の核心まで捕捉する教育の基礎のうへに、嚴密に追求さるる、各人につねに顯在する目標をもつて、すべてのそして各々の一方的もしくは相互的壓迫と掠奪の排除の目標をもつて、新たに建設することによつてのみ達成せられる。壓迫と掠奪のもとに吾々の意味するのは、單に勞働なき利得や利得なき勞働のみではない、それではあだかも「利得」、すなはち無選擇的消費への權利が勞働の目的

と報酬であるかのやうに聞える、否、吾々の意味するのはいかなる仕方に於いてでも勞働とそして利得（すなはちその惡しき意味に於ける）のもとに人間を奴隷化すること、そしてそれとともに個人と共同體とのために、解放されたる精神の自己力から、人類の理念にしたがつて、健康なる生活を建設することを無効にするところのものである。この生活建設のみが純正なる利得として記帳すべきものである、すべて他のものは損失と損害として記入すべきである。

それが以前から必要であつたならば、それは今日一層必要である。簡單なる生活の關係に於いては命令者と服從者の權力關係は外的反抗なしに、また多くは內的反抗なしに、負擔される、何となれば勞働と生活構造全體の直接さに於いて各人に彼にもつとも手近かなる、たやすく達せらる彼の單純なる外的必要とそして彼のあまり發達してゐない、殆んど意識されざる內面的靈魂的生活の充足は全體に於いて頗たれそして同時にその自然基礎に近く留つてゐる、あまりに遙かなる遠方へ向つて努力せざるそのやうに結合された人々の關係は充分に緊持され、それによつて一の安固なる、家族的な共立がつねに維持されるからである。豐富なるまだ發展せざる・殆んど著しくは發展へと迫ることなき萠芽はそれに於いては永いあひだその多產性を保存することができ

る。けれど增盛する「發展」とともに、すなはち勞働と消費の、したがつて勞働と勞働[illegible]序のあひだの關係の間接性の增加に伴つて、――それは多樣にされ、複雜なるしかたで交錯する必要とそしてそれとともに勞働條件との結果として成立するのであるが――直接なる、しかし殆んど意識されざる權力關係はより間接的なる、しかしそれとともにますます意識の鮮明なる光線のなかに結ばるる契約の關係へと變化する、この契約に於いて實際はじめて外的手段と能力に於いて優れるものもしくは有利なる位置にあるものが自己の利益を他の劣弱なる位置にあるものに對して持續的に確保する、しかしまさしく後者の勞働（彼はしかしつねにそれに依賴しなければならない）を確實にあてにする事ができるためには、つねにそれを勞働と契約の遵守に對して有意志的であるやうに考慮しなければならない。それに由つて勞働義務の、また勞働收益の頒けまへのある程度の均衡は、畢竟契約締結者の利己の基礎に於いて、原理的に一般的に可能である、そしてことに共同の勞働の全効用の增加にしたがつて、したがつて一般に全體の勞働及び利得の組織の向上的發展にしたがつて、勞働者が勞働に對して一般的には有意志的であるやうにまで、もしくは彼が暫時的に動搖的になつたとしても、つねにより大いなる自己の利益に由つて再び有意志的

にされることができるやうにまで達成される。けれど、利己が、發展の過程にしたがつて、ことにつひに收益の減少のばあひに、ますますはなはだしく粗野なる相互的暴利、むしろ搾取の性質を帶びるにいたる利己が、双方にとつて協同的勞働とそして相互的契約遵守の本質的決定的動機であるかぎりは、平均はますます動搖的そして不安定になり、それを、もしも組織のはじめには無際限に進行するやうに見えた擴張がつひに感知されるほどその終局に傾いて行くときには、維持することはますます困難であるであらう。そのとき、疾うからすでに萠芽に於いて存在しそして多くの人によつて認識され、今日峻嚴なる形態に於いてすべての人の目のまへに横はる、あらゆる害惡は必然的にめざめる。それに對してはさきに示したもの以外に何らの救濟はない、すなはち、經濟と經濟の保障として役立たつ政治的組織の形式は原理的にそして根本的に、各勞働者の勞働形成に對する直接的自己參與の形式に變化しなければならない、これは經濟的そして政治的意味に於いて、平等なる義務と權利に、すなはち各勞働者の健康に發達した自己能力とそしてそれによつてのみ達せらるる社會的自己意志にしたがつて、そして同時に平等なる社會的利得すなはち各勞働者が協同的に勞働するものの總體の共同なる生活の建設に對してもつ充分なる分け

まへをもつてのそれに變じなければならない。

いかなる精密なる意味でここで平等について語るべきか？　平等の要求は、むづ多くの反省なしにいへば、第二の發展時期の不斷の抗爭が必らず生ぜしめる均等（アウスグライヒ）の必要から成立する。しかしそれはつねに動搖しつねに浮遊する瞬間の均等に留まるべきではない、それは抗爭を決して現實に終結せしめずただ次の瞬間に於いて一方もしくは他方の過重によつてただちに破壞される瞬間的決算表を作るにすぎない。否つひには一つの持續的な均等が達せられねばならない。それがしかしながらただ双方が、すなはち上から壓迫するものとそして下から壓迫に對して自己を主張するものとが、彼らの壓力を相互の破裂の點へと向けることをやめ、そしてむしろ一つの恆存的平和の立場を共同的に意識的に努力しもとめることによつてのみ可能である。この立場はしかしただこのやうにしてのみ考へられる、なすはち双方にとつて、すなはちすべてにとつて、人間であることへの、自由なる自己であることへの、內的高揚が支配的原理となり、すべての經濟的勞働や政治的命令權力の單なる外的規整はしたがつてこの唯一の最終の目的に從屬せしめられ、それをもつてそれ自身單なる瞬間の利益の打算から超越して、人間の解放の無限の目標に向けら

れることである。有限の範域に於いては平等は空虛なる妄想である、ただ無限のまへに不平等は消滅する。不等なる能力、不等なる才賦の方向、鳥瞰的觀察や豫見そして前進的精力の異れる程度、したがつて指導か聽從への規定、それはいつまでも殘留するであらう。けれど各々の能力、小であれ、大であれ、各々の種類の才賦、それは單純であれ豐富であれ、各々の適能、それは指導のであれ聽從のであれ、すべては奉仕である、一として主人を演じそして他を臣隷としてはならない。すべては奉仕せねばならない——共同の勞作に。それはしかしながら——生產さるべき物件そしてそこから汲み取らるべき享樂ではない、それは各々の人間に於ける人間性の建設である。それにすべての勞働とすべての受用は絕對的に從屬せしめられねばならない。そのやうにしてのみすべての經濟的勞働と政治的組織は自由のうへに、實にすべての平等なる自由のうへに据ゑられる、自己はふたたび、かつてそこからそれが發展の第二時期の暴力經濟と暴力政治によつて排除されたる、中心點に立つ。それを人は「中心破壞（デヴエントラリゼイオン）」と名づけてはならない、いままでそれは外面的にではあるがつねにそのやうなものとして表はされてゐたけれど。むしろまさしくこの社會的秩序こそ勞働をその眞の中心に、勞働者自身に、固く基礎づけそしてはじめてそこから周延へ

と、遂行すべき、ますますひろき共同勞働の圓周に於いて組成せらるべき勞作へと擴布するところのものである、これに反していはゆる上からの中央集中的權力は、むしろ要求されたる作業の周延から眞の中心（勞働せる個體）へと逆に向ふものであり、そのやうにして眞實に於いては、確定するのでなく却つて弛緩せしめるやうに作用する、すなはち、勞働するものを彼の勞働から分離する。あるひは最高の場所からの壓迫は非常に巧慧に打算されたる遞降に於いて最下のもの（個々の實行者）にまで及ぼされてゐたかもしれない（そのときには階段を追つて命令者と服從の義務あるものとの根本的關係はつねに同樣なる壓迫の性質を保存する）が、さうすれば壓迫の複雜化に由つて、それに由つて起された分解はただそれだけますます完全である、それは今までわが邦の軍隊の潰裂によつて、つぎにわが邦の工業從業者の崩壞によつて、殆んどそれ以上のものなき程度に於いて、あきらかに示されてゐる。救ひはただすべての上から下への壓迫する命令秩序の合計畫的除去とそしてそれと提携した同樣に計畫的に社會的教育によつて確保すべき、自由なる自己規整の基礎の上の、すなはち下から上への、建設によつて、可能である。自己の透察とそして自己の意志によつて達せられることのできるものは決して强制に由つて達せられるべきで

はない。そして畢竟すべてはそれによつて達せられねばならない。

人が社會的勞働のかゝる建築とそれに對應しそしてそれ自身のために必然的なる國家の建築と

を「組合」の概念のもとに包括するならば、この概念はさきに曰つたことにしたがつて、自己の、うち

に單にすべての協力的に勞働するものが財の構成と消費とに對してもつ充分なる自己參與の、

したがつてまたこれらの財の確保のために必要なる、協力的に勞働するものの意志の相互的倚屬

の外的規整の、豫想を含むのみならず、更に、これら兩者がただもしも一つの確實不動なる心術(グリンシング)

の基礎がそのために定められるときにのみ達せられるのであるから、それ故に同樣に嚴格に自己

規整の原理にしたがつて自らを築く共同的教育の組織を含む。そしてそれは決してただ「副的そ

して非本質的なる附加物」(一)としてでない。何となればただそのやうにしてのみ一つの經濟的政

治的組織體は自己統治の能力をもつやうになるからである。何故なら一般にたださうしてのみ一

つの社會的自己があり、嚴密にいへば、個人の、ことにすべての個人の一つの社會的意志があ

る。またそのときにも物件への意志はそこから人格間の意志關係が萠芽する生產的な胎ではない、

兩者、物件關係もそして外的規整のもとに考へられた人格關係も——前者は經濟の悟性的規整の

上に、後者は政治的組織の意志規整のうへに安立する——ともにはじめて第三の、それによつて

のみ兩者が一の社會的基本關係（それを吾々は「組合的」と名づける）に於いて合一される、そ

れはすなはち社會的教育によつて內面的に基礎づけられた、唯一的に生產能力的な心情(ヘルツ)の共同、

協心(Concordia)である。物件關係はただそこから全くつねに內面的ならんとする共同體が向上的

に勞働をはじめる出發點としてのみ「基礎」である。むしろ意志關係こそ直接にそれであるが、

それはふたたび翻つて物件關係に於いてそしてつねにこれとの精密なる復歸關係に於いて自己を

形成する。この物件そして人格的關係の全體はしかしながらそれのなかへと內面的、靈的精神的

關係がその種子を下す基礎と地盤にほかならず、それから生命的に生產されたそして盡くること

なくふたたび生命を生產する果實が自己を無盡藏に新しく產みだしそしてますます深くそして確

かにそれ自身のうちに基礎づけるのである。そのやうにして、道德も法も、學問も藝術も深く內

面的に基礎づけられた共同體なしには榮えることができない、といふことはたしかに正當である、

この共同體へと一つの組合的な經濟的そして政治的建築の基礎の上に於いてにあらざれば、そし

て翻つてこの兩者への充實した、もつとも深く食ひこむ復歸的作用に於いてにあらざれば、教育

することができない。(二) このやうに私はこの命題を解釋しもしくは展開しやうと思ふ。(三) 共同の原理は持續的に、規整的最高裁決者として「實踐のなかへ」と導き入れられなければならない、そしてそれが最高の今日の（そしてまた恒久なる）文化要求である。そのやうにして、「實踐のなかへと導き入れられた」共同の原理を私は、この採用されたる概念（全く普遍的な「社會的」の概念に對應しそしてそれを鋭利にしたものとして）の許さるべき擴張に於いて、「組合の原理（ゲノッセンシャフツプリンチープ）」と名づける。それを私はそれとともにつねに同樣にそして精密なる內的相互關係に於いて社會的經濟、政治、教育の三つの方向に、そして實際その最後のもの、教育の支配的位置のもとに、擴張する。されば各人は必らずこのすべての三者に、同樣の權利をもつてそして同樣の責任をもつてそれらの精密なる相互關係にしたがつて、充分に內面的に參與せねばならない。それは實際に各人が等しくすべて三者に同じやうにといふのではなく、各々の天賦と能力とにしたがつてあるひは多くあるひは少なくそれに能働的に協力して勞働しなければならない。そのやうな能働的參與のあらゆる程度の差別は、最後に社會的經濟、政治そして教育が分離して並列的に存在するのでなく、全體として全體のなかに、各個人の意識とそして內的心術のなかに滲透しそして純粹なる三層音（ドライクラング）

に於いて共同體の諸音（アッコルデ）に響き合はなければならない、といふことに何らの變化を來さない。けれど教育は、もつとも深奥なる、創造的なる自己力の形成として、他の一者をたゞそれに役たつもの、その命令を遂行する器官として包括する。何故なら教育のみが最後に於いて直接的であり、他の二者は間接的である、教育はすべてを超えて持續するもの、超限的である、他の二者はつねに時間空間的に制約されそして制限され、その各時の形態に於いて暫存的であり、單に現象的である、すなはち一の純粹に內面的なる決してその現象のなかに消滅せざるもの、たゞ心術の基礎のみが知りそして生きるところのもの、單に隨時の外的表現である。

(二) Franz Staudinger, Die Kulturgrundlagen der Politik, II, 158

(一) まつたく同樣な意味シュタウディンガーも說いてゐる、同書、S 160f

(三) 同じく

この見解は、教育を一つのそれ自身に教育なしに考へられた經濟及び國家秩序の使役のものに導かうとし、そしてそれを「社會的教育」と名づける各種の見かたに全く正反對なものである。ことにもしそれに於いて經濟的もしくは政治的位置取りが階級鬪爭のそれ（下からであつても上

からであつても變りはない）であるならば。社會的鬪爭諸組織は與へられたる位置に於いては、避くべからざるものであり・そして公共的教育が有意的に自ら黨派的に位置を取るかぎりは、また教育組織に於いても避くべからざるものとして殘留するであらう。けれど人はつねにそれが社會的教育ではないことを、それは除去されることが可能になるや否や除き去られるべきものであることを、意識してゐなければならない。それは勞働秩序が組合的の性質をもつ瞬間から、すなはち生産と消費の秩序が、企業と勞働が一となる瞬間から、さうである。そしてそれは經濟と國家が自己にこの性格に、もしそれができるときには、平和的改造に於いて、接近するときに同樣の階段を經て可能にそして必然的になるであらう。それは單に「愛すべき平和」のためにのみならず、たゞ全社會構造の顯著なる障害なき恒常的改造のみが可能である故に、厭はしきことである。それはしかし改更がいつまでとも知れず延期されてもいゝといふことを意味しない、改更は今日開始されねばならない、その最初の始まりから全部的な包括へと合企圖的に向けられ、一歩一歩に確實なる遂行に達するために。

いかにしてそれにしたがつて社會的教育が自己を構造すべきかは一つのそれ自身の叙述を要求

する、そのために次の數章は費されてゐる。こゝにはたゞ、最高の根本原理として掲げやう、また社會的教育も、經濟と同樣に、自己をそのやうに築くためには全く下から上へとすなはち、全生活の直接なる共同に於いてする人間から人間への直接なる作用の確實なる根據の上に、築かれねばならない。それはかつて一度あつた、しかしそれは勿論破壞されそして今は殆んど再び建立すべくもない。じかしそれは必らずあらねばならぬ・何故ならたゞそのやうにしてのみ人間と人間の一つの同胞的な合一は再び生じ能ふからである。ことにもつとも幼き年齢のためにはこれは教育の唯一可能なるしかたである、それはそのまゝには社會的である。かゝる基礎のうへにはじめて次に、學校に特有なる、より間接的なる教育方法が築かれる、またこれも家庭的教育の直接的性質をできうるかぎり多く保存しなければならない、それは、もしも生成しつゝある人間が彼の內的生長を養ふ根柢から分離されてはならないならば、直接的共同への倚屬を一瞬間も失つてはならない。それは更に一の大いなる、容易に滿されざる、けれどもまつたく止むあたはざる要求であり、學校の內的更新のために、學校をそれがつねにあるべきであつたところの、けれどもかつたところのものに、教育の學校にするであらうところの學校の更新のために、必要なる一切

のものはそこから導き出される。そのやうにしてのみ成年者の眞なる共同精神は成立するであらう、そしてこの精神は次におのづからまた一つの固有なる、自由なる、組合的なる高等教養の形式（大學の樣式に於ける）に於いてその社會的教育的表現を見いだすであらう。それは人間教育一般の持續的なる、決して拋棄すべからざる基幹形式（シュタンムフォルメン）である。このほかの形式はまだ創成されなかつたそしてまた將來も創成されないであらう。けれどもし人がそのために流行的標語「社會的教育學（ゾツィアルペダゴギク）」を嘲笑することができると考へ、それがたゞ一つの古い智惠の必要なき燒き直しであるかのやうに考へるならば、それは現在の共同秩序とその結果たる教育秩序の弊害を甚しく誤解せるものである。人がまことに幼時から——散文で話してゐたのだ、といふことを一つの大なる發見として宣布しやうと欲するかのやうに。それは、もしも散文話法が詩に劣らざる一つの深き、恐らくはより深き法則性に從ひ、その法則性を意識することとそして內面的に支配することがはじめて散文の最高の力を解放し、働かせる、といふことを意味するならば、一つの善き意味をもつてゐる。吾々には社會的教育は一つのかやうなる意識の進歩を意味する、ある勿論萠芽的にはつねにすでに働いてゐたところの、しかしまさしくその作用の意識せられざることによつて

たゞあたかも偶然的なものとしてところどころにはたらいたところの、全體に於いてはまた決して自己を自由に開展させることができず、たゞ百千の障害のあひだで全くは破壞されずに殘ることができたのみであるところのもの、かゝるものについての意識の進歩を——一つのかゝる「發見」を、ある勿論發見され能ふためには何處かにすでに必らずあつたところの、しかし深く隱蔽されて橫はりそして殆んど不可見になつたところのものゝ發見を、意味する、そしてかゝる社會的教育の充實した實際的形成は決して吾々の背後にではなく、たゞ老大なる課題として吾々のまへに橫はる。

三

すべていまゝでに曰つたことをもつては、しかしながら、たゞ一の理想が揭げられたゞけである。もしもそれを實現する、もしくは實現へ少くも一歩より近く導く一つの道がまた示されるのでなければ、それだけでは殆んど何ごとをも成就したのではない。しかし吾々は今や吾々の最後の考察によつて、實現へ接近する途を示すことのできる地位に導かれてゐる。

言葉は肉（フライシュ）に爲らなければならない、理念（イデエ）は行（タート）への道を見いださなければならない。たゞそのや

うにしてのみ理念はたゞに吾々の國民の困窮を轉回するであらうのみならず、更に吾々に今日敵對せる世界全體を。それがその勝利の陶醉に於いてまたほとんど氣づかずにゐる、しかしすでにその首を攫んで威迫してゐる禍ひから、救ふであらう。

いかにしてそれでは理念は行への途を見いだすか？　一般的にはそれはたやすく言はれる、勞働と精神と、精神と勞働と、兩者はたがひに一つに合はなければならない、さなくば何らの救ひはない。精神は係爭してゐるもの〻一方に偏して立つてはならない、もしくは兩者の外に中立的に立つて、そして手に正義の秤をもつて、裁きそして和解し、宣告しまたは放免しやうと欲してはならない。吾々は一つの熱火のなかにある、たしかに、また吾々に於いても焰は燃えあがつてゐる、そこではどこに救助がもつとも必要でありそしてどこで救助がなほ可能であるかを、吾々の救ふところのものがもつとも貴重なもの、吾々にもつとも重要なものであるか、を多く問ふことなく、たゞちに理解することが必要である。すべてが危殆に瀕してゐるときにはすべてが價値あるものである、すべてはすべての人に、すでに有害なものとしてもしくはたやすく缺如しうるものとして認められもしくは今こそそのやうなものであることを示すものを除いては、重要であ

るにちがひない。そのやうなものは倒れてもいゝ、さうすればそれをもつてまことによきものでありそして將來の建設に何らか役たつことのできるものが救助される。何よりも、人間が危殆に瀕してゐるときには、物を問うてはならない。そしてだれが今日もつとも切迫した危險のなかにゐないものがあらう、身體の、そしてなほもつとそれ以上に靈魂の危險のなかに？　今は人に罪を嫁することそして自己を潔白とすることをつひに止めるときである、そしてそれだけますます救助の行爲をもつて爲すべきときである。あだかも福音書の英雄がひたすらに、「稅吏と罪人」とに赴き、何人が罪あるか、罪なきか、を全く問はずして、たゞあらゆる純朴さをもつて彼らと〻もに一つの卓に坐し、兄弟のごとくに彼らと〻もに、如何なる點から吾々が迷路に入つたか、そしてしたがつてまた再び正路に歸りうるかをともどもに考慮するがごとく、そのやうにまた吾々も今日飽けるものや義しきものにでなくむしろもつとも過てるものたちに友となるべきである。吾々は彼らの許に、その有り餘れる精神と德能のなか〻ら取りだした施物を投げ與へやうとする飽けるものそして義しきものとしてゞなく、彼らとおなじ求むるものそして憧がる〻ものとして彼らとおなじく過てるもの、おなじく罪あるもの、罪なくして罪あるものとして、赴かねばなら

ない。かゝる心持は今日多くの人々のうちにめざめてゐる。吾々の驚嘆にまで、吾々は志操高き勞働する民衆に對して溫かき感情をもつ、ことに若き人々が、恐怖（テロール）の狂亂によつて惑はさるゝことなく、ラディカリストの列中に歩み入り、そして稀ならず自己を犧牲にし、それが救ひに役だつか不幸に役だつかをも殆んど問ふことなく、そのもつとも貴きものを賭けるのを見る。吾々は彼らを引きとめるべきか？　たしかに吾々は警告はするであらう、けれど吾々は彼らをしてもしも彼らがさうしかできないならば彼の深奥の感情に從はしめるほかはないであらう、そして、もしも彼らが流血の證人として倒れるならば、吾々はたゞ彼らを羨ひなるものといふほかはないであらう。

このやうな犧牲、それはしかしたゞに自己犧牲ではない、彼らが守護すべくゆだねられた高き財を、ともに賭けるものである、このやうな犧牲に召されてゐないものは、しかしながら、彼らは何を爲すべきか？　たゞ見物し、何ごとが經過するかを觀察するか、いかにして助けることができやうかと思ひ考へるか、ときどき助言の、勵ましの、もしくは警告の言葉を投ずるか、もしくは婦人のごとく絶望して手を振りもしくは目を背けるか、さまざまの世間に遠き、行爲に遠き

勞働をもつて自己を眩惑しそして超離するか？　否、却つて純正なる學問のしかたにしたがつて、根柢に達することを求めること、何處に大火の火元が、何處にそれ故にまづ消火の勞働を仕掛けるべきか、何を救ふか、立つ能はざるものは倒れやうとも、しかし一つの新しきもの、優れるものがその代りに成るであらうためには、何を犧牲にすべきかを尋ねること、それがつとめである。そのときには彼らはまた何ごとかを爲したといふことができる、そしてそれは決してもつとも小さきことではない。

それはしかし今日その能力ある人各々の義務である、何人もその義務を脱れてはならない。またいづれの眞劍なる理論（テオリー）も今日は必らず實行（プラクシス）への道を見いださなければならない、しからざれば理論は敗亡する。理論は、勿論いまゝでに充分しばしば曰はれたこと、すなはち正當なる理論こそあらゆるなかのもつとも實行的なものである、といふことがまことに眞であるかを證據だてなければならない。その胸のうちに義務の意識が一たびめざめた人には、義務意識はすでにおのづから何らの休息をも與へない、彼はそのほかのことはできない、彼は日も夜も、いかにして余は余の理論を行的にすべきか、について思ひ沈まざるを得ない。そして彼は、やがてまもなく彼の

驚きにまで、理論に於いては何ごとも行的ならざるものなくたゞ吾々こそ非實行的であつたことを發見する、何故なら吾々は自然と眞實に於いて相倚屬するものを、頭腦（コツフ）、心情（ヘルツ）、そして手（ハント）とを分離した、頭と手とは勞働者としてたゞ心情が、すなはち人間に於ける最高能働的なるものが、創造者なる理念が、守靈（シエニウス）が、直觀しそして企圖的に構圖するところのもの、否、內面的に生產しそして模範として完成された姿で揭げるところのものを、追つて仕上げる。この心情の生產するものに、計算的な悟性と遂行的な意志とは從つて勞働しそしてその似姿を生みだす、これに於いてそれは似すがたのためにでなく、却つて原像のために、すべてがそれにのみ依る內的原始的創造の存持のために、支點と存立とを獲得する。もし吾々がそれを認識したならば、そのとき吾々には吾々が直接に侵入する行爲の外に立つ權利をもつことの內的確かさが再び得られるであらう。そのとき、しかしたゞそのときのみ吾々は潔き良心をもつて今日といへども吾々の精神的勞働に留まることが許されやう、すなはち、吾々が今日精神的勞働のうへにかゝる責任、この精神的勞働が救ひの行爲へのもつとも強き、深き、そしてそれ故にこそ眞にもつとも直接なる關係を再び獲得しなければならないといふ責任の全重量を感知するときにのみ。何故なら、それを吾々は承認

しなければならない、行爲的生活への關係は、理論の罪によつてゞなく、たゞ吾々の罪によつて理論から失はれてしまつたからである。吾々はみなそこに何ものか改むべきものをもつてゐる、そして學問、藝術、文學、教育そしてその他すべて吾々のやうに見かけは豐富なる、しかし最後の本質的なものに於いてしばしば、悲しむべく貧弱であつた精神生活の正直さに對しての永いあひだ集積された民衆の不信賴を弱めなければならない。何故ならその不信賴は決して無理由ではなかつた。もし吾々が今日手を束ねて立つならば、そして明晰なる、何ら疑義を容れず決定的な仕方で、また吾々の仕事全體も社會的勞働であることを、それがただに吾々に、もしくは一つの特權づけられた精神的階級にのみ役だつのでなく、全民衆に役だつものであり、それが必然的にそして唯一的に民衆に、人間にふさはしき、生きる値するやうな一の生活を、建設するものであることを、證明しないならば、民衆の不信賴は吾々を多くの滅びるに値するものとともに掃き棄てるであらう、そしてまた多くの貴きものを破壞するであらう。

しかしここに吾々がただ眼を開くならば課題の饒多は吾々をおどろかす、その一つとして今日實際閑却されてはゐない、何故なら、今日そのやうに怖るべく聳えたつた困窮は決して昨今のこ

とではない、それは疾うに存在しそしてその細部に於いてはまた充分に認識されてゐた、そしてそのやうにして人はすでに疾うから多くの細微に於いて自己をこの困窮に對して防ぐことを試み多くの點に於いては前進的に、もしくは少くともつとも悲慘なる不幸を防ぎつつ、それに抵抗して勞働した。しかしなくてならぬことは、すべてこのやうな抵抗的勞働（グーゲンアルベイト）がはなればなれに殘らずに、よく堅められたる地盤の上の根本的な改造に向つて、單純なるそして確實なる計畫にしたがつて、進まむがために、有機的に協同してはたらくことである。今日崩壞せんとしつつある個別的なものは、またその代りに現れるであらうところの、たとへ優れるものであつても、いかなる個別的なものも、もはや全體には助けにならない。今日は殆んどすべてはあだかも全體なるものが存在しないかのごとくに、あだかも吾々が處女地のうへに、しかしながら何があり能ひそしてあらねばならぬか、何がしからざるか、何が持續的に保ちあたふかそして何がしからざるかについての成熟せる經驗をもつて、全體の、その固有の土地に新たに移住する民衆のために、それにふさはしき生活を、そしてただこれとともにそしてこれに於いて吾々自身を、建きあげねばならないかのごとくに考へられることができ、そして考へられねばならない。

ここに於いては何よりも一のことをよく熟考しなければならない。單に狹きもしくは比較的廣き上層階級にとつてでなく、民衆の全體にとつて、何よりも精神的そして靈的所有に於いて不利益であつた民衆の一部分にとつて、一つの人間の價値ある生活を建築する、といふことについて眞劍にならなければならないならば、そのときは生活の新建築を、勞働せる民衆のより深き、そしてもつとも深き階層の生活基礎の眞中に構成し、これによつてのみ新しき建設をもつとも深き根基から築きあげることができる。はるかに大多數は今日なほ苛酷なる、卑しき、その一方性とそして外的性のために內的生活を壓迫する勞働に繫縛されてゐる、彼らは鎖の壓迫を重く感知する、彼らはたゞに桎梏を搖り動かすのみならず、救ひへ向つて叫ぶ、否それを振りちぎり、暴力的に振りちぎつた——そして今や壓迫を脫離して、しかしそれとともに今まで彼らの生活であつたものから離れて、ひろき荒野に迷へるがごとくに、立つてゐる。もし吾々が彼らの手を執り、そして彼らに、吾々が、吾々すべてが共同に、何人も己れがためにでなく、ただ吾々すべてのために、吾々の生活を新たに建設することを、確信せしめることができないならば、そのときはすべて吾々がいかなる幸ひ多く見ゆるものを、あるひは個々にはたしかにまた實際目的に

適ふところのものを、提案しそして企畫しやうとも、すべては徒勞であるであらう。

私はそこへの途を何よりもこの一事に於いて見る、直接的勞働者と提携して、技術者とそして工業的そしてまた農業的産業の指導者とは、さきに説明した意味に於ける組合共同的基礎のうへに於けるそれらの産業の更新的建設のために努力しなければならない。まさにこのことは勿論いままでは全くユトピア的な要求のやうに見えざるを得なかつた。勞働者とそして彼らの指導者さへもそのやうなものを殆んど考へることも敢へてしなかつた、彼らは、それが決して成起せぬであらう、否、成起し能はぬ、てふ假定をもつて働らきつづけた。けれど一つのそのやうな「決して」を人は決して言明してはならない。今日は、たしかにまだ一般的にではないが、けれどなほある程度の廣汎さに於いて、試索的な勞働、眞の開拓者的勞働をもつてこの方向に開始することが可能であるべきまでに時が熟してゐる。すでに人は工業に於ける賃銀問題を、貨幣的賃銀の增加（それは增加した賃銀は直ちに價格を高めそしてやがてまもなくすべては再び以前のごとくになるといふことだけでも何ら永續的な解決ではない）に由つてでなく、産業がその從業勞働者の營養、住居、衣服、一般に全體の生活構成のための配慮全部を、もつとも正當なる要求にした

がつて、從業者の充分な、固有の協同作業のもとに、そして個々のばあひに於ける最廣の自由をもつて、自己の任とすることによつて解決にもたらすことを提議した。けれどこれは、もしも眞率にそして普遍的に解すれば、すでに全産業の組合化を豫想するものである。もし一つの産業指導が、他の方法では何ものもはや救ひそして收拾することができず、しかもさうすれば救助が可能であることを、理解するならば、ただそのとき——けれど恐らくはやうやくそのときは、それはかゝる組織を承認するであらう。理論的にはこの道は平坦でなければならない、何よりも實際に生活必需的な、もしくは疑ひなく生活促進的な産業に於いて。ただかゝる産業をしかし人は取り止めやうと欲しなければならない、すべて他のものを人はできるだけ速やかに分解し、いままでそれに從事してゐた勞働者を、彼らが必然的なる諸工業に於いて位置を見いださざるかぎり疾くから促進されそして計畫された大規模な移住政策によつて地方へ赴かしめなければならない。有價値的諸工業や同じくまた農業そして森林業を維持しそして健全なる地盤の上に置くことは、組合的編制によつてにあらざれば永續的には不可能であらう、第一に何となればただこの組合化のみが、その收益が眞に總體に有効であることを確保するからである、第二には何となれば他の

しかたでは勞働のための勞働者は、工業に於いてもまた農業に於いてもより多くをもつことができないであらうからである。單にもつとも急進的なもののみならず、勞働者たちは今日、直接にもしくは間接に、ただにより少き勞働とより多くの賃銀をめがけてのみ戰ふのではない、たとへ兩者が彼らに手一杯に認容されたとしても、意識的に、そして決定的に、充實せるそして割引されざる社會化をめがけて戰つてゐる。彼等には多分は個々にはまだ、その産業のために永續的には全くもはや充足すべからざる條件のもとに、また社會化されざる産業のなかでもますます働くであらう、しかしそれはつねに、變化せざる組織に於けるなほ一層有利的なる勞働條件のために（彼らはこれをあてにすることが愚かであることを知つてゐる）戰ふのではなく、組織の根本的な變化をめがけて更に戰ふことを豫想し、無言のうちに保留してのことである。社會主義的勞働者團體のさまざまな異る色あひのあひだに於ける激しい抗爭は、しかし彼らがみな實に最後の根柢に於いては同一のことを意欲し、ただ戰略に於いて一致しないのであるといふことを隱してはゐない。彼らは、あるものはもし今根本的な改革が強ひて起されなければすべては失敗であると信ずる故に、しかるにあるものはまた、すべてを一度に强制しやうと欲するならばそのときこそ

まさしくすべては失敗である、何故なら（彼らは謂ふ）そのとき産業自らが、それの上に存立するすべての制約とともに、問題にされ、むしろ擬議なく破壞せられる故に、と信ずる故に、彼らは死と生にかけてたがひに征服するのである。このやうな位置に於いて産業の士官や參謀たちにはあるひは退職するか、もしくは吾々の敗北した、兵士によつて拋棄された軍隊の士官や參謀たちのやうに、自己を事物の大膽なる更新的秩序の使役に置き、そして彼らを作業に從はしめるであらうところのものたちとともに正直に協力してはたらき、それによつて新しき秩序に於いて、たとへ最善事ではなくとも、可能なる善きことが、もしくは善きことでなくとも、しかし收益あるものがそこから生じそして悉くは滅びざるやうにするか、のほかに何らの手段も殘つてゐない。

もし勞働者を再び勞働せしめ、そして全力をもつて勞働せしめる手段が見いだされぬならば、すべては必らず滅びるほかはない。それはそこから水が流れ入る破孔である。どうしてそれを塡塞するか？　決してますますはなはだしき賃銀値上げと勞働時間の短縮とに由つてではない。兩者はただ搾取者の威力感情を高めそしてますます高度の要求を生みだす。ただ勞働者を內面的に滿足せしめるやうな、彼がいま內的にそれから分離してゐる勞働をふたたび彼のものとするやう

な、そのやうな勞働者の生存の保障によつて、そのやうな生存はまた同時に彼のうちにすべてのもの、勞働者、役員、産業指導者の同等に方向づけられた協同的勞働への、産業の維持と向上、そしてすべての協同的勞働者の生活の不斷の高揚への、內國または外國の掠奪的資本のあらゆる强制勞働からの解放への、意志を基礎づける。すなはち、吾々の意味する組合化としての社會化(ソツチアリゼーション)である。ただに勞働者の世界が、これが唯一のもの、缺きがたく必要なもの、唯一つ救ひをもたらすものであるといふ、確信をもつて生きそして宗教的熱心をもつてそれに賴つてゐるが故に、そしてそれ故に他のしかたではふたたび勞働へと有意志的にすることができない、といふことのためではなく、實際産業とそしてしたがつて吾々の生活建築全體の維持のためにはそのほかに何らのこともはや可能でないからである。産業は停滯する。産業はなほしばらくはそれに堪へるかもしれない、それはもしそれによつてある豫察したる時間のあひだそれがいままで基礎としてゐた組織を維持することができると希望し能ふならば、それを爲すであらう。けれど産業はつひにこれを理解しなければならない——すでに今日少からぬ人々がこれを明晰に透察してゐる——かゝる計算は、あたかもわが邦の軍隊指揮がその崩壞のまへに、なほ崩壞を防ぐであらうところの

奇蹟をあてにしたのと同じく、同樣に恃むべからざるものである。しかるときは彼らがあるひは退ぞくか、または、單純なる協力的勞働者として産業の使役のもとに自己の適能に應じてその最善を爲し能ふやうなそれぞれの位置に置かれ、そしてそれに對してその業績に比例し、そして勞働者がもしも同樣なる適能と勤勉をもつてそこに達成しあたひもしくはその子孫がそこに達するのを見ることができる可能性を眼中に置くならば、必らず、悅んで許容するところの一つの生活位置をもつて酬いられることのほかに何らの他の要求をしない、といふことは彼らにとつてただに高貴なる、理想的なことであるのみならず、事實的に命ぜられ、否もつとも切實なる必然性である。

ベルンの社會主義者會議のある報告(Frankfurter Zeitung 19. März 1919.)のなかにもつとも著名なる、ドイツ人ならぬ社會主義者の一人の私的言明が載せられてゐる、「世界に對するドイツの感化はただそれがより高き社會的形式を創造するときにのみ恢復される事ができる。そのときにはそれはすべての國に於いて無産者に對して一つの抵抗すべからざる牽引を作用するであらう。しかし革命はまだなかなか終らない。あるときには新しい力が缺けてゐる。そこにはかのフラン

ス革命の崇高なる高揚に於いて特權階級をしてその特權の悦ばしき拋棄にまで熱狂せしめた、自己犧牲の氣分が見られない。ドイツの偉大なる資本特權の所有者が爲す同樣なる一歩はいかに作用するであらう！　人は新しきものを無意味な爭論をもつて創造するものではない、ただ全體に對する犧牲をもつてこそ、俗（フイリステライ）見をもつてではない、ただ熱（ベガイステルング）信をもつてこそ。」そして悲慘なる「ボルシェヰズムスの貸借決算表」（一）についての一人のロシアの社會革命家の深刻なる報告はドイツの知識階級に對する同樣の重大なる警告を絶頂としてゐる、すなはち、社會主義に於いて唯一の救助を待ち見てゐる勞働的民衆の集團に、その困難なる課題に於いて、正しくそして正直に助力となれ。何故なら人は勞働者を「ただ人が彼らに於いて、彼らがこれからは社會主義のみのために勞働するのである、といふ深きそして堅く基礎づけられた信念をよびおこすことによつて勞働せしめることができる。そしてこの確信を堅めるためには、また多大の犧牲を拂ふこともそれだけの報償がある。直ちに基礎的な經濟的改革の一列をその改革が現在の瞬間に於いては正當にそして國家にとつての何らの損害なしには、恐らくは成し遂げられないであらうといふことをも怖れることなく、開始することは必らず効果を擧げる。」かゝる損害はのちに改められやう、現

在のためにはすべては勞働者に對する心理的作用を目的とする。ボルシェヰズムスは一つの心的疾病である、それを武力をもつて治療することは不可能である、人は、少くも豫備的に社會主義の一建築を建てあげるべく試みることによつて、疾病の內面的源泉に適中しなければならない。その建築は勿論愼重に行はれねばならない、建物が直ちに崩壞してそして群衆をその碎片のなかに埋めることのないやうに。全く同樣なる結論に、恐らく今日ロシア革命についてドイツに於いてもつとも精通せる人、アルフオンス・パケツト（二）も達してゐる、「もしも吾々の有知識者の數百もしくは數十が、ある眠られぬ一夜に、無產者の革命を理解すべくそして彼らに最後まで援助すべく決心したならば、さうすれば吾々は救はれたであらう。」

（一）Dimitry Gawronsky, Die Bilanz des russischen Bolschewismns. Berlin 1919. Paul Cassirer.

（二）Alphons Paquet, Der Geist der russischen Revolution. besonders S. 65ff.Leipzig 1919. Kurt Wolff. "Rat"

けれど偉大なる理念（イデエ）なしに、單なる透察と怜悧なる豫量のみでは一つの社會的意志が決して再び成生しないことがたしかであると同樣に、おなじくたしかに吾々の現在のそして將來の位置の

切迫せる要求もまた、まづはじめに技術の、工業的基礎の貨幣資本の及び土地所有の叡智に向ふ、そしてただに彼らの自己犠牲のそして英雄的抛棄の道徳的能力のみに向ふのではない。彼らに豫想せられるものは世間に遠き靈感の高揚ではなくて、彼らの技術的才智、彼らの組織能力そして眼界廣き豫量の、しかし最後に——むしろ第一に——彼らの創造的精力の充實した寄與である。一つの純正なる社會主義は必らずその上に支持されてあらねばならぬ最後の志操が基督教のそれと非常に深く類縁的であるけれど、それとともに、社會主義の課題はしかしながらそれがまつたく異る程度に志操の力と同時に豫量的悟性の力と注意的な行爲の力とを要求するかぎり、一つのはなはだ異るものである。これらはいままでの發展によつて非常に高められ、そしてはたらきかけることを要求する。いまやここにそれらに對して一つの尨大なる課題が、それらに向つて提出され能ふもつとも高き課題が招いてゐる。それに向つて試みをすることは彼らを刺戟するにちがひない。民衆の腐敗は民衆自身から出たのではない、それはその外部から來たのである。民衆はもしもこの腐敗のためにその良心を苦める外的諸原因を除くことができたならば、それを切りぬけるであらう。それはしかし一つの遠くを望み見る組織者的な、すなはち社會心理的な技術の課

題である。技術（オルガニーク）は叡智（インテリゲンツ）である、技術はそれであることをやめない、却つて技術は能働的な、勞働的な叡智であることによつて叡智をなほ一階段だけより高く擧げる。しかし兩者は、悟性の靜止的な透察と意志の前進的な精力とは、もしもそれらが創造の純粋なる原始性にまで全たく自己を解放するならば、それら自身を更に一段だけ、むしろ階段から階段への艱難多き向上全體を渡つて、高めるであらう。この最後の高揚は、それは靈感（ベガイステルング）といふよりも更に多くを意味するが今日ただにいかなる他の時代とも同樣に要求せられるのみならず、それはまたもはや稀少なる、あまりに少數なる天才、例へば一人のレオナルド・ダ・ヰンチのごとき典型の天才のみのもつものであつてはならない。何となれば今日はもはや單にこれ、もしくはかれの個々のものを創造することに關するのでなく、人間の共同的生活の全體を全體に、人間的に、共同的生活に、然り一般的に、その名に値ひするだけの一つの生活に、創造しなほすことに關するからである。それこそはじめて純粋なる組織作用である、それはすべての外部からの單なる整頓や改良に反して、ただ內面から、すべてのものの自由なる行爲によつて可能である、しかし個々のものの創造者的精神の喚起と指導とはそれ故に必要を減ずるものではなく却つてますます多く必要である。しかし一

つの「天才ある民族」の巨大なる要求はただ、今まで創造への最高の自己解放的高翔に達したる少數の人々が、今や彼ら自身がそこから生れたる地盤を顧みて、神性の「閃火」(神秘思想の用語で語るならば)をまたそれがまだ深く隱れてゐるところに於いても認識し、それを煽ぎそして一つ一つの煽がれたものを力强い焰に集めるべく力を證據だてる、といふことによつてのみ眞實になることができる。人はそこでもなほ犧牲について語らうと欲するか? 然りそれはたしかに犧牲である、けれどそれは人が通常それをもつて自己の利己心すなはち矮小なる貪欲の權利を購ふところの、强ひられたる提供といふごとき低劣なる意味に於いてでなく、それに於いてはすべての狹小なる自己欲が、全たく神性のなかに燃えあがらむがために、たのしく自ら消盡するところの歡ばしき犧牲である。今日すでにこの最高の高揚の能力あるものはまだあまり多くはないかもしれないにしても、けれど各人が爲し能ふところのものはそれへの線のうへに位してゐる、すなはち、各人がそこに勞働する個々の思想と意志を、つねに個人が出發せねばならぬごとくに、全體へと目がくるところのものへと制馭することである。すでにそれは各個人の行爲にとつて一つの內的高揚を意味するであらう、それは各々の外的犧牲を超過し、そして卓越せる能力によつ

て指導者の位置に召されたるものには共同生活のなかで、貨幣的報償によつては全く表現せられざる內面的報償を含む一つの位置を指定するであらう。國家勢力はこの報償ではない、ただもつとも高貴なる意味に於いての王者(ケーニヒトウム)の位こそそれである、もつとも眞實なる人間の王位、各人とそしてすべてに於ける人道の勝利、被役的手段に對する自己目的の、物質と單に物質に向けられたる力とに對する精神の勝利こそ。

四

すべていままでに謂つたことは畢竟一つの根底から新たなる社會的生活の建設の要求に還元される、その建設の計畫は今やすべてに一層明瞭なる輪廓に於いて吾々のまへに立つてゐる。要求されたのは全體の經濟的勞働とそして全體の精神的勞働の一つのまつたく獨立なる代表である、これら兩者は共に、通常のそしてこれまでまた吾々によつても意味された意味に於いての國家を、すなはち決定(ベシュリーセン)しそして決定したところのものの遂行について責任を負擔する政府を、輔導するものである、しかしそれらは自ら一つのかゝる國家を表現しまたはそれに取つて代つてはならない。このことはしかしながらなほ三重の訂正もしくはより精密なる規定を必要とする——

第一に、二つの、もしくはそれ以上多數の「諸委員會」が要求されるのではない、無制約的にただ一つの委員會が要求される。それは單に技術的な差異であつて根本原理的なものではないやうに見える。何故なら一つ一つの委員會の活動はいかなるばあひにも勞働を樂しみつつ行はれなければならない、それならば、どうして多數の委員會が並存して、勿論何らかのしかたで協力しつつ、一致しつつ、はたらいてはならぬことがあらう？　しかしこの差別はまつたく原理的である。それによつてのみ一の社會的生活が成りたつ統一は、社會的生活にとつて一つの統一的に指導する中央器官が缺けてゐないといふことに全く依屬してゐる。社會生活の充全性、すなはちそれが全體として、でありそして何らの意味に於いても一つの並立的な、そしてただしかしてのちに均衡を追求する多數に分裂せざること、それが、そしてそれのみが社會主義の根本的要求であつてそれからすべてその特殊的要求は流れ出るのである、それは一般に社會體、組合の概念である。

まさしくそれ故に、第二に、唯一の中央委員會は社會的生活をすべてそれに本質的なる各方面もしくは方向にしたがつて包括しなければならない、すなはちただに一方には經濟的勞働と、他

方には精神的勞働と、のみならず、兩者のあひだに介在するところのもの、法的政治的形式の上にまで、また同樣に自己を擴張しなければならない。ただそれはまたこのそれ自身の方向をもつた勞働を、二つの他の勞働に於けると同じく、みづから作業すべきではない——何故ならそれこそそれらすべてに對立して獨立の方向をもつた勞働である——ただそれを企畫しつつ、精確に評價しつつ、提案しつつそして遂行に於いて監視しつつ指導しそして規定しつつはたらかねばならない、そして他方に通常の意味での、立法的、管理的そして裁判的勢力としての、國家の特有なる組織化的勞働はつねに上に曰つた最高裁決の規定的輔導のもとに、決定しつつ、法的義務的に秩序づけつつそして匡正しつつすべて三つの社會的勞働を（また自己をも）運轉しそして恒常なる進行に維持しなければならない、これ三つの勞働自身はしかしながら（すなはち共同體の直接的勞働的生活の全體）これらの三重の社會的作業を「國家」の指令にしたがつて中央委員會の最高指導のもとに、實行しつつ完成しなければならない。

これをもつてすでに第三のことも言ひ表はされた、すなはちかやうに考へられた中央委員會は國家（すなはち指令する行政官廳）に對しそして直接的勞働生活に對して、それが後者に

よつて選ばれそしてすべての全權能を與へられてゐるのであるから、全たき獨立に於いて、更に主權的(スーフェレーン)に命令的に對立しなければならない。それはそれ自身は立法者でもなく管理者また裁判者でもない、またそれは自ら經濟者、軍隊、保安者もしくは學者、教育者、藝術家、僧侶でもない。中央委員會はいかなる意味に於いても官職的なものでなくまたいかなる意味に於いても直接的勞働者ではなくて、兩者すなはち各種の社會的活動の直接的勞働者と官職員とに對して、それが勞働の全體力とそして直接的勞働命令力とを自己のうちに合一し、自己を全體としてのそれの上に支持してゐるといふ意味に於いて、上位にあるものである、そのやうにして中央會議は最高の意味に於ける「國家」を、すなはち國家の究極的統一を、統一的悟性と統一的意志のみならず統一的本質を、すべてに普遍的なる一の精神を、自己のうちに表はしそしてまさしく合し、統一に保ちつつ、統一を不斷に新たに創造し形成しつつ、命令權力としての國家の上にも、またこれをとほして全體の直接的勞働の上にも作用しそしてそれを全く滲透する。そのやうにしてそれは全體の共同本質の、その創造者たる故に、主人そして王である。何故ならただ創造するもののみが、その創造するところのものの上に、創造の唯一的權能によつて、王である、ただ創造者のみが、

その被造物に、ただ作工者のみがその作れるものに、それにとつて善くそして幸ひであるところのものを知り、意欲し、そして爲し能ふ。ただ彼のみがそれを、一般に存在に呼び出すと同樣に、また存在に保つことを、しかしながらここではそれは死んだものでなく、生きたものであるから、それを各瞬間に新たに創造する、すなはち、統治することを、必然的に理解し、必然的に思慮的であり、必然的に能力的である。

されば直接な法律的もしくは「政策的」作用は、國家に於けるこの本來の意味での主權者の仕事ではない、それはただ法と國家の創造である、また直接に經濟的なる、形成的なる、もしくは教育的なる個別的行爲でなくて、すべてこれらの決して靜止せざる、不斷に前進する行爲の計畫の、統一的計畫の創造的構圖そしてつねに新たなる仕上げである。かゝる仕事に對してはわが邦の言語は "Rath" (相談、會議、助言、意見などを意味する)といふ言葉以上に適切な言葉をもたない。それは比較なしに、單なる決定(ベシュルヴス)や否決(エントシュルヴス)といふより以下でなくて以上である。それは決議に對して、ただに被役的に、準備的に、故障を除きつつのみならず、それ以上に目標と方向を指示しつつ、したがつて規定しつつ、先行するものである。目標と方向とはその途の上のすべての個々

の一歩に對して支配的であり、制約するものであり、そして實に制約されずして制約するものである、それはまたまさしく今もしくは次ぎに爲すべき一歩の規定に對してもさうである。前進そのことは、何となればそれなしにはまた最良のそして最純の思想も實現に到らずそして空虛のなかに流れ去るやうに見える故に、自己にはより以上に强力なるもののごとく思はれるかもしれない。しかし眞實には各々の實行的行爲は制約されたものであり、そしてたゞそのかぎりまた制約するものである、すなはちただ被制約的にのみ制約的であつて決して無制約的にではない。それは、それが爲さるや否や、また終らなければならない、しかるに方向はすべての終結を超えて外に、眞に無限に、超限的に連續して存立する。あだかも超限的が有限的に對し、無制約者(超制約者)が被制約者(もしくはただ被制約的に制約するもの)に對して、絶對的に優越でありそして命令するのと同樣に、そのやうに Rat は實現的行爲の上位にあり、これに命令する。行爲でなく、會議(ラート)のなかでまさしく行爲へと規定する理(ロゴス)こそはじめのもの、眞の始め、すなはち "Principium"、である。全體のそして究極の決斷はそれに依屬する、それは最後の、絶對的な然りそして否を宣告し、全體の有と非有、生と死について斷定する。

吾々には創造(シヨフフング)(プラトーンの「宴會篇」二〇五に從へば "Poiesis") はそれを意味する、「非有から有へのあらゆる過程の根據。」最後の創造的根據は、有そのものの創造者として、必然的に有を超えてかなたに(プラトーンの「國家」五〇九にしたがへば epekeina tēs ousias) ある、それは超制約的に制約するものである故にそれ自身超有的である、それ自身すべての假定に於いてすでに假定されたる「始め」たる故に超假定的である。本原的始源、生產するもの、「父」、——「理念、」實に「善」の理念である。何故に善の理念か? 統一的目標の理念として、自己を方向づけそして同時に存立を與へつつすべての「有」に自己を擴張する目標のそれとして、何故なら、すべて存立をもつものは「善」である、(それはまさしく「有」らねばならずそして必らずあるごとくにある)、存立し能はざるものは惡である。これはすべての有とそして單なる當有(Sein-sollen) を超越して、したがつてすべての單なる悟性と意志のかなたに超越してゐる。何故ならすべての理解や意欲、また單なる事柄の理解と物件の意欲からの行爲は、ただ有の點から點への進行、發展に關はる、悟性は諸點の固定に於いて、意志は進行そのものに於いてはたらくが、けれどやはり點から點に進行し、點を立てそして消してゆくからである。この進行に於いて原始的定立、唯一的

創造的根本定立は、はじめて行爲へ開展する、しかしこれとともにそれはその直接性を去つて制約されたるものそしてただ被制約的に制約するもの、つねに始めては終り、立てては消される「そこ」そして「そのとき」の有の間接性のうちに入る——しかしそれはそれ自身の裡に於いてはつねに本原的原始的に、決して始めず終らず、すべての始めとすべての終りを定立しつつ、それを超越して、存する。

「會議」(ラート)はまさにこの理念(イデエ)を、精神のこの創造者的原始的行を、まさしく理念上、代表しなければならない、それは事柄の理解(ザツハフエルシユタント)と事柄(ザツヘ)の意志(ヰルレ)とがすべてに於いてはたらかなければならないといふ單なる、しかしたしかに根據づけられた要求より以上に、測りがたく多くを意味する。これもまた勿論實行的行爲とそしてその指令から要求すべきことである。けれど兩者からそれは問題たる國家に於けるそしてすべてに於ける第三の、より高き、そして一般に最高なる裁決(インスタンツ)を要求する。これは事柄の理解と事柄の意志のすべての力を自己のうちに包含する、それはしかしなほ何ものかより以上のものである、まさしく創造である。

しかし何處からそれは來るべきか?——それは創造するもののうちに生きてゐる——しかしだ

れが創造するものであるかを決定するものはいかなる裁決であるか?——自らそれであるところのもの以外に他にたれがそれを決定することができやうか?——すなはち創造者らの會議こそ大膽に自己を國家に於ける最高の裁決者として、すなはち國家の創造者しかして王として登位せしめなければならないか? けれど神が人間に對してのごとく、人間が物に對してのごとくに創造的精神が、何處か外に、共同體の生活のうへに高く、王位に登らなければならないと考へるのは一つの完全なる誤解であるであらう。むしろただ生活のなかに精神はあり、そしてそれは、それが一般にしかあるところのものである、創造的である。何故なら一つの生活は創造なしに何であらう、または、創造は生以外に何を他に創造することができやう? これについてまだ明悟せざるものはプラトーンの盡しがたく深き叙述全體を讀め、そこから吾々は創造の概念を取り來つたのである(宴會篇、二〇一以下、及び他に、國家篇五〇七以下)。それにしたがへば創造は生産と、すなはち生を與へることと一である、永遠の生を永遠の死から、エロースの衝動の必要から、よびおこすことである。それに於ては死と甦生(ハデスとデイオニユソス)とは一である、「死ぬるもの(シウテルベウント)の不死、」しはしば人の引用するゲエテの「死ねそして成れ(エルデ)」である。それは高く藝術家的、宗教

家的創造にまで高く及ぶ、けれどそれはまた劣らずもつとも低きところにまで達する、それはすべての職業的勞働、すべのて材料的なものに於いてはたらく技能から最低のもつとも感性的なる身體的有機的生命の基盤にまで達する。それに對すればその何ものといへども低からずまた卑しくない、また感性的なもののもつとも感性的なものまでも。それ故にこそつねにまさしく最も高き理想主義が、最低の感覺的なものにいたるまで理念の光と力とを照しそして作用し、善きものと惡しきものとの上に、義しきものと義しからぬものとの上に、理念の太陽を照し、その雨をもつて豐饒にしつつ降らせると、要求し、そして要求することができたのである。理念が最後の直接なものであるならば、それは勞働に於ける直接なもの以外に何處でより强く、より深く、まさしくより直接的に生き生きとはたらく事ができやう？　勞働はたしかに勞苦であり艱難である、けれどそれは創造である。その惱みや勞苦は、たゞそこから生が自己を理念の生殖力に由つて生みだすところの、死の支點である。それとともに勞働はそれが褫はれたる不可毀的尊嚴をふたたび恢復する。勞働は直接にそれ自らのうちに理念を荷ふ、そして兩者、精神と勞働、勞働と精神とは、ただに姉妹のごとくに手を携へて忠實にともに進むのみでなく、もつとも熱き、婚姻的愛

に於いて、戀愛行爲に於ける男と女との、女と男とのごとくにたがひに抱きあひ、まつたく一になり、產まねばならない、そして單なる婚姻管理者たる國家は生み能はずただのちに合法的にしそしてつぎに保護しそして引き上げ能ふのみである。精神と勞働との破りがたく深き統一、緊密なる結合は表面的にでなく「會議（ラート）」のなかに基礎づけられる。それ故にまた會議はつねに新たに共同體の勞働生活の全體から生ひ出でねばならない。會議はただに全體を代表するのみでなく、ただ追隨的にそれに言語と表現を與ふるのみでなく、その悟性と意志とを國家に告知しそして國家の命令をとほしてすべての個々行爲に對して規定的になるやうにするのみでなく、「會議」はその全體の、最深の、創造的な力を自己に集注しつつ表現することによつて、その特性にしたがつてまた更に創造的に、すなはち統一を創造しつつ、目的と方向を與へつつ、これらを國家に由つて有効力的にそして勞働生活の最後の、もつとも多產的なる低度にいたるまで能作的にすべくそしてしか保つべく任務をもつてゐる。

「國家（シュタート）」のかやうな最高の形成が一つの命名を要するなら、それを代議政治でなく、ただ會議政治（ラーツレギーム）、Bularchie と呼ぶがいゝ。哲學者らが王たちになつてはならない、ただ哲學が王でなければ

ならない。哲學、すなはち「一の唯一の賢きもの」のいだく、統一に對する、永遠の一であることならず一になることに對する永遠の、完成せざる、しかしすべての、ますます豐富に開展しゆく對立、すべての抗爭、然りもつとも悲慘なる戰爭から、ただつねにより深くそしてより新しく自己を再產する一致、調和への、願望、愛、エロスである。これに對しては外的「國家」すなはち命令權力の法的政治的形成はただあだかも生きた音樂に對して、定常的な度の拍子の自由に振動する、律動的に動かされた輪舞に對して、規整的な和聲學の法則が關係するごとくに、關係する。後者はあだかも跛行する歩みをもつて生きた流動に追隨する、それは流動を作ることをあきらめ、ただそれに途を開き、その進行を豫計しそれにとつて新しい可能性が開かれ能ふやうにそれを確定しそしてより豐富に展開するやうにしなければならない。それは流動を拘束してはならない、ただまさしく解放しなければならない、壓服してはならない、ただ仕へなければならない。創造的精神の直接的勞働に對する關係は比較を絕して深密である、吾々の言語はこれを「創造」と名づけてゐる、それはあだかもギリシア人にとつて創造と技巧とに於いて同樣に兩者が現在的であり、そして戀愛行爲に於ける男と女のごとく、一であり、精神の創造者的な呼び聲、

「成れ！」そして作業的器官によつての製作の產出のための受精したる攝取であるのとおなじである。

それ故にこの要求、キルヘルム・フオン・フムボルトやそしてすべての偉大な理想主義者たちが敢へて立てた要求、すなはち、すべての手工が藝術の高みにまで擧げられねばならず、そしてそのやうにして、人類が「今はそれがいかにそれ自身に美しくあらうとも、しばしば彼らを汚辱するに役たつ」ところの物によつて却つて高貴にされねばならない、といふ要求には何らユトピア的なものはない。この非常に高き要求、この人類の最古の、永遠の尊貴をまたもつとも賤しき勞働のなかでも救ふこと、こそ會議政治の理念にかゝつてゐる。

その實現の可能性はしかしながらただ次のことによつてのみ、しかしまたそれによつて疑ひなく確實に與へられる、すなはちすべて三つの勞働の生きた動力とその相互倚屬と深奥なる統一との生動せる根據が各々のうちに自から存しただ生命によびおこされることを要するのみであるといふことによつて、勞働生活の直接性に於いてはそれらは理念上つねにそしてその三つのすべての各々に於いて生動しそして生き生きと一である。ただ勞働指令の間接性に於いてそれらは顯著

に相互に分離する。精神的指導の新しき直接性に於いてしかしながらそれらは創造的根據の統一へとふたたび合一する。目的たるものに於いて生きる人々にとつてのみ、ただ彼らにとつてのみ目的たるものは生きる、それ故に一つの全く下から、すなはち勞働生活の直接性から上へと形成された會議のみが、それ自身のうちに、たとへすでに確實なる保障をではなくとも、しかしながらすべての社會的行爲の純粋に公正な規定を荷つてゐる。もし一般に何ごとかをそのやうに形づくられた會議から期待すべきであるならば、それは公正（ゼウヘウセイカイト）さの心術である。もしまたそれがかゝる心術を生産しなかつたときは、またそれも特殊的利害の抗爭を自己のうちに生じ來らしめそしてあるひはこの抗爭が支配的になるのを助けるであらう、しかるときはそれは勿論在來の、一方的なる、政策的命令權力に劣れるものではないとしてもまた優れるものではない、そのときは「會議」はそれをもつて自らこの低き階段にまで落ち、自己を有利なるばあひに於いては一つの新しき、多分は好意あるそして全くは非政治家的ならぬ官僚政治の負擔者に、またより有利ならざるばあひに於いては、一つのただ公明なる利害代表會議の負擔者となるであらう、前者は、精神的勞働の代表がそれに於いて優位を占めたばあひであり、後者は經濟的勞働の代表が優位を占

めたばあひである。兩者の責務的に緊密なる協力、たがひに了解しなければならないといふ兩者にとつての强制はいづれのばあひに於いてもしかしながら純粋なる公正の志操をもつ側に一つの强大なる勢威を與へ、そしてたやすく生活の現實を誤認ししたがつてそれをさまざまなしかたで壓抑する（たとへそれ自身には好意的なるものであつても）官僚主義をも、またそのときはじめてまことに危險なる大膽なる利益追求的唯物主義にも、少くも、限界を定立するであらう。共同精神の絶對的優越は――古きあるひは官僚的にあるひは利害關係にしたがつて支配された僞國家（ナツイドシユタート）の根柢深き惡習が決して一打ちには克服すべきものではない故に――たしかに直ちにはじめからは不可能であるが、しかし確かに一のやがて確立されたる會議統治に於いて自己を主張するであらう。

三つの社會的勞働そしてしたがつて直接的勞働の三つの組織、すなはち法的政治的勞働規整とそして精神的指導とに對する個人の負擔の種類と程度に關しては、すべてまへに豫想せられたものから明晰なる歸結が與へられる、すべての人は、理念に於いてそして現實に於いて、すべて三つに於いて頒けまへをもたなければならない、各人はしかしながら少くもあるときは、主導的に

職掌的に、三者の一に、そしてその一者の一定の部分に於いて頒けまへをもち、しかし少くも代表選擧をとほして全體にそしてすべての三者に於いてともに規定するものとして頒けまへをもたねばならない、その兩者はしかしながら作業そのものに於いて自己を證明する能力の尺度以外の何らかの他の尺度によつてはならない。ただそのやうにしてのみかの偉大なる要求は充足せられる、すなはち「各人が彼のものを」——すなはち彼がもつともよく理解しそして事實的に作業するところのものを——全體のために作業しそして唯一にこのやうな事實的に最良の業績に對應して共同的勞働の指令と精神的指導に、そしてそのためにまた收益に對して、自己の正當なる頒けまへをもたなければならない、といふ要求は。もし一たび社會的生活の全建築がこの唯一的健康なる基礎の上に置かれるならば、各人に於いて勞働の能力とひとしく勞働指令とそして精神的指導の能力は彼に適應した方向と特色とに於いて彼の達し能ふ高さにまでもつともよく發達すべくそしてそのやうにして、まさしく最强度の、最も効果ある個別化に於いて、殆んど程度上はなはだしく離れたる差別が、勿論自明的なことであるが年齢の段階のほかには、ないであらうといふことのために、それ故に爭鬪はますます減少するであらう。疑ひなくしかしながらまづ成熟しつ

〻ある人々には直接的作業が、充分に習熟したるものには指令と展開とが、完成の年齢にあるものには指導とそして助言とがもつとも手近かな仕事となるであらう。そこでは勞働の卑賤と高貴、その低きそして高き種類、そして才能の高下などについてのすべての言は意味を失ふであらう。すべての勞働はそれがまさに必要であり正當に施設せらるるところに於いてひとしく必要であり正當である。もしも階位について言ふべきであるならば、そのときはまさに直接的勞働こそ充分に具體的なものとして最高位を占めるべきである。比較的抽象的なものとして、命令の單に媒介的なる勞働は同じ位のものではない、しかしそれには、一つの機械もしくは一つの結合聯絡せる機械裝置に於ける自然的動力の、有効なる動力及び物質節約的な裝置にも比較すべき、一つのそこに合一すべき諸意志精力の熟慮されたる力學に由つてのより豐富なる展開てふ、他のものによつて換へる能はざる固有價値が、存留する、それを私は社會工學と名づける。それは直接的勞働生活から分離して存在してはならない、それはむしろその最高の力をまさしく、それが直接的勞働生活に可能なるだけもつとも緊密に結合されてゐるときに於いて、展開する。それ故に一の社會的生活は、それが外的に可見的な命令施行を要すること少きだけますますよき秩序に於いて存

在する。最後に第三の、精神的指導は決して具體的なものからはなれて抽象の虚空のなかに自己を喪失してはならない。それをもつてこれは自己の特有の力を損失しそして同時に有意志的聽從をもはや見いださないであらう、指導は聽從なしには意味がなくそして永續的には支持することができないであらう。精神が勞働に、勞働が精神にますます密に結合せられるとき、それだけますます軋轢なしに三つの勞働は相互に滲透し、そしてそのやうにして全體は健康の狀態に保たれる。直接に勞働しつゝあるもののうちから命令者や精神的指導者を選ぶことは、見かけは最難の問題であるが、充分なる業績によつて指導的な位置に、まさに彼がそれにそしてそれが彼に通ずるところに於いて、自然的上昇に於いて達するといふ期望が各人に於いて確かであるならば、それだけますます容易にそして圓滑に完成されるであらう。名譽や階級的地位のための見苦しき爭ひも同樣に消滅するであらう、あだかも勞苦と勞働收益の公平なる分配に於いて、すべての刺戟の消滅によつて、個人の貪慾や、また富有やそして優越的利益獲取のあらゆる機會が支持を失ふごとくに。

それらすべてに於いて、その事自らは殆んど困難でもなくまた何らの疑ひにも曝されてゐない、

しかしただいかにして、すべてに於いてまさしく要求されたものの反對であるところの一つの狀態からそこへ達し能ふかのみが困難でありそして疑ひに曝されてゐる。何故なら今は精神は勞働から、そして勞働は精神から分離されてゐる、そしてこの相互の離反のために第三のもの、みづから謂ゆる「國家」の命令權力にとつては、支配權を自己に取り、そしてそれが本來ただ前の二者に奉仕するべきであつたかはりに、みづからそれらに對する君主の役を演じ、主權を自己に僭取し、一言で曰べば、國家に於ける一機能――すなはち一の奉仕――でなく國家自身であらうと欲することは容易である。精神を失つた、すなはち共同體を失つた、經濟はしかしまもなくこのやうな越權に對して自己を防禦することを學んだ、何となればそれは、ただ見かけのみこのいはゆる「國家」に服從しつつ、實際は「國家」を自己の使役のもとに取り、つねにそれを經濟の欲するところへ、「國家」の欲するところへではなく、向けることを悟つた。そのやうな逆まな意味で政治化された經濟、むしろ眞實に於いては經濟化された政治に、最高の團結に於いて表はされた僻見的共同體としてのそれに、次に、一の精神護養が對立する、それが假想的自由と自己讃美とに於いて高くその經濟の上に浮動するが、しかしそれはそれが勿論畢竟は――その經濟の恩惠に

よつてのみ生息し、したがつてそれが自己に意識してゐるよりも比べがたく以上に經濟に使役せられねばならないといふ關係に於いてこれに拘束されてゐる、そのほかはあるひは全く經濟からはなれて一つの他の次元（ディメンション）のうちに展開しそして一つの生活をまつたくそれ自らのために生きてゐるやうに見える。そのやうにして共同體は全く精神から空虛にされ、したがつて共同體として本來はすでに止揚されてゐる、けれどまた精神はますます殺される、何故なら精神もまた共同體に於いてのほか、そしてそれによつてのほかに生きることができないからである。

もしそれがさうであるならば、いかにしてそれは他樣に成るべきか、成り能ふか？　人が眞摯に意欲しないかぎりは、いかにしても能はぬ。何故なら救助は日毎に同じく困難である、凡俗の悟性と意志とにとつてはおなじく不可能である、けれど、不可能事をも可能にする創造者精神がふたたびめざめるや否や、確實に、能ふ。そのときは狹い意味でいはゆる「國家」の行政力は、沈下せる勞働の共同的精神を、共同體の勞働精神を、ふたたび擧げ高める槓杆力として使用されるであらう。それは必らず精神と勞働とのあひだの破綻したる結婚をふたたび建立し、兩者をふたたび正當なる、兩者に本然的なる關係に恢復しなければならない——そしてそれとともに、正

當なる教師　教育者、一人の正當なる醫師、一の健康なる養護のごとく、自己を次第に缺き能ふものとして、無くてすむやうにしなければならない。兩者は組織化を要する、經濟の勞働も、精神の勞働も、もしもまさに彼らのあひだに結婚が再び確立されるべきであるならば。けれどそれが精神に棄てられてゐることに於いて限界と結束とを失つた經濟も、またその夢想せる自己莊嚴に於いて同樣に內的統一と共同的忠誠とを忘れた精神も、彼らの組織的體制に、そしてそれをとほして彼らの婚姻と名づけたその相互關係の統一の恢復に、達することはできない、彼らはそれを第三のもの、政治的形成から期待する、これはこれに本質的なる唯一性と積極性とによつて同時に政治的になる。政治（ポリティク）は、法と異つて、社會的秩序の唯一性の形式である。法は、それ自體には秩序の可統一性として、ただ政治によつてのみ積極的なものとなる。そのやうにして、もしも經濟が社會的經濟に、精神護養が社會的精神護養になるべきであるならば、兩者にとつてひとしく必要なる緊密なる相互的滲透へと、精神と經濟的勞働とはともに歩み入る。それとともにしかしながら官吏的官僚政治とそしてそれよりもなほ有害なる（何となれば一層甚しく事物の確知なき故に）政黨的官僚政治の殺人的機械裝置はつひに克服され、そしていかなる脈管の末までも魂

の生きてゐる自己統治によつて代られるであらう、ただこれのみが「社會的體制」の名を値ひする。これをもつて、それにしたがつてすべて三つの社會的機能が精密なる協同的作業に於いて相關聯しそしてそのあひだに於けるすべての個々のことを判定し、そして抗爭のばあひには中和すべき規範が與へられる。一たび一つのこのやうな秩序の存立が達成せられるならは、それはそれ自ら直接にそれへの誤りなき學校にひとしいであらう。それは、いままで決して實現せられざりし程度に於いて、自己のうちに確實なる自己保存のそれのみならずまた恒常なる確定と改善のすべての條件を荷つてゐるであらう。

それこそ純正なる國家の健康なる建設であるであらう。それは個々の國家に留ることを許さず、もしくは永續的に留り能はずして、「國家の國家」(シュターアンシュタート)への擴張を、無制約的に要求し、また可能にし、然り、避けがたき必然性をもつて導びき來るであらう。何故なら、吾々の豫想から歸結し來るところの、一つの社會的建設の抗辯すべからざる確信せしむる力に對しては地上のいかなる國民も永續的には反抗することができないであらう、それはその全地球の上をめぐる勝利の前進を確實に信ずることができる、あだかも科學と技術とが、一たび確實に基礎を置かれては、疾う

からあだかも自明のことのごとく、それへと何ら强制するものを要せずして、その業績の殆んど直接なる採用と尊重とを全地球上に於いて見いだすごとくに。たとへ有產者の寡頭政治、惡しく隱蔽されたる寡頭政治ではないまでも、つねにすべてを化合せしむる政黨的官僚政治に向つて進む一つのいはゆる民主政治のあらゆる機械裝置はそれをもつて缺き能ふものとなりまた直ちに崩壞し去るであらう。そしてもはや何らの平和作爲(平和主義)をも要せぬであらう、何故ならそれは、最後に健康にされたる人間的共同體の各人の意志と實行に於ける法的秩序の事實的存立によつて、それ自ら「地上の平和」であるからである。それこそ吾々の求めたものである、救ひへの途である。

四　社會的教育の基礎づけ

社會教育の、すなはち共同體への、教育建設をこそこれよりのち吾々は尋ね求める、そしてこの章に於いては建設のための正しき基礎を尋ね求める。

社會的教育は、あだかも人か大體の構造の完成ののちに一つの住宅の內部の設備を始めるごとくに、すでにそれ自身に完成してゐる共同的生活の經濟的政治的構造のなかへと單に編入せられるべきものではない、否全體の位地取り、築造、保溫、採光、通風、屋根の取りつけ等すべては內部の適住性を目的としてすでに設計の中に準備せられてゐなければならず、されば何ものも外部から氣儘に添加され、もしくは豫じめ熟慮されたる內部に對して外部があだかも一の變更することのできる服裝のごとくに單に作り替へられるごときものであつてはならず、その外部と內部はともに最初の位置取りよりして相共に成長するものでなければならない。何ものも一つの單に外部的なものたるまゝであつてはならない、すべてに於いて一の精神の企畫と特性とは認められねばならない、すべてに於いてそれの單に指導的なるのみならず、なほ創造的なる力が自己を刻

印せねばならない。けれど吾々が建設について語るときそれはすでに外面化である。機械的關係——すなはち單に靜止的(シュタチフシュ)にあらざる動的(ディナミフシュ)關係——は實際すべてのなかに行はれてゐなければならない、しかしそれはのちより追加せらるる反省の事柄である。共同體の生長自身のなかに法則は隱れてゐる、そのなかには實に何らの固定的な法則は行はれずして、ただ——「植物及び動物の形態變化(メタモルフォーゼ)」のなかで曰つたゲエテに從へば——一つの自ら生き生きと動かす法則こそ行はれる。精神は外部から建設に對して示敎的に對するでなく、ただ、自由に內部からこれを生產する、あだかも自然が有機體に於いて自己をみづから築くがごとくに。

あまりにもはなはだしく在來の敎育は生成してゆく人間を單に對象(オブイエクト)として、使用に堪へる材料として取り扱ひ、敎育はこの材料のなかへとその豫じめ確定せる——もしくはよしそれを流動的といはうとも——形相をあとから造り込むことを——もしくはまたたとへ言ひ更へてその形相をそのなかから造り出すことを——事としてゐた。けれどつひにかの少くも理論的にはカントとペスタロッチ以來(むしろすでにプラトーン以來と謂はぬまでも)要求されたる充分なコペルニクス的轉回を、すなはち、「人間にとつて對象たるべきところのものは人間より出でて、彼の固有の

法則にしたがつて、自己を形成せねばならぬといふ透察を、眞劍に考へねばならなくなつてゐる。これをもつて主觀すなはち自己形成的人間は中心に歩み出る。何ものも外部からは來ない――たゞ彼は自己をまづ外部へと投射し、自己に對立するものとして一つの外面を造り、そのなかに決して一の他的なるものならぬ、まつたく己のが獨自のもの、己のが世界を、己れみづからを、認識する。汝みづからのうちに、そしてすべてのうちに、「汝みづからを認識せよ」、それが、プラトーンやカントがあるにかゝはらず今まではほとんど普ねく妥當するところのものには全く反して、教育の合詞とならなければならない。本來いへば何人も自己以外の他のものを認識することはできない、それは實に一つの他の自己に於いてであるが、それはしかしたゞ彼の他の自己といふべきものであり、對象ではあるか。しかし彼の對象である。我と對象との基本關係全體は教育によつてはじめて生み出されるものではない、何故ならそれはもとよりすでにそこに存するからである。その基本關係は忘却へと運ばれることもできる、それはまた誤れる外面化によつて殆んど見ゆべからざるものにされることもできる。けれどその裂けめが破壞的であればあるだけ、それだけその裂けめは痛ましく知覺せられずにゐない、何となれば關係のあらゆる弛緩にかゝはらず

內面的にはしかしながら決して裂き取られることができないからである。そは何故ならば、人間は單に一の身體をもつのみならず一の魂をもつ。魂はあるひは重く病むかも知れない、あたかも死に瀕せるごとく呼吸を求めもだえるかもしれない、更に、死なむと欲するかもしれない、けれど魂はそのやうにして悶えと惱みと欲求そのものに於いて自己の生きてゐることを證據だてる。魂は自己をすでに死んだものと誤想するかもしれない、しかしその誤想そのことは魂が生きてゐることを證示する、それはその誤想に自己を順應せしめてその誤想を誤想として認識し、そしてそれによつて決して死なざる生命への意志を再び意識せしめる途を見いだすのみで足りるに相違ない・そのときにこそ魂は永久に救はれる。

このことがまづ謂はれなければならないならば、そは一の教育にとつて決して善き兆候ではない。しかしもしそれがさうでなかつたならば、實に何らの教育もなかつたであらう。教育はしかしながら成りゆくもの、人間に於ける兒童を唯一にそして休まず取り扱ふ、されば教育にとつてそれは實につねに目のまへになければならなかつたはづである。もしそれが教育者自身にとつて見失はれたのであるならば、それはただそれだけますます力强く、あたかも失はれたる樂園から

の挨拶のごとくに、兒童に於いて彼の眼前に立たなければならない。何となれば兒童は實に全く感性的精神的創造のこの直接性、無邪氣さ、原始性、不分の全一に於いて、まさしくかゝる共同に於いて生きてゐるからである。人が自からそれを自己のうちにもはや見いださず、却つて一つのまつたく拘束されたる生活をたゞ間接性と遠離性と、感覺を喪失した精神性とそして精神を抜かれた感覺性との不具のみのうちに生きてゐるからこそ、それは誤認されることができる。かゝる分裂からこそ人は幼年期を、一般に未成年期を、低級の階段として、未成熟として、たかだかこれからひらくべき萠芽として、これから完成すべき未完成物の單なる總括として、つねに自己を完成されたるものとして考へるもの、上に立つもの、それに於いては殆んど何らそれ以上展開すべきところなき、況んや教育すべきところなき成熟者、の立場から誤解する。しかるときは兒童はまつたく外部に依屬するところの、缺乏せる、そしてそれにとつて教育(エルチーエン)せられるべく、すなはち老年へと引き上げ(ヒナウフチーエン)られるべく、運命づけられたるものゝごとく見える、あたかも幼少年は單に追ひ立てられ、否、まさしく、滅ぼされるために存するかのごとく。幸ひなことには、若さは滅ぼすべくもない。けれど幼少年が、それがより力強く幼少年であればあるだけ、それだけます

ます力強くこれに對して自己を防ぎそして遂ひに反抗することは、そしてそれがそれに對する老年の痛切に知覺せらるゝ敵意に向つて同樣の、たゞより誠實なる、同樣に無制約的なる敵意をもつて答ふることは、そのことは、それがそのやうにも公明に顯著なるにもかゝはらず、教育の側からは、おどろくべきことには、もしくは驚ろくに足らざることには、それがますます著大に眼前にあるだけ、まさしくそれだけますます感知せられずにゐる。それは實際ただ人が期待しなければならぬあたりまへのことである、何となれば實にそのときは教育の側に於いては無理解が、そしてその下に苦しめらるる幼少年の側では對他感と自己閉鎖とが最高度に達せずにゐないからである。しかしながらなほ一より他への一つの通路が、兩者が合致することの一つの最後の可能性が、人が双方に於いてなほ感知するごとくに存立するかぎりは、それはさうなつてはならない。そのとき教育の側では必ずしも善き信依を缺いてゐるといふことはできない。教育がますます誤謬のうちに沈んでゐるだけ、それだけますます恃み深く教育はあらゆる歸結をそれから引き出すであらう。けれどもし教育がしかるのちその効果を見て、すなはちその無効果を見て、自己の豫想に於いて何らか誤りがあつたといふことを思ひ及ぼすならば、それこそ驚ろくべきことである。

けれど教育者はしばしば、彼らの「上への教育」の誤想よりして、自然的地盤との原始的同一からそのやうにも懸絶し、内面的にそのやうにも甚しく乖離し、その抽象性に於いてそのやうにも完成され、彼らの完成狀態に於いてそのやうにも至當なる意味に於いて拘束せられてゐる。されば彼らは兒童に於ける原始的同一や、自然のなかに、自然をもつての不分の、したがつて拘束せられざる生命をまつたくもはや理解する事ができない。彼らは兒童に於いてただ不完成なるもの、不成熟を見る、兒童の無決斷性てふうつくしき特長は彼らには畢竟一の缺陷としてみえ、兒童の不可完結性、彼の眞の無限性はただ浪費的なる不明瞭性として映じ、これに對してはできるだけ速やかに彼らが兒童に與ふべき方向の規定性によつて助くべきものと考へられる。一般には教育は兒童がそれに對して義務を負ふところの、そして負へりと感ぜねばならぬところの、贈與たらむと欲する。勿論素質(フンラーグ)はそこに存せねばならぬ。けれどまたこれも、充分に顯著なことであるが才賦(ガーベ)、天賦(ベガーブンク)と名づけられてゐる、すなはちそれは人がそれをある何ものか外部から賦與せられたるもの、それに對していま更に加へて賦與せらるべきものと考へる、しかしてそれを、そのやうにしてすでに才賦あるものはそれ以上の贈與を受納すべくそれだけますます熱心であるにちがひな

いと、そしてこれに反して才賦なきもしくは弱きものには同樣の程度に於いて何ものかを與へることが困難であると考へられてゐる、何となればこれに於いてはそれが類を同じうするものとして結びつきうるところのものが缺けてゐるからである。そのやうに人は「才賦あるもの」の向上を、かの箴言の、有てるものには、彼が滿ちむがために、與へらる、といふ言葉とほりに考へてゐる。しかしわづか「もつ」もの、才賦少きものからはその有つものさへもまた奪はれる。何となれば彼のために報償として考へられた外部からの賦與は彼にとつて今や必然的に殆んど堪ふべからざる强制となるからである。それが彼にますます甚しく强ひすゝめられるだけ、それだけますます頑なに彼はそれに對して自己を閉ぢるであらう、そしてその避くべからざる結果は、彼が教育からつひに全たく望みなく拋棄せらるることである。そしてしかも彼はあるひは內面的源泉力に於いてはもつと豐かなものであつたかもしれない、ただその源泉力が類を異にする、外部から來る賦與に對して甚しく開放的そして敏感であるにはあまりにも內面的であつたのかもしれない。人はまさしく深き素質をもつた人々の幼少年期の歷史を研究してみよ、さうすればそこから實例は群がり迫るであらう。まさしくもつとも本源的なる天賦はもつとも確かに誤解せられる、何となれ

ばそれは人が天賦をただ教育が與へんとするところのもの、そしてそれに對して兒童が感恩的に受容的にふるまふべきものによつてのみ測るからである。この宿命はそのうへに決してもつとも強大に才賦あるものに命中するのみならず、それは多かれ少かれ何人にも命中し、もつともひろくはしかしながら直接に勞働しつつある「民衆」に命中する。民衆からこそ實にまつたく原始的に天賦あるものは殆んど獨占的に發出する。彼らのなやみは眞に普遍的なる惱みである、ただそれは彼らに於いて充分に意識せられたる體驗となりそしてつぎにまた何らかのしかたで自己を語る、一方他の群集はそれを無言に、たかだか半意識的に荷ひ、さはいへそれ故にとて決してより少からぬ苦痛と憤懣とをもつて感知しそしてまた沈默しつつ彼らに對して暴力的に强制せられたる教育の賦與物に對する無關心と無感謝と明瞭なる敵意とによつて、注意深きものに對しては、明らかに示してゐる。ここにはまことに單に個別的ならぬ、まつたく普遍的なる、社會的なる意義をもつ一つの事柄に關する。

成りつつある人間が完成したる人間よりも依屬的であるといふことは全く眞實に反する、とまで吾々は極言して差支へなく、むしろせねばならない。成りつつある人間は、內面より創造しつ

つ、彼の環境世界のなかにそのやうに不分に生きそして世界は彼のなかに生きてゐる、そしてそれ故に彼については本來いかなる依屬についても、語ることができない。成りつつあるものは、それが自己の內に於いて不斷なるごとくに、また世界から折離せられたものでなく、彼はその世界のなかに組み入れられたでもなく、また單に自らを組み入れたものでもなく、却つて彼は世界を內的に自己みづからのうちにまづ組み成すのである。それ故に彼はそれのなかに於いてつねに全く己れの正當の位置に在り、彼は何を彼が世界のなかで欲するかそして欲すべきかを知つてゐる。そして彼はその見かけの狹隘のうちにありながら、その充實せる直接性の故に、全く彼が世界のなかに於いてあるべきところのものである。彼は感覺的に拘束せられたるごとく見える、何となれば彼に於いて感覺は精神から、精神は感覺から解き離されてゐないからである。またこの兩者のあひだに於いても何らの依屬や憑依は存せず、ただ不斷なる同一、最大の獨自性、充實せる個別性、感覺的なるものと精神的なるものと不分性が存する。まさしくそれをもつて創造的な威力は、その全的なる非被反省性に於いて（力は反省の時をもたぬ）意志的でもなくまた知的でもなく、全くこの分裂の此岸に存在する、これに反して教育はこの分裂を

その各行爲に於いて豫想しそして要求し、いかにそれがまさにこれをもつて兩者、すなはち知力と意志との純なる根源を涸らさむとする危險にあるかを豫感だにしない。

この誤謬は解しえられる、何となれば言語の最初の充分に理解せられたる單語よりしてすでに充實せる直接性は消失してゐるからである。「傳達」としての言語は、たとへそれが觀念（フォアシュテルンング）すなはち代理（シュテルフェルトレーツング）の意味に於いてであれ、（一者は他者のために、言語は物のために、形容は形容せられたるもののために代理となる）または命令の、または要請の、またはそれらへの答への、意味に於いてであれ、避けがたき仲介となる。言葉に於いては單に「理解」のみならず、行動（一人の他人に向つての、他人に關しての）が演出せられる。また理解すなはち自己を理解せしめることは（それこそ實に言葉の仕事である）は一つの行動である。それは交通の活潑性を減ずることはない、後者はただそれ自身一つの直接なものでなければならない、それには言語自身に純粋なる自己發言の不可解なるもの、有意的ならざるもの等を許容しなければならない、例へばそれはもつとも純粋には大部分言葉を用ゐざるしかし雄辯なる對話や、母と乳兒とのあひだの愛撫的言語に於いて形づくらるるごときものである。そこは何らの抽象なく悟性なくまた氣隨なく、何ものも凝固

せず、固定せずまた固定せしめない、すべてはあるひはやさしくかなたへ經過する、あるひは急速に迸出する運動の流れのなかに留まる、そしてまさしくそれをもつて創造者的であり、詩人的であり、あらゆる意味に於いて藝術的に自己を形成しつつあるものである。そのやうにまた本來の意味に於ける言葉の時期に於いても何ら辭典的そして文法的に固定されざる、活字的になつた「言葉」の無味乾燥さもあつてはならない、却つてただ形づくられざる、むしろみづから形を定めゆく、生きながら自己を展開する形式でなければならない。人はまだ今日つねに次のごとき事實についてあまりに不明瞭であり、それにあまりに留意せず、幼年期の教育や幼少年者一般に對しての位置についての正しき歸結をそれから引き出すに到つてゐない、その事實とは、兒童がその世界全體を、そのなかに横はりそして展開するすべてそして各々のものに對する彼の關係とともに、まつたく自己のものからまづ築きあげなければならないといふこと、そして何人もそれを兒童に與ふることができないこと、それがすべて彼によつていはば創作せられ、形成せられて一つの詩または圖象となり、しかしそれは眞實さに於いて決していはゆる、すべての人に共通なる、現實に劣らざるのみならず、否あたかも詩人や藝術家にとつて彼の內面的に直觀されたる眞理が

あらゆるかゝる「現實」以上の價値を有つがごとくに、同様に高くこれを超越する、といふことである。これが自己を語り出すとき（それは語り出さざるを得ぬわけではない．しかしつねに自己を語り出さむと欲する）人はそのやうな言表に於いて何ら既成の概念を、在るところのものの概念（悟性がそれの存在を定立するがごとくに）をも、またあるべきものの概念をも（意志がその「べし」を發言するがごとくに）何ら求めてはならない。それらのすべては外へと向ふ、それは自由なる創造と內部からの自己言表の特有の威力を妨げそして破壞する、（しかも全部の理解作用、純粹なる意志作用はただこの威力のみから萠芽するのである。）自己はそれに由つてそれに適合せる、その支配的なる中心的位置から投げ出され。周延よりして支配され、幾様にも惑亂され、一つのそれにとつて類を異にする普遍的なる枠づけの强制のなかに繫がれる。成年者の經濟的そして政治的動作そして行爲のあらゆる間接性、假裝、偏歪はそのすべての害惡とともに、そのときには、みづから教育（エルチーウング）と名づくるところのものに反映する。これはそれとともに、あらゆる愚昧のなかに無抵抗に順應することを學べるが故に自ら完了せるものと思惟する人々の僞られたる歪められたる生活の愚昧への暴力的なる引き入れ（ヒナインチーウング）となる。（けれどかゝる人々はただその愚昧を

もつて完成せるものである．何となればその愚昧が彼らをもつて完成せるが故に。）

このことは言語的形成の普遍的にあまりに高き評價に於いて顯著に自己を表明してゐる、しかしそれは決して純正なる、すなはち自由なる、形成（型づけ）ではなく、たゞ壓迫すること、轡をかけること、魂に制服を着せることとなる。兒童と民衆とはこれによつてもつとも甚しく壓迫されたるごとく、排斥され、深奧の內部に於いて誤解されそして尊嚴を傷つけられたるごとく感ずる。兩者に、ただ赤裸々なる生活を許すときに、特有そして自明なる、言語そして思惟樣式の單純に確實なる直實さ、正直な內實さは．まさにかゝる性質がそこから自己を養ひそしてその全體の力を引きだすところのもの、すなはち、直觀する目の、創造する手の、直接的勞働とおなじく、言ひ表はされたるにせよまたは沈默せるにせよ．侮辱され、迫害されて感ずる。それは何ものか奴隷に似合はしきもの、誇りやかに上に立つものにはふさはしからぬものとして、輕蔑せられる。それは社會的造層の精細なる反影である、それはこれを．その原因と結果とともにひとしく、反映する．何となればこれら兩者は全く自然に共に進む、そして內的そして外的生活建設の禍ひなる分割——一つの低き、感情的なる圈とそして一つのより高き、いはゆる純粹に精神的なる圈と

に、しかしてその一は一の下級の、權利上被使役的なる階級に、他は權利上支配する上級の階級に專屬的に配當せられる――はそこから人間生活のしたがつてまた人間的教育のあらゆる概念を醜惡にし偏歪ならしめつつ貫ぬき進み、兩者に、かの眞理を愛するものにとつていづれに於いて心を痛ます深き非眞實さと見かけらしさの特徴を、頒ち與へる。

ペスタロッチはかゝる頽廢をすでに明晰に眼前に視そしてそれに對する戰鬪に身命をささげた。人は彼を高く讃美し、人のいゝ思ひあがりをもつて、彼の足跡を踐みつつあるかのごとく自ら誇る、しかも人はその言ひそして爲すすべてのことをもつて、彼のもつとも嚴肅なる警告にまさしく反して行ひつつあることに氣がつかない。人はペスタロッチのいはゆる直觀の要求の、自己行爲の要求の、眞に單純なる意味をさへもはや理解しない、人はいかに彼にはこれら二つの概念のもとに、感覺的なるものと精神的なるものとが分れて互ひに對峙するのではなく、ただ一であり、一の感覺精神的、精神感覺的なものであるか、兩者がまさに直接に、根源的に、個性的に、そして個別性に於いて普遍的であるか、そしていかにこれこそ唯一に基礎を形づくるもの、根本的なもの、そこからすべていはゆる精神的なもの、すなはちそれが知性と呼ばるるにせよ意志と

呼ばるるにせよ、個別的精神的なものがその力を引き出すところの、それ故に決して離すべからざるところのものであるか、を理解しない。人はまさしくそれ故にまたペスタロッチの教育的事業全體の意義にとつて決定的な意味をもつ兒童と民衆との尊重、いひかへれば直接に感覺し、生活しそして創造しつつある人間の尊重を理解しない、また人は何故にこの獨特なる熱心家にとつてそのやうに絶えまなく民衆と民衆兒童との困窮が魂を燒くごとき悲しみを與へたか、そしてそのために彼の教育學的考量の一つだにかつてこの地盤から、そのあらゆる重荷と惱みをもつての勞働の荊棘と薊の野から離れて純粹精神的なるものの讃美されたる幸福の園に飛翔しなかつたかを理解しない。一人のペスタロッチほどの人が勞働の感性的要素への魂の賣却について說かうしたであらうか？ 實にいかにしてもさうではない。彼にはたとへ最も低級なる勞働に於いても何ものも精神を排除する意味に於いて感性的ではなく、また人がそれへと自己を高め能ふ最初の精神的なものに於いても何ものも感性を除外する意味に於いて精神的ではなかつた。むしろ人間の不分に感覺精神的そして精神感覺的なる性質の豫想よりして彼にはまたみじめなる日給のためのもつとも感性的なる勞働さへも決して魂なきものではなかつた、そしてそれをつぎにはまた逆に

言ひ替へることができた、「魂は日傭かせぎをしない。」それは實に今日には嘗つてよりも一層吾々すべてに必要となつた教育的叡智である、何故なら勞働者が全くは彼の勞働から自己を分離せず、そして精神が、ただに高く勞働を超越するのみならず、あらゆる比較の外に、勞働に對して遠くそしてよそよそしく位置を取る輕蔑によつて、その閉づべきであつた裂罅をなほ更に擴げることなきは一にこの透察に依屬する。精神はそれが自己の由來するところ、感性からにはあらずしかしながら人間本質の感覺的精神的統一根據から由來するところを、あだかも吾々すべてが畢竟はそこから出た低級の民衆から出て貴族に列せられたる成りあがりものの爲すごとくに、恥づるならば、それはただ自己にみづからその最善の威力と內面性、眞實性そして內容の充實を消盡することであるといふことを思ひ及ばねばならない。決して直接的勞働のかゝる誤れる評價について「理想主義」は罪はない。偉大な理想主義者らの一人としてこれについて不明瞭ではなかつた。これについて罪あるものはむしろ社會的區分のはなはだしく非精神的なる、理念を敵とする、もつとも深く非自由なる支配と被使役の精神である、ヨーロッパのあらゆる國民のうへにその汚穢なる汎濫を注いだ解放されたる資本主義のみじめなる遺產である。ドイツの理想主義は永いあひ

だこの汎濫に抵抗した、またそれも不幸にしてこれを堰きとめるだけ充分に力强くはなかつた、けれどそれは理想主義が內面的に何らかのものをこれと共通にもつてゐたからではない、それはそれがあまりに單に內面的なるまゝに留まりそして全民衆の敎育へと、これをあれほども明瞭に自己の課題として理解しそしてあのやうに多くの眞摯と深さとをこの課題に向けたけれど、なほしかし自己の要求に一致するまでにそして日日に增大なる危險がそれを要求したごとくに、それほどには深く徹入しなかつたからであつた。ドイツの理想主義は、私は思ふ、今やこの要求によりよく應ぜんとする途上にある、しかし今日ではその指導者らも、いかに名狀しがたく多くのことが等閑にされてゐたか、いかに多くのことが更改されるべきか、それともにいかに根本的に純正なる民衆敎育の基礎が單にただ掘り出されるべきでなく、否全く新たに置かれるべきであるかを、以前から、充分に生き生きとは感知してゐない。

どこにそれを置くべきか、それはこれをもつて言はれた。吾々は更にいかなる場所が人間陶冶の感覺的精神的其礎づけに唯一に適當してゐるかを問はう、さうすればこの問ひは正しく社會的敎育の新建築の全課題の中心點へと導くものである。私は主張する、吾々の要求に適ふ唯一の環

境はその原形すなはち家庭集合に於ける經濟の組合的建設である。組合的建設、それは吾々にとつて意味する、全體として何らか何人かの利得を目的とせずして純粋にすべての參與者の健全なる生活建設のために必要でありそして促進せられるべきものたるあらゆる財の生産と確保とを目的とする共同的勞働作業の施設と遂行とに對して直接的勞働者が充分に自己より參與する事を。無勞働的利得とそして無利得的勞働とをひとしく排除するところの、人間とその生活に必要なるそして生活を促進する勞働とのあひだの直接的關係、これこそ魂の陶冶そして共同態陶冶の健康なる養ひの地盤であつてこのほかにない、何となればこれはただ感覺精神的そして精神感覺的生活の直接性とそして共同的勞働者のかゝる生活關係との基礎のうへにのみ生長しあたふからである。「利得」、それは快樂物や消費のための財の購買力を意味してはならない、それは盡くることなく人間に人間らしき生活を築きあたふる純正なる財の獲得を意味しなければならない、これに對してはすべての外的に造り出しうべき「財」(ギュター)はただ自體には、たとへ缺くべからざる手段そして豫件ではあるが、無差別なるものである、それらは必要品である、けれど「よきもの」(ダス・グーテ)自ら、すなはち吾々の生活をまことに築成するところのものではない。

吾々のいままでの考察がすでにそれを前提として出發したところの、もつとも緊密なる結合、すなはち母と乳兒との結合は、根抵に於いて、この社會的關係の純粋典型である。何となればそのなかに於いては何ものもただに感覺的でない、そしてそれに於いて身體的にとおなじく靈的にそして精神的に自己を築成するものはただ兒童のみならず、より少からず母もまたさうである、母はその母性に於いて自己を築成する。そしてそのやうにして兩者の行爲は、その包含するそしてそれにはなはだ明瞭に勞働としての性質を賦與する苦痛や辛勞や犧牲の總量をもつて、ただ一者や他者にとつての利得たるのみならず、そのやうにも純粋なる直接性、始源性、自然より湧き出る力强きに於ける共同態の築成である、されば最高の宗教とそして最高の藝術が神的に純眞なる人間性の、人間的に純眞なる神性の普遍的なる、そして何人にも自ら明白なる根源的象徴を定立したことは道理あることである、また各々の自然的に感覺する人が吾々を養ふ大地を母として敬しそして生けるもののごとくに呼びかけることも道理あることである、何故なら地こそ吾々を生みそして養ひそして吾々をすべてそれが吾々とともにその胸に抱くあらゆる生けるものと深密に結びつけるものであるからである。人は經驗多きものに問へ、人は永いあひだ母の胸に抱かれ